
流星紀行文

栗

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星紀行文

【Nコード】

N5196Z

【作者名】

栗

【あらすじ】

星河スバルはある目的を胸にコダマタウンを出る。隣には金髪のコスロリ少女と三本のランスを背負う紫長髪の女性が立っている。スバル達は旅をしている中で、二百年前の戦士達や世界の裏を見ることとなる。お人好しな彼は目的を忘れて目の前の問題に首を突っ込んでいくのだった……。

注意 この作品のスバルはモテます。スバミソ、スバルナ押しの人は見ない方が良くと思います。

プロローグ

宇宙……

大きな丸テーブルを囲むようにして座っている五人。
その集団の主である電波体は、

「シリウスがやられた」

苦しそうに、しかし冷静な顔を崩さずに伝えた。

その言葉に四人は驚きを隠せなかった。
だが一人。

その悲報にも動じない電波体。

「自分から言っちゃまうと、あんなコレクションとか言って不要なものばかり集めてる完璧主義の野郎シリウスが消えても、かまわねえけどな」

高く、透き通った美しい声が、興味なさそうに答える。

そして、爺と呼ばれし電波体の発言に反応した電波体が一人。

「プロキオン！シリウスがやられて『冬の大三角形』は私とお前だけになったんだぞ！！」

「うっせーなー、ベテルギウス！だいたいあの野郎は会議にも全然参加してなかったじゃねえか！！」

これ以上騒ぎ出すと面倒なので、爺と呼ばれし電波体は一言で制す。
そして、沈黙が訪れたのが分かると、再び口を開いた。

「シリウスは困った奴だったが、腐っても宇宙を統括する者の一人……。奴が倒されたことは、無視できない事実だ……ヘリオス、どう思う？」

「確かに、そうだな……シリウスを、倒した奴は、危険な存在……野放しには、できない」

ヘリオスと呼ばれる電波体は、一言一言区切るように口にしながら首を縦に振る。

爺と呼ばれし電波体はヘリオスの言葉に満足したように、

「その通り……よって我らは、危険分子を排除することにした」

これからの方針を固めるが、それを遮るように一人の電波体は言う。

「残念だが……俺たち『夏の大三角形』はこの作戦には参加しない………うん」

「正気か！？アルタイル！！」

ベテルギウスが、アルタイルを信じられないといった顔で睨む。睨まれたアルタイルは首を横に振りながら、

「シリウスなんて、俺の知ったことじゃないのでね………うん」

そう言って、アルタイルは席を立つ。

その様子を爺と呼ばれし電波体は溜め息混じりに見送り、皆に向き合う。

「………まあいい。ここにいるのも十分だ」

「ロックマンという危険人物の排除にはな！」

一話 不幸な少年

青々とした葉が微動だにせず、燦々と輝く太陽は生き物達に夏の始まりを教えてくれる。

虫達は気が済むまで己の喉を振るわせる。

そんな騒がしい夏の真昼。

今日の星座占いは最高だった。

なにしろ金運、恋愛運、仕事運、健康運、と全ての項目が星五つ。もう何しても、どう転んだとしても、幸福しか舞い降りない。

「あの星座占い……もう信じないぞ」

目尻に涙を浮かばせながら、少年、星河スバルは呟く。

夏休み初日。

六年生となった星河スバルにとって小学生最後の長期休暇。

めでたい休暇の初日だし、ちよつくら出掛けようかな……と考えた矢先だった。

犬の尻尾を踏み追い駆けられ、乗ろうと思ったウェーブライナーには乗り遅れた。

なんだよ、やつぱり不幸じゃないか。

スバルは半ベソかきながら、足元に転がる石つころを蹴り飛ばした。石つころは滑らかな弧を描きながら、誰かの靴にぶつかった。

「あつ……すいま………せん」

スバルはお得意の謝罪を繰り出しながら、相手の顔を確認して、青ざめる。

スキンヘッドだった。

簡単に言えば不良である。

「あぁん？オイツコラ、坊主……」

案の定その不良はスバルに近づいてきた。

正直、怖すぎる。

スバルは地球を三回救った少年だ。

だがやっぱり彼は普通の男子で小学六年生であり、つい数年前まで下ネタを言って喜んでいた、ただの小学生だ。

不良は怖い。

ので彼がやるべき行動は唯一つ。

「ご、ごめんなさー！ー！ー！ー！ー！ー！」

逃走だ。

スバルは今までの戦いの経験から逃げる速さを学んだ。

今の彼に追いつける存在など、チーターか電波生命体ぐらいだ（自己主張）。

漫画のように土煙を撒き散らしながらスバルはウェーブライナーの駅から離れていった。

そして取り残された不良は一言。

「小石を蹴ったら危ないよ……」

うだるような熱気が支配するコダマタウン。
そんな暑い中スバルは立ち尽くし、誰かに当たるわけでもなく叫び出した。

「何だよ！何だよ！！何が『もう何しても、どう転んだとしても、幸福しか舞い降りない』だよ！！石ころ転がしたら、スキンヘッド登場じゃないか！！幸運じゃないじゃん！！」

一人で叫んでるように見えるがこれは断じて独り言ではない。
だからと言って、神様が聞いているんだ！！とかいうファンタジーを言っているのではない。
ちゃんとそれを聞く者がいるのだ。

この世界では一人一人がハンターV.Gというものを持っている。
そして中には演算や様々な作業を可能とするプログラム、ウィザードがいる。
彼、星河スバルにもそのウィザードを持っているのだ。
少し特別な……

『スバル！落ち着いて考えてみる！お前は全然不幸なんかじゃねえだろ！！』

「なんでさ？ロック……」

スバルのウィザードの名はウォーロック。
普通のウィザードではない。

というのも、彼は宇宙人なのだ。

信じない者が大多数であろうが、紛うこと無き宇宙人なのだ。

『お前は俺のようなウィザードを所持してて幸せじゃないか?』

「あゝ、もうあの占い番組、絶対見ないぞ」

スバルは自然にウォーロックの言葉を無視すると、ウォーロックはイラつき始める。

彼は短気と勝負好きが自慢のウィザードである。

『あーっ！じゃあもう知らねえからな。電波変換してやらねえからな』

「ッ!?!」

ここでスバルは彼を怒らせたことを後悔する。

ウェーブライナー 駅でスキンヘッドを怒らせてしまった以上、駅周辺に近づくのは危険だ。

ウェーブライナーを使えなくなり、他の方法となると目的の場所に行くには電波変換が必要となってくる。
少なくとも歩いていける距離ではない。

「そう言わずにさゝ。ロックくゝんゝ」

『フンッッ!!』

「委員長みたいなことしないでさゝ」

「どうかしたの?」

「あゝ、聞いてくださいよ。僕のウィザードが僕の知り合いみたいにスネタ態度を取るんですよ」

「知り合いとは?」

「僕のクラスの委員長で何かと上から目線でお姫様みたいな態度で冷たいいいいけど本当はとっても優しく明るくて相手の事をいつも考えてくれる思いやりのある女の子ですよ」

「もう、遅いわよおおお!?!」

「痛い痛い痛い痛い！！！」

気づいた時には遅かった。

もうフォローも回らなかった。

無残にもスバルは、張本人委員長こと白金ルナによって頭蓋骨を圧迫される。

何か策を講じようにも解決策らしきものは見つからない。

だが、ルナはそこまで鬼ではないらしく、しばらくすると手を頭から離してくれた。

で、

「貴方はこんなところで何しているの？」

「うん、これから少し出かけようと思ってさ」

スバルは痛みによる涙を手でゴシゴシ拭き取りながら、その質問に答えた。

続いて、一体どこに？ と更に追求してきたルナにスバルは観念したように答えた。

「アマケンだよ」

二話 ヒーローとの再会

スバルは相対する幸運と不幸の二つを噛み締める。
この短時間のうちにこの二つが彼を襲ったのだ。

まず幸運。

なんと再び駅に行っても、スキンヘッドはいなかった。
駅に向かう途中に十ゼニー拾った。
以上である。

次に不幸。

ウェーブライナーの中、何故か隣には委員長が座っている。
ウェーブライナーに入る時にガムを踏んづけた。
以上である。

「これは別に僕が不幸なわけじゃなくて……あれだ。そう、あれだ。
幸運と不幸が二つずつということでもノーカウントということでも、ど
う？」

『ていうか、それより前に不幸のオンパレードだったし、ノーカウ
ントじゃないだろ？不幸が幸運を上回ってるだろ？』

「それは言わない約束だろ！！」

『約束してねえよ！！』

「まあまあ二人とも落ち着きなさいよ」

スバルとウォーロックの喧嘩が始まりそうな勢いだったが、ルナの
仲介があつたために二人は仲直りする。
気を取り直して、聞くことにしよう。

「何で委員長が付いて来るの？」

「クラス委員長として、生徒の安全を守るのは大切でしょ!!」
クラス委員長関係なくね?と反論したかったスバルだったがそれは心に留めておく大人な対応。
自画自賛するスバルに次に掛かってきた言葉は意外な人物からだった。

『ルナちゃんはスバルさんと一緒に出掛けたかっただけですよ』
「こ、コラ!モード!!」

モードとはルナのウィザードの名前。
モグラのような姿をしたウィザードだ。

「ふん、でも僕なんかと?」
『はい!なにしろスバルさんはルナちゃんの……』
「何でもない!何でもないので!!」

ルナは必死にモードの口を押さえる。
何をそんなに必死に?、と首を傾げるスバル。
スバルの特徴は鈍感である。

二人にして四人は目的地
最寄り駅に着いた。

天地研究所、通称アマケンの

ウェーブライナーを降りるとそこには花園が広がっていた（スバルビジョン）。

実際に使用されたロケットや世界で初めて宇宙に飛び立った外人の宇宙服など、宇宙大好き！将来は宇宙飛行士！の星河スバルにとつては最高の光景。

「そんなところでポーッと突っ立ってないで早く行きましょうよ」

「えっ！？ああ……そうだったね……行こうか……」

ルナの一言で、スバルは露骨に残念そうな顔をしながら首を縦に振る。

外に飾られている展示品に別れを告げながら、スバルは、先に先に歩いていく委員長ルナを追いかけた。

ウイイイイン、と音を立てながらアマケンの自動ドアが開く。

スバルにとってこの音さえも心地よい。

自動ドアが開くとそこは理想郷アガルタだった（スバルビジョン）。

完全にスバルの視線はその理想郷アガルタに向かっている。

例えるなら目がハートマークになっているのだ。

「ちよ、ちよつと貴方は天地さんに用があつて来たんでしょ？」

「はっ、そうだった……ありがとう委員長、僕はもうすぐで魂を奪われるところだったよ」

「真顔で言われると困るわね……」

「さあ行こうか、委員長」

二人は天地の部屋へと急ぐ。

昼飯時の時間帯であるからだろうか？、職員の様子がほとんど見えな

い。
もしかしたら天地さんも昼飯食べに行ってるのかな？、と少し心配しながらも天地の部屋に入った。
天地はいた。

「天地さん！」

「おっ！おおスバルくんか。久々だね……」

久しぶりというのも、最後の事件メテオG以来会っていなかったためである。

メテオGの事件以来となると、確か……

「五、六ヶ月前ぐらいじゃないですかね？」

「そうだね！いや、通りで大きくなったような気がするよ」

「まあ実際、五、六センチぐらいは伸びたと思います」

「そうか大きくなったね……えっとルナくんも来たの？」

「はい！私、委員長こと生徒会長である白金ルナがこのおっちゃんちのクラスメイト星河くんをサポートするために」

「はい、彼女と一緒に来たいといったので」

なっ！？と頬を赤く染めるルナを尻目にスバルは質問を始める。

最近、ここコダマタウンではある事件が勃発している。

コンクリート製の道路、地面、木々等、コダマタウンにある様々なものが破壊されている、謎の破壊事件。

スバルもこの現場を見たことがあり、これは人の手によって齎されたものではないと逸早く察した。

「あるとするならば電波体……と考えたわけだね」

『……でスバルがアマケンで調べてもらいたいんだとさ』

先を読んだ天地に、ウォーロックは頷きながら簡潔に用件を述べる。天地は頷きコンピューターを立ち上げ、思い出したように顔を上げる。

「そういえば、その事である人もここに來てるよ」

「あの人？」

天地は笑みを浮かべながら、指で隣の部屋の扉を指し示す。そしてその扉はバタンツ！と激しい音と共に開いた。

「ようスバル！俺のこと覚えてるか？」

「まあ忘れたくても忘れられない顔ですから……一応、」

スバルは目の前に現れた男に皮肉な顔を出す。

その男は特に気にした様子もなく手に持つ細長い菓子類を口に運んだ。

サクサクサクサク、とその一本を数秒で食べ終わるとスバルを見て、

「ヒーローの登場だ！！」

高らかに言い放った。

その宣言を数秒間を空けてスバルは拍手で迎えた。

「暁さん、久しぶりですね」

「ああ……無事に退院できたし、完全復活だ」

シドウはキビキビと体を動かし、元気だぞアピールを始めた。その光景を天地、スバル、ルナは苦笑いを浮かべながら見る。数日前まで入院していたとは思えない体の動きだ。

そして、シドウはアピールを終えると、何時になく真面目な顔を
する。

「……感動の再会はここまでにして、お前達がここに来たのは、破
壊事件についてだろ？」

「はい……あれは人が出来る芸当ではありません……きっとこれに
は裏があります」

シドウとスバルは話し、それが終わると同時に天地は三人に聞き、
キーボードをカタカタと音を鳴らし始めた。

その音が鳴ると同時に四人の目の前にリアルウェーブの応用なのか
コダマタウン全域が立体的に映し出された。

そしてその立体地図に線が引かれ、その先に様々な写真が映し出さ
れていく。

その写真は惨いものだった。地面が溶け、家の壁が砕け、サテラポ
リスの戦闘ウィザードですらその原型を留めなくなるほどまでに破
壊されている。

「これは………！」

「ルナくんの思っている通り、最近コダマタウンで多発している破
壊事件の現場の地図だよ」

天地は視線をコンピューターから外さずにルナの質問に簡単に答え、
そしてキーボードの音を鳴らした。

その天地の動きに合わせて、横たわっていたリアルウェーブのコダ
マタウン全域地図は起き上がり、四人に見えるように位置を変えた。
そしてスバルは気づいたように目を見開く。

「スバル……気づいたようだな」

スバルはシドウの問いに首を縦に振る、ちなみにルナは後ろでお手
上げといった感じで首を傾げる。
スバルは少し焦るように額から汗を垂らし、歯がゆい思いをしてい
るように下唇を噛む。

「……事件は僕らの近くで起きている」

その立体地図に目立つように打つてある赤い点は恐らく事件の発生
現場……そしてそれは全てスバル、ルナの家もちろんのこと、そ
こら周辺で起こっているのだ。

おかしすぎる。

コダマタウンは他の町よりも少し小さな町であるものの、町として
恥じない大きさを誇っている。

そしてスバル達の家はコダマタウンのほんの一部分だ。
にも拘らずだ。

そこで一部分の場所で事件が起こっているのだ。

「なにか僕らに関係が深いことが目的の者の仕業か……」

『そんなもんどつでもいいだろ！とにかく俺たちがそいつを倒しち
まえばいいんだろ？』

『ウォーロック、甘いですよ』

なっ！？、と頭に血が上るウォーロックなど気にもせずアシッドは
続ける。

『相手は何が目的か分からない……星河スバルかもしれないし、白

金ルナかもしれない、もしかしたらウォーロック……貴方もかもしれないですよ」

正論を述べたアシッドに対して反論することが出来ないためかウォーロックは押し黙った。

それを天地は苦笑いで見て、それからまとめるかのように言った。

「とりあえず、スバルくんが直接動くのは控えたほうがいいね」

スバルはそれを聞いて顔を強張らせた。

スバルはとても重要な戦力だ。

戦場から抜けてしまうのは正直キツイ。

それでも心配させないようにシドウは声をかける。

「大丈夫だ。俺が何とかするからよ」

スバルはそれに顔を固めながらも笑顔で答えた。

コダマタウンの大通り……

彼女は歩道でペタンと座り込んでいた。

道路では忙しなく車が通り、歩道では人間が目的地へと歩いていく。

「本当に面白いよな……」

赤毛の少女が一人呟いた。

その姿は不可解なものである。

浴衣のような、ボロ衣のような、毛布のような、物を羽織り、小学生と思われるほどの小さな身長、そしてその身長よりも大きな壺を背中に背負い、額に巻くボロ衣が後ろでパタパタと風に靡く。

「本当に人間って面白いよな……」

人間は面白い生き物だ。

人それぞれの個性があり、特徴がある。

今現在もそれらを出し切って、日々を生きている。

「だけど同時に

人間は無関心な生き物だ。

こんなおかしな姿をしても眼の端に捉えるだけで、通り過ぎていく。

彼女は人間達を観察しているのだ。

まるで小学生が虫かごに入っているカブトムシを見ているかのよう
に、好奇心で観察している。

それから分かるように彼女にとって人間とはその程度の存在なのだ。
虫かごからカブトムシを取り出して踏み潰すことも出来る。

殺そうと思えばいつでも殺せる。
簡単なことだ。

「面白いけど……自分等に歯向かうにはお遊びが過ぎたな……ロックスマン」

彼女はそう呟き終わると一瞬にして姿を消した。

誰にも気づかれずにひっそりと消えた。

彼女の目的はただ一つロックスマンを殺すこと。

三話 悲惨な町

太陽は橙色となり、地平線をさまよい始めた。それは棘棘したヘアースタイルをした少年を照らす。隣には後ろにドリルを携えた少女が共に歩いている。

「はあ、なんか初日から疲れたな……………」
「何言ってるの。若いのに元気がないわね」

ババ臭いことを言うルナに、スバルは内心噴出してしまいながら、真顔を保つ。

瞬間、ピピピツと音がしたと思えばウォーロックが姿を現した。

『うおおお！！気持ちワリイー！！』
「何なのさ？ロック……………」

ウォーロックが出てきた初っ端から言った言葉が『気持ち悪い』、何事なんだ？スバルはげんなりしながら聞く。
ウォーロックは右手を喉元に押さえながら答えた。

『最後にあいつ等に“ジョーカー・エースPGM”渡されたら？インストールしてる時ハンターに俺が入ったままだから……………考えただけで気持ちワリイ……………」
「ハハハツ、それは災難だったね」
『なにがハハハツ……………だ！！お前はもうちょっと学習しろよな！このパターン何度目だと思ってるんだよ！！』

これはスバルのいつもの仕返しだということをウォーロックは知らない。

その様子にルナは溜め息をつきながら、

「貴方達はいつも元気ね。じゃ、私達こっちだから」

「ああ、うん。あんな話の後だったし気をつけてね」

「ええ、大丈夫」

ドツツツツゴオオオオオオオン！と激しい爆発音が起こり、ルナの返しはスバルの耳に届かなかった。

二人は驚き、ほとんど反射により耳を塞ぐ。

引き続き連続した爆発が遠くのほうで巻き起こる。

人々は悲鳴を上げ、逃げ纏う。

スバル、ルナの二人を避けるようにして、現場から離れようの一心で駆けていく。

その様子にスバルは閉じていた眼をゆっくりと開いた。眼は決意で満ち溢れていた。

「スバルくん……」

後ろから降りかかってくる言葉。

白金ルナだ。

スバルは振り向かずにとだ黙って耳を傾ける。

「貴方は狙われてるかもしれないのよ。行っちゃ駄目よ！」
「嫌だ」

スバルの普段と違った低い声にルナは少し身震いする。

スバルはやはり振り向かず口を開く。

「この状況を黙って見過ごすわけにはいかない。僕は守りたい、全

てを、コダマタウンに住む人達を！」

スバルはルナに有無も言わず現場へ向けて走り出した。ルナは黙ってその背中を見送ることしか出来なかった。

その現場は原形をとどめていなかった。

コダマタウンの十字路を中心に馬鹿でかいクレーターができていて、その十字路に建っていたビルは半壊し、窓ガラスは一つ残らず割れていた。

信号機は折れ曲がり、車はひっくり返り、人は一人としてそこには存在しなかった。

いや、正確にはクレーターの中心には少女が立っていた。星河スバルはその少女を睨みつける。

少女はその睨みに喜ぶかのように、ニヤリと顔を笑顔で埋め尽くした。決まりだ。

「お前がこれをやったんだな……」

「ああ、そうなるな……ロックマンさんよ」

スバルは殺意に満ち溢れた声を発したが、少女はそれも気にする様

子もなかった。

何が目的なのか分からない少女。何のためにコダマタウンを破壊するのか。

スバルの心は疑問で一杯だったが、それを振り払い目の前の敵に専念する。

その少女は初めて動きを見せた。

片手を真上に差し上げた。

それだけ。それだけなのに……

何故こんなにも恐ろしいのだろうか？

スバルは恐怖という感情が生まれたが、それを即座に消し去った。

そして少女の次の行動は言葉だ。

「自分は“磊落多情”らいらくたじょう プロキオン……『冬の大三角形』の一人だ！
」

瞬間、“磊落多情”らいらくたじょう プロキオンを囲むように地面からケーブルのよ
うな光線が伸びる。

それはプロキオンの姿を星河スバルから隠すようにして、そしてそ
の光線は止まる。

現れたのはさっきの少女の姿ではなかった。

明らかなる電波体の姿だ。

「戦争を始めようか！」

これが星河スバルの戦いの始まりだった。

四話 戦いの始まり

夕日は少年と少女を照らす。

「トランスコード！シューティングスターロックマンー！」
星河スバルはロックマンへと変身する。

それは目の前の敵を倒すためだ。

コダマタウンを襲った電波体、プロキオンは勝気な口調とは裏腹に、高く、透き通った美しい女声をしていた。

身長は途轍もなく小さく背中に背負う壺よりも小さかった。

頭部から後ろに垂れ下がっている紐のようなものが、おさげを連想させる。

ボディは全体的に赤と黄色を基調としている。

ロックマンは、プロキオンの言葉を理解することができなかった。
なので、思い切って質問してみる。

「『冬の大三角形』ってなんなんだー！」

だが、相手は現状では敵。その質問に答えてくれるかは微妙だった。
しかし、相手は、

「なんだ？お前、そんなことも知らねえのか？いいか？『冬の大三角形』ってというのは」

うまく話に乗ってくれたようだ。スバルは、プロキオンは結構乗せられやすい奴と判断した。

「宇宙を統括グループであり、お前が倒した完璧主義シリウスの野郎が所属

していたところだ」

『なっ!?!』

「シリウス!?!」

スバルとウォーロックは、思いがけない敵の名前の出現に驚愕をあらわにする。

正確にはロックマンは世界を五回救っている。それは大きく二つに分けることができる。

人々に知られているものと、知られていないもの。

知られているものは三つあり、一つ目はF M星人の地球への攻撃、二つ目はドクター・オリヒメによる地球侵略、三つ目はミスター・キングによるノイズ計画。

知られていないもの、それはアポロン・フレイムの地球破滅攻撃、そしてシリウスのF M星破壊計画。

そして、目の前にいる電波体……プロキオンはシリウスの仲間というのだ。

「……自分は完璧主義シリウスの野郎なんて興味ないんだけどな……まあ爺がどうしてもって、言うなら仕方ないよな」

「爺?」

「おーっと、こっから先はNGだ。言っちまうと、後でベテルギウスに怒られちまうからな」

プロキオンは、右手を手の平をロックマンに見せるようにして、制するように向ける。

そして、瞬間、手の平から、いくつもの氷のツララが発生すると同時にロックマンに向けて発射された。

「ッ！」

完全に不意打ちの攻撃だったが、ロックマンは道路から飛び上がりウェーブロードに乗り移ることで攻撃をかわす。

ツララは、コンクリートで作られた道路に突き刺さり、溶ける。

コンクリートは、跡形もなく消滅し、地面がむき出しになっていた。その攻撃の脅威に震えながらも、ロックマンはプロキオンを睨む。

「そして、自分の目的は危険分子であるロックマンを消去すること……覚悟しな！」

そう言つて、両手を広げるプロキオン、それに答えるように背中から発生する霧。

先ほどとは、まったく違った攻撃だった。

霧はプロキオンを包み、やがてロックマンも包み込む。

視界が奪われ困惑するロックマン。

だが困惑するロックマンに容赦ない、横から、縦から、前から、下から、一気に様々な方向からの攻撃。

これはまったく同時だった。

ロックマンは咄嗟に自信の身を守るように、両腕を顔の前でクロスさせる。

だがフェイク。

『スバル！これは幻覚だ！！』

この霧の仕掛けに、いち早く気づいたウォーロックだったが、既に遅かった。

後ろから本物が攻撃を仕掛けてきたからだ。

「喰らえ！！」

「さあ、お前の力とやらで、これを受け止めてみる!!」
「ッ!!」

ロックマンは、歯を食いしばりながら右手を思いっきり、ウェーブロードに叩きつける。

雨のように降り注いできたレーザー光線を守るようにして、鋼鉄の塊が出現する。

それは、まるで牡丹ぼたんの花。

鋼鉄のビルがいくつも重なり、一つの牡丹の花を作り出しているのだ。

「ギガントビルディング……」

ロックマンはその技の名前を呼ぶ。

プロキオンは、口笛を鳴らしつつ、レーザーが全て防がれるさまを見る。

だが、余裕の顔は崩さない。

「NFBレッドガイアイレーザー!!」

赤いノイズが右の手の平に集まり、レーザーとして照射される。

ロックマンは、ノイズが生み出す核融合の爆発により生み出される莫大なエネルギーを前方に発射する。

対するプロキオンは、身動き一つ取らない。

レッドガイアイレーザーに飲まれるプロキオン。

その瞬間、勝利を確信したロックマン。

だがレッドガイアイレーザーは、まるで叩いたガラスの様にひびが入り、そして粉々になって散った。

「!?!」

「この程度か……じゃ、そろそろ終わりにしようかい!!」

プロキオンは、何事もなかったかのように両手を斜めに挙げる。

そして、丸い大きなエネルギー弾が発生する。

「ここで、消費してしまうのは残念だけど……」

そう呟いてから、彼女は快樂に顔を歪ませる。

戦うことで喜びを感じているようだ。

本当に、本当に楽しそうに笑う。

だが、それは第三者から見るとであり、今まさに死と隣り合わせているロックマンにとっては、恐怖でしかなかった。

快樂と恐怖、どちらも感じさせる顔をしているプロキオンの口が開く。

「当たって、砕けて、破裂しろ……死に怯え顔を歪ませろ……それが自分の快樂になる」

言い終わるや否や、頭上に集まった丸いエネルギー弾がロックマンに向けて発射する。

ロックマンは、死が迫ってきてても動くことができなかった……。

エネルギー弾の発射速度が速いわけではない、恐怖による振るえ、それがロックマンの動きを鈍らせた。

今まさに、ロックマンがエネルギー弾の光に包まれた。視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚、五感が失われていくのが分かる。

爆発による轟音がコダマタウンを襲った。

五話 飽き性

ロックマンは、五感を取り戻した。気づくと彼は、さつきとはまったく違う場所のウェーブロードの上にいた。

理由は簡単だ。

アシッド・エース。

暁シドウが電波変換した姿アシッド・エースが、ロックマンを助け出してくれたのだ。

「暁さん……」

「ロックマン、お前は戦線に出てきちゃいけないって言ったのにな……」

ロックマンの言葉に、視線を合わせず答えるアシッド・エース。視線の先にはプロキオンが立っている。

闘いの邪魔をされたためか、プロキオンは不機嫌そうな顔をする。

「こいつ……強いな」

アシッド・エースは、プロキオンの強さを一発で見破る。

それというのも、町の惨状を見れば分かる。

立ち並ぶビルは半壊し、道路には亀裂が入り、街灯は折れ倒れる。それもプロキオン、ただ一人でこの状況を作り出したのだ。

「暁さん、多分あいつには『解析』は通用しません」

「なんだと!？」

アシッド・エースは、攻撃、防御、速度、どれも一流ではあるが、

彼の強さはそこだけではない。

彼の強さの秘訣は、『解析』である。

『解析』することで、相手の行動を全てキャッチし、五手、六手先まで読み取ることができ、自分のペースにしてしまう。だが、ロックマン曰くそれは通用しないという。

「さっきまで僕が戦って分かったんですけど、あいつは同じ攻撃をしてくれません」

同じ攻撃をしてこないということは、『解析』が意味を成さなくなるということだ。

相手が技を全て使って、初めて『解析』の意味を成す。だが、プロキオンは同じ技を使わない。

要は、プロキオンには『解析』は無意味ということだ。

「だったら、腕で勝負するしかないな……」

『シドウ、無理をしないでください。まだ退院して間もないのですから』

「ヒーローは無理してなんぼ……だろ？」

アシッドは、シドウの言葉に息を吐く。だが、反論はしない。いままでも、そうだったから。

『スバル、まだいけるか？』

「……当然!!」

ウォーロックの言葉で、再び力をこめる。真っ赤なボディのレッド・ジョーカーは、プロキオンを見る。

「いやはや、美しき友情だねえ、だけど……もう一度絶望さ

せてやんよ」

その言葉に動き出す、ロックマンとアシッド・エース。接近する二人に、プロキオンは背負っている壺から鎖を放つ。

「サンダーボルトブレイド!!」

「ロックオンソード!!」

ロックマンは、鎖をベルセルクの剣で巻きつける。

アシッド・エースは、プロキオンのボディを斬りつける。だが、

「手応えが……」

ロックオンソードで斬りつけられたはずのプロキオンは、霧のように姿を消す。

そして再び、姿を現す。

アシッド・エースの真後ろに。

「自分は飽き性でね、新しいものには目が無いんだ……攻撃も同じで、新しいものにはしか興味が無い、同じ攻撃は二度と使わない、それが自分のポリシーってやつなのよね」
「ツツツ!!」

アシッド・エースは咄嗟に、ボディを両手で守る。

だが、間に合わず、プロキオンのハイキックが炸裂する。

その小柄な体からは想像出来ない程の力が加わり、アシッド・エースは後方に勢いよく飛ばされる。

「暁さん!!」

「人の心配してる場合かよおおおお!!」

プロキオンはハイキックの勢いを殺さずにロックマンの胸の部分を勢いよく殴る。

ロックマンは横に吹っ飛ばされる。

道路に背中から落下したロックマンは苦しそうに疼く。

アシッド・エースも戦闘不能。

ロックマンも立ち上がる体力もない。

「はっはあぁー！！ここで終わりにしてやんよ！！」

プロキオンの両手に集まる粒子、それは次第に形を作り、一本の槍となる。

そして長い槍を、未だ地面で足掻くロックマンに向けて、投げた。

「やめないか」

突然、聞き覚えのない声を耳にする。

ロックマンは、苦しみながらも顔を上げる。

そこには、本来、自分に刺さっていたはずの槍が、突然の乱入者によって防がれていた。

「ベテルギウス……！！」

プロキオンは苦虫を噛み潰したような顔になる。

ベテルギウスと呼ばれた電波体は、頭から生える髪のような、布のようなもので隠れて顔は確認できない。

全体的に青を基調とするベテルギウスは静かに告げる。

「お前の任務はロックマンの観察だっただろうか？」

「うっせーなぁー、そんなネチネチしたことしてないで、ぶっ倒し

やーいいじゃねえか。自分はそういうのが苦手なんだよ。完璧主義シレウスの野郎を倒した危険人物なら倒してお終い、でいいんじゃないか
「……町もこんなことにして………爺様に怒られるぞ」

ベテルギウスは町を見渡し、言った。

「なあ〜にが、爺“様”だ、このキザな変態野郎が!!！」
「うるさい!この戦闘馬鹿野郎が!色気持て!この男女!!！」おとこおんな
「……!!！」
「……!!！」

ロックマンは薄れ行く意識の中で、二人がいがみ合う様を見て、
そこで意識は途絶えた。

六話 筋肉医者

プロキオンに敗れたロックマンこと星河スバル。目が覚めると病室にいた。

只今午前七時。

プロキオンとの戦闘が二十日の昨日であるから、どうやらスバルは病院で夜を明かしたようだ。

麻酔が残っているせいか、体に嫌な感覚がある。

スバルは、現状を把握しようと思っただけを動かし、周りを見る。

だがカーテンが閉め切られ、光が入ってこないのによく見ることができない。

隣のベットから耳障りな音が聞こえることから、隣で誰かが眠っていることは、かろうじて認識できる。

『おっ、スバル起きたか』

目を開いたスバルに気がついたのか、ウォーロックが駆け寄ってきた。

『大丈夫か？大丈夫か？大丈夫か？』

心配してくれるのは嬉しいのだが、あまりのしつこさに段々とイラついてきたスバル。

ど突こうか、と考え始めた時だった。

『ウォーロック、病人にそこまで詰め寄るのは、デリカシーがないですよ』

『アシッド……！……！』

スバルの代わりに、ウォーロックに制裁を下したのは、暁シドウのウィザード、アシッドである。

「アシッドがいるってことは……」
「おお、ここにいるぜ」

スバルの隣のベットには、半身を起こしたシドウがスバルの言葉を先読みする。

「暁さん、病室では飲食禁止ですよ」

「うまい棒は、俺の怪我の治しを早めてくれる薬だ」

うまい棒を食べるシドウに呆れるスバル。

うまい棒のカスをボロボロと落とす姿はまるで子供だ。

「……生きていたんですね」

「勝手に殺すな」

「でも、あの攻撃を受けてよく……」

プロキオンの強さは異常だった。

たった一人で町を半壊させ、中々の手練の二人を相手にしても顔色変えず蹴散らした。

ベテルギウスが止めに入っていないければ、確実に殺されていた。

「プロキオン、ベテルギウス、そして、爺……か」

「……新たなる脅威ってところだな。しかも、今回の目的は『ロツクマン』であるとして、まず間違いないだろう」

二人はそこで、言葉を切る。新たな脅威に心を引き締め、そして長い沈黙。

「おい、患者ども！！大丈夫か！！」

その沈黙は、一人の男に崩される。白衣を着ているところを見ると、医者であるうか。

「体を見さしてもらおうぞ」

患者に対し敬語を使わないその医者はシドウの腕を掴み、体のチェックをする。

医者はガツチリとした体格で毛深く、白衣がパンパンの姿を見るとなにか不気味だ。

スバルは、医者が白衣を着ていなければ、ハンマー投げの選手か、トライアスロンの選手だと判断してしまうところであった。

そして、医者はシドウの体をチェックし終えたのか、スバルに近づいてくる。

一歩一歩、歩くたびに病院が揺れるような感覚がする。

病室にはクーラーが効いてる筈なのに、医者を見ると汗を掻かずにいらなかった。

スバルは、何故か逃げ出してしまうたい衝動に駆られる。

「見せる」

医者は低い声で言い、スバルの腕を掴む。凄い力だ。

骨が軋む音がする。

「痛い痛い！！」

「どこが痛いか言ってみろ」

「腕が全体的に痛いです！！」

痛いのは医者 of 掴んでいるところだ。
それに気づいたのか、医者はスバルの腕を離す。
真っ赤な手形がついていた。
恐ろしい力だ。
危うく血の流れが止まるところだった。

「今時の若者は貧弱だな」

医者の言葉に反論をしたかったスバルだったが、心の中に留めておく。

医者は、今度こそ優しくスバルの体のチェックをする。
まだ痛かったが……。

「うん、大丈夫だな」

「あ、ありがとうございます」

医者はそう言い残し、風のように病室を後にした。
激しい運動をした後のように疲れたスバル。
あの医者は凄い力だった。
痛いことに慣れているスバルが、悲鳴を上げるほどだ。
医者の実力は本物であろう。

「……暁さん、遊撃隊の新しいメンバーに彼を入れましょう」
「……検討しておこう」

そんなこんなで病院で夜を明かした二人であった。

七話 落下型美少女

夜空にキラキラ光る星。

それは大昔から役に立ってきた。

電気のない時代には真っ暗な世界を照らし出し、迷い人には目的地へと案内した。

そして何百年、何千年経っても星は人の進化を見届けてきた。

「星つてさ、男のロマンを感じないかい？……ロック」

『ワリーーな、お前がなんと言おうと、展望台に行かす事はできねえんだ……お袋からの頼みだしな』

スバルは見せ付けるかのように溜め息をつき、背もたれに体を預ける。

目の前には夏休みの宿題の山がその存在感を放っている。

「まあ確かに去年はしくじったし、母さんが言いたい事は分かるんだけどさ……まだ夏休みが始まって三日目だよ！こんなに張り切ってたどうするんだよ！？」

そう今日は七月、まだまだ夏休み序盤だ。

それなのに今日のノルマである算数ドリルを一夜漬けで終わらそうとしている。

スバルは眠気覚ましに頭を机に叩きつける。

もうやけくそだ。

「夏休みというのはさ！最初遊んで、後宿題つてのが相場と決まってるでしょ……！」

ドンドンドンつと激しく頭を叩きつける。

ウォーロックはそれを止めようとするが、スバルは止めない。言い忘れていたが、現在午前三時、眠すぎる。

ドンドンドンドン！ドシヤッ！

最後はとても鈍い音がした。

『お、おい！眉間から血が出たりしてんじゃないか！？』

さすがに今の音はまずいと感じたのか、ウォーロックは心配する。だが、違う。

「これは僕の起こした音じゃないよ……ベランダのほうからだ……」

『……泥棒か？変質者か？つか眉間からはしっかり血出てるじゃないか！！』

スバルとウォーロックは絡んでから、千鳥足でベランダへと向かう。ドシヤッ！の音の後は特に何も音はしない。でも、油断は禁物だ。

「ロックいくよー！」

『おっつ！』

ガララッ、と音をたてながら引き戸を開けた。

目の前にいたのは泥棒でもなければ、変質者でもなかった。

金髪の少女だった。

「はあ!?!」

スバルは驚きのあまり我ながらおかしな声を出した。

その謎の金髪の少女はうつ伏せで転がっている。

服から覗く腕は驚くほど純白で、金髪を際ださせていた。

金髪は腰まで届き、そして美しい色だった。

服装は……全体的に真っ黒で白のリボンがたくさん装飾されている。

そう、ゴシッククロリータファッションだ!

スバルはモヤモヤとした気持ちを振り払い、幸せそうな顔をする。

ピクンツと白のリボンが動いた。

金髪少女は美しい金髪を左右に揺らしながら立ち上がった。

意外と可愛らしい顔の持ち主であった。

小学生低学年にも見え、しかしどこか大人びた顔つきをしている。

瞳は透き通った緑眼。

まるでどこかのお人形のようなであった。

彼女の潤った唇が動き始めた。

「ほしかわ、すばる」

まだ教えてもない、自分の名前だ。

何故僕の名を!? と驚くスバルを素通りし、彼女はドカドカとベ

ランダから部屋へと入り込んできた。

「ちょ、ちよつと靴は脱いでよ!ここは日本でアメロッパじゃないんだから!」

ピクンと少女は動きを止め、キョトンとした顔でスバルに振り向く。

緑眼には眉間から出血している星河スバルの顔が写っている。そして彼女はスバルの言うとおり、片足ずつ丁寧に靴を脱ぎ、ベランダに放り捨てた。

「まったく……」

スバルは仕方ないのでベランダに投げられた靴をしっかりと揃え、自分も部屋に入った。

部屋では少女がコロコロと床で転がっていた。

「……君は一体どうしてベランダにいたのかな？」

「私の名前はランドマーク」

「だから、何でベランダに」

「漢字で書くと“先導巫女”と書く」

自称ランドマークと名乗る少女は、部屋に散らばっていた紙にペンでキュキュツと書いて見せた。

「というかその紙……よく見てみると宿題のプリントの裏紙だね。ペンは油性マジックだね。消えないね。」

「一気に鬱気分に戻りしたスバルはその場でヘナヘナと腰を下ろした。」

「ランドマークって完全に偽名だし、君、どう見ても外人だよね？先導“巫女”じゃないでしょ……」

「確かにそうだな。だが今はそんなことよりも早く布団を敷いてくれ」

自称、巫女の嘘くさい外人美少女ランドマークのあまりにも図々しい態度にスバルは更に気分が下がっていく。

それに布団敷いてくれって完全にここに泊まる事前提じゃないか！

？ とスバルは頭を抱える。

だが星河スバルは鬼ではないので一晩だけ彼女を泊めてあげることにした。

八話 必死

午前七時。

スバルは眼が覚めると床で転がっていた。

一瞬何故だろうと考え、そして昨晚あつたことを思い出す。

「あゝ、確か落下型美少女だっけ？」

ランドマークと完全なる偽名を名乗った金髪緑眼の少女は、落ちてきたベランダから図々しく部屋に上がりこみ、夜を明かしたのである。

夢であつてほしいと思ひながら床で寝たが、人生はそううまくはいかない。

『スバル……こいつまだここにいるぜ』

「マジか……」

自分が入っていたはずのベットでは外人さんが眠っていた。不思議な女の子だなあ、とスバルは呆けながら見ていると、視線に気づいたのかランドマークは眼を勢いよく開いて、腹筋の要領で体を起こした。

「どうした？私に惚れたか？」

「フツ……残念ながら、僕はそんな趣味はないんだ」

ランドマークは年齢不詳であるものの、小学生低学年……いや下手したら、幼稚園生と間違われるぐらいの体格だ。

星河スバルにはそんな趣味は神にも仏にも掛けて、ミジンコの大きさも存在しない。

「とうとうより何で君はベランダで転がってたのさ？」
「うん……………」

ランドマークは両手を組み眉毛を片方顰めながら、ベットから起き上がりスバルの勉強椅子に腰掛ける。

幼稚な顔をしているが、考えているところはどこか大人びていた。そんなランドマークは緑眼をキラリと光らせてから、答えた。

「忘れた」

「忘れた？」

「ああ、忘れた」

「……………」

記憶喪失！？ とスバルは驚く。

落下型では留まらず、まさかの記憶喪失という設定が新たに追加！とスバルは頭を抱えて叫ぶ。

スバルの叫びが一階にまで響いたのか、階段から規則的な足音が聞こえてきた。

『スバル！お袋の周波数だ！』

「まずいぞ……………この状況を見て、母さんはどう思う！？」

部屋には昨晩いなかったはずの幼い美少女……………と共にいるスバル。勘違いされてしまう。

本当のことを言えば、これからスバルは親から冷たい眼で見られ、二次元と三次元が混同してしまったイタイ人だと思われる。

下手に嘘をつけば、勘の鋭いスバルの母のことだ、簡単に見破り、嫌な方向に勝手に解釈することだろう。

「駄目だ……解決策が存在しない……！」

考えを張り巡らすことに時間を食ってしまい、部屋の外からあかねの『スバルー？どうしたの開けるわよー』という声がする。

もうやけくそじゃー！！とスバルは自分から扉を開け、ランドマークをあかねに差し出し、叫びだした。

「母さん！この子はランドマークといって、記憶喪失の可哀相な女の子で、帰るべき家も分からないらしいんだ！だからさ！ここに彼女はいるわけであって、別に疚しいことがあるわけじゃないんだ！だってそうでしょ！？僕はそんな趣味はないしね！」

スバルはここで自分は追い詰められると出来る子、であることを初めて知った。

生まれてから数十年経って、自分のことを知るというのは気持ちいいな、とスバルは自画自賛しながらあかねの答えを待つ。

「わ……分かったから、少し落ち着きなさい」

案の定、あかねはスバルの気迫に押され怯んでしまったようだ。

スバルはこの瞬間を見逃さず、ランドマークの手を引いて、階段を勢いよく駆け下りた。

電波技術が発達したこの世界ではリアルウェブというのが存在する。

それはこの広い世界で多用され、現実リアルのものと見分けがつかないほどだ。

そしてオクダマスタジオというTVスタジオにもリアルウェブが使われている。

そんな最先端技術が惜しみなく使われているオクダマスタジオ、控え室にて……

「はあ、お疲れ様ー」

「うん、今日もミソラは大活躍だったね」

「いやいや、スズカの演技、良かったよ」

そうやって談笑するのは、ミソラと同期のスズカ。

先程、ドラマの撮影が終了したところであり、今は自由時間となっている。

簡単に言ってしまうえば、今日の仕事は終わりということだ。

「そうそう、ミソラ……………」

スズカは思い出したように、ガサゴソと鞆を漁る。

そして鞆から取り出したものを徐にミソラに渡した。

「ペアチケット？」

ミソラはその手渡された代物の名を呼ぶ。

それは映画のペアチケットであった。

上映日は七月二十八日となっていた。

「そうペアチケット。私、この日は用事があつて行けないからさ……ミソラにあげるよ」

「えっ!?!……でも私、誰と行こうかな……」

“ペア”チケットとなると行くには人数が二人必要である。

ミソラは誰と行こうかと思案している時だった。

『ミソラはスバル君と行くのよね?』

『スバルとは、以前ここに来た少年よね?』

ハープとアイスがミソラを冷やかすかのように、解説するかのよう
に言う。

スズカは大人な笑みでそれを見守っている。

「そ、それは良いとしてスズカは誰と行く予定だったの?」

「私?私だね」

ミソラは照れ隠しで無理やりに話を逸らす。

うまくスズカもその話の変化に乗ってくれたようだ。

「私はロックマンと行きかけたんだ」

その言葉にミソラは表情を堅くする。

スズカは本当のことを知らないのだ。

「……とりあえずこれは貰って置くね」

「うん。スバル君とロックマンにもよろしくね」

ミソラはスズカに背を向け、控え室を出て行った。
スズカはその背中が見えなくなるまで見送り、一人呟いた。

「あゝあ……ロックマンと行きたかったな」

スバル「ロックマン、と分かっているじゃないスズカであった。

誰かがタバコをポイ捨てした。

悪いことではあるが、誰もそれを横目で見るだけで素通りしていく。
基本的に町掃除用のウィザードが普及した為、ポイ捨てしてもそれが拾ってくれるのだ。

だが、おかげで町丸ごとがゴミ箱扱いだ。

何度目かの出勤か分からない町掃除用ウィザードが何処からか現れ、
真っ直ぐ吸殻へと向かう。

しかし、ウィザードがそれを回収する前に誰かが吸殻を拾ったため、
クルリとUターンして指定の位置へと戻っていく。

「まったく……自分も焼きが回ったもんだよな」

吸殻を拾った少女はポイツと近くの吸殻入れへと放り込んだ。

彼女の名はプロキオン、身長が途轍もなく小さく、背負ってる壺の

方が大きい。

今は電波化した姿ではなく擬人化の状態である。宇宙を統括するグループには特殊な力が備わっており、擬人化を可能とし、必要はないが食物の摂取も可能としている。

彼女は小柄な姿とは打って変わり、かなりの戦闘狂である。

そんな彼女が吸殻を捨つという良心的なことをするとは自分自身でも驚いているのだ。

「まったくベテルギウスの野郎……こんなめんどくさい事させやがって……………」

プロキオンの任務は以前と同じくロックマンについて詳しく調べ上げる事だった。

調べ上げるにも、基本的戦闘のことにしか頭が回らないので、調査系というのはどうにも苦手なのだ。

壺を背負ってる姿が珍しいのか、周りの目が痛い。だが相変わらず、すぐ忘れて通り過ぎていく。

「本当に無関心だよな……………」

プロキオンは壺と背中を繋ぐ紐を強く握り締め、大きく飛び上がった。

額に巻くボロ衣がバタバタと風に靡きながら、プロキオンはどこかの屋上に着地する。

「ロックマン……………」

プロキオンは屋上から世界を見る。狭いところだ。

広大な宇宙の前では、ほんの一粒だ。
そして上を見上げる。

そこは何の変哲もない青空だ。

違う、何かがある。

「シリウス完璧主義の野郎……バツクアップかよ」

プロキオンは、右足に力を込め屋上から飛び上がった。

それだけで、雲を突き抜け、一気に空と宇宙の狭間にまで辿り着く。
一瞬で景色が変わり、肌寒い風が吹く。

そんな空と宇宙の狭間、青と黒の丁度間に真つ黒な穴が存在していた。

そこだけ永遠と続く深い闇であり、見ているだけで吸い込まれそう
だ。

「『ブラックホールサーバー玩具箱』、……シリウス完璧主義。……コレクシオンテメエは本当に玩具がお好きのようだな……死んでもなおここに残ってるぜ……テメエの遊び場は」

プロキオンは迷わずにその空間に入っていった。

九話 多情と孤高

「私の頭の中には、先導巫女とほしかわすばる……という情報しか残っていない」

ランドマークは特に悲しそうにもせず、ただ平然と無表情で淡々と言った。

「ここはスバルの部屋。」

ランドマークは床で寝転がり、スバルは勉強椅子の背もたれに体を預けながら聞いていた。

「つまり君は、なんで目が覚めたらベランダにいたのかも、君が何者であるのかも、何故ゴシッククロリータファッションをしているのかも、全て分からないということだよな？」

「……、」

スバルは無言の了解と勝手に認識し、更に聞く。

「何で君が僕の名前を知っているのかとても奇妙だよ……」

「私もそれは聞きたい。何故こんなにも凡人でつまらん、イケメンでもなければブスでもない、ただの少年のことが頭の中に残っているのか疑問すぎる」

スバルは背もたれから椅子ごと倒れこんだ。

酷い言われようだ。何か泣きそうだよ。

「私は行く宛てもないし、しばらくここに居候させてもらおう」

「うん……じゃあまず自己紹介だね」

「私は話すことなんか何も無いがな」

「僕の名前は星河スバル。君が言うとおり凡人でつまらん、イケメンでもなければブスでもない、ただの少年だよ」

『結構、気にしてたんだな』

「で、こいつが我が家のペット。哺乳類でありながら卵生で非常に珍しく迷惑でブスな生物。名前は未定」

『さらりといい加減なこと言うんじゃないやねえよ!!』

ウォーロック
ペットはスバルの言葉に突っ込みを入れる。

ランドマークはオー、と言いながら口を丸くする。

「この生物は喋るのか」

『だから違っ 勝手に頭を撫でようとするな!!』

ランドマークは頭を撫でようとするが、ウォーロックは嫌がりハントーに戻る。

スバルはクククツとした唇を噛み、ランドマークは残念そうに唇を尖らす。

『俺の名前はウォーロック。生まれはAM星、育ちはFM星の誇り高い戦士だ』

「 というのが肩書きで、本当は絶滅危惧種に正式に認定された“ウォーロック”の最後の生き残り」

『何時までそれ引きずってんだよ!!』

スバルはウォーロックを馬鹿にできるチャンスを手放したくないのか、中々そのネタから離れようとしない。

ランドマークは感心したようにうんうん、と頷き本棚を漁り出す。

本棚には宇宙関連のものばかりが並んでいた。

本棚に置いてある物で人の性格が分かるというのはどうやら本当らしい。

「散らかさないでね」

スバルはそう言い残し、部屋を後にする。
まるで妹が出来たようで、正直嬉しいスバルであった。

シリウスの玩具箱、ブラックホールサーバー……

数ヶ月前、ロックマンがシリウスを打ち破った時、シリウスは自身の力を尽くしこのブラックホールサーバーの全てをメテオサーバーに移した。

そしてその後、激闘の末クリムゾンドラゴンを倒したロックマンはメテオGを完全に破壊した……はずだった。

というのも実はメテオGの破片は幾つか地球に落ちてきているのだ。殆どは大気圏との摩擦熱で燃え尽きたが、大きなものは小さな破片となって降り注いだ。

それは破片のみならずサーバーも例外ではなかった。
現にメテオサーバーの一部分は成層圏周辺で確認されている（そのためファイナライズも短時間可能なのだ）。

そしてそのメテオサーバーに取り込まれたブラックホールサーバーも地球にほんの僅かに残っているのだ。

そしてプロキオンはその発見したブラックホールサーバー内にいる。

「まったく……^{シリウス}完璧主義の野郎、ガラクタばつかじゃねえか」

ブラックホールサーバーはシリウスの玩具箱と呼ばれ、コレクションを保管する広大なサーバーである。

だが、プロキオンがここにやって来たのは別にコレクションに興味があつたわけではない。

任務の一つ、ロックマンの調査の一環なのだ。

情報が正しければ、ロックマンがシリウスと戦つたのはブラックホールサーバー内だ。

おそらくロックマンの戦闘情報はブラックホールサーバー内で何らかの形で残っているはずだ。

更にブラックホールサーバーは一度メテオサーバーと同調し、そして離れた。

運が良ければ、メテオGでのクリムゾンドラゴンとの戦闘情報も手に入るかもしれない。

「と読んだわけだけど、そう上手くはいかないわなあ」

そこに存在するのはシリウスのコレクションばかり、実際どれも貴重な宝物であるがプロキオンにとってはどれもガラクタとしか思えなかった。

プロキオンはそこをさっさと進んでいく。
だが、一つ。

飽き性のプロキオンの眼を引くもの……。

「何だ……これは？」

それは青い光。

真っ黒で暗いブラックホールサーバーを青く、美しく照らすもの。人型をした何かであり、強い力を感じた。珍しく見惚れるプロキオン。

「？」

不意に、後ろから声が掛けられた。

プロキオンはこの青い光の何かの観察を邪魔されたことにイラつきながら、声のする後方に首を向ける。

「貴様……ここで何をしている？」

そいつは真っ暗なボディをし、以前戦ったロックマンとはまた違う力を感じる。

「確か、テメエはブライ……だったか？」

ブライは自分の名を知っていることを気にもせず、いきなり飛び掛ってきた。

プロキオンは舌打ちをしながら、後方に跳ぶ事でその攻撃を交わした。

「大人しく俺の質問に答えろ……貴様、ここで一体何をしている？」

「テメエに言うことなんか何もねえよ……聞きたきゃ、自分を張り倒せよ」

「……そうさせてもらおう」

これがプロキオンの望む世界。

調査？ んなもん糞食らえだ。

これこそがプロキオン、戦うことで自分の価値観を見出せる。

なんと楽しく、なんと最高の人生なんだ。

十話 退屈の再来

ブラックホールサーバー内で、ブライとプロキオンが五度目の激突をする。

激しい爆音が、激突に遅れて炸裂し宝具「レクシオン」を吹き飛ばしていく。

ブラックホールサーバーの広大な要領を持ってしても、その激突は多大なダメージとして確かにサーバーにダメージを与える。

パチンツッ！と何かが割れた音がしたかと思えば、二人は拳を交える。拳と拳の衝突は衝撃波が起こり、二人の体を互いに吹き飛ばした。

そして一旦離れ、互いの出かたを見る。

ブライはウィザード、ラプラスを刀に変形させ、右手に持つ。

対するプロキオンは背中に背負う壺からいくつもの鏃を出現させると同時にブライに発射される。

「フンツ……どうやら貴様の全ては、その壺にあるようだな」

「ご名答だな……自分のポリシーは『同じ技は使わない』……その全てがこの“発想の壺”にある」

ブライはそのプロキオンの答えに鼻で嘲笑いながら、飛んできた全ての鏃をラプラスソードで薙ぎ払う。

プロキオンはそれを口笛で感嘆しながら、床に両手を叩きつける。

瞬間、ブライの足元から無数の棘が突き出てき、ブライを串刺しにした……とプロキオンは思われた。

だが、

「この程度で俺を倒すことなど………できん！！」

その棘を交わし、一気にプロキオンの背後を取ったブライはラプラスソードでプロキオンの体を掻き斬った。

プロキオンは悲鳴を挙げることもできずに、消え去る。
しかし、ブライは釈然としない気持ちが残っていた。

(斬った感触が……しない)

確かにその体を掻き斬った筈が、まったくそうだった感触がしなかったのだ。

それは今まで多くの電波体を手に掛けてきた猛者であるからこそ分かる感触である。

「そういつこと」

突然、消え去ったはずのプロキオンの声がブラックホールサーバーに響いた。

眼が覚めると、ブライは影のような真つ黒なもので縛られていた。苦しむブライに、追い討ちをかけるように床から姿を現すプロキオン。

「勝敗はもう自分に会った時から決まってたんだよ」

「な……なんだ……と!？」

必死に言葉を紡ぐブライに、プロキオンは顔をグニヤリとひん曲げて、嘲笑った。

何も知らない子羊ブライにプロキオンは仕方ないな、と言った様に言った。

「もう既にテメエは自分の手中の中……最初にテメエが自分の眼を見たときからな」

「ま……まさか、幻覚……」

その通り、と明らかに馬鹿にした口調で言い、そしてプロキオンは

大笑いした。

それは奇妙で卑劣な笑い声だった。

「ふう……………暇つぶしにもならなかったな……………じゃあな孤高の者よ」

言い終わると同時に、真っ黒だったサーバーが爆発による白に変化して、それから再び元の黒に戻った。

変わった様子はない。

変わったといえは、孤高の戦士の姿が消えたことであるつか。

「はあゝあ……………もうちょつと調査を続けようか……………」

その時はもう興味が逸れたのか、プロキオンは何故か消えてしまった青い光を探そうとも思わず、ただ退屈そうに一つ欠伸をして、姿をくらました。

そんな成層圏のブラックホールサーバーでの出来事など知る由もない地上……………

地上に無数に張り巡らされたウェーブロードを今、ピンク色の何か

が物凄いスピードで駆け抜けた。
それは尾を引きながら、一つの線のような感じで動く。

『ミソラ……今日は途轍もなく速いスピードね』
「ハハハッ、自分でも驚きだよ」

そう言いながら、急に直角に曲がりだすウェーブロードも見逃さず、
スピードを殺さずに抜けていく。

ギューイン！と風を切り裂くような音を発しながら、それはス
バルの家を目指していく。

手には二枚の映画のチケット。

大いなる期待を胸にミソラは更にスピードを上げた。

そして一分も掛からずに、目的地であるスバルの家に辿り着いた。

正確にはスバルの家の真上のウェーブロードだ。

このままウェーブロードから飛び降り、壁をすり抜けスバルの部屋
に突っ込むのである。

しかしミソラは躊躇した。

実は以前にも同じようにスバルの部屋に侵入したのだ。

その時は運が悪く、スバルのお着替えタイムの途中だったのである。
今では良い(?) 思い出だ。

「……スバルくんはトランクス派だったね」

『何、変態じみたこと言ってるの?』

「……いや、ただこの前もこんな感じで入って、お着替えタイムだ
つたじゃない? またその途中だったらどうしようと思ってさ……」

『……まだお昼にもなっていないのよ。こんな時間に着替えたりはし
ないでしょう?』

そうだね と実は少しがっかりしながら、ミソラは天井をすり抜

け、慣れた動作でスバルの部屋に侵入した。
そして顔を上げると……そこには

上半身裸のスバルとそれを茶を啜りながらマジマジと見ている金髪
緑眼の少女が部屋にはいた。

スバルと金髪少女は、ハープ・ノートの存在に気づいたのか眼をパ
チクリさせる。

しばしの沈黙。

それを打ち破ったのはスバルの叫びだ。

「うえ！？ええ！？ええー！？な、何で！？」

スバルは本当に動揺しているようだ、バタバタと足踏みを繰り返し
ながら奇声を挙げる。

「すばる……こいつは誰だ？」

ハープ・ノートはその金髪少女の声を耳にする。

それは見た目からは想像出来ない低い声をして、服は絵本に出てく
るようなゴスロリ姿であった。

ミソラは何か喋ろうとしたが、あまりにも予想だにできない光景に
驚き、声を発する事はできなかった。

そんなミソラに気づくことなく金髪少女は唇を尖らしながら、ブツ
ブツと言い始めた。

「全く……茶々入れないで欲しいな」

「ちゃ……茶々入れるなって……スバルくん！」

突然呼び出されたスバルは驚いた顔をしながら、ミソラに振り返る。そこには恐ろしい形相をしたミソラが立っていた。

「えっ！？何でそんなに怒っているの？」

「怒っているのって、私を置いて他の女の子とこんなことしようとするなんてっっ！！」

ミソラはキョトンとした顔のスバルを怒鳴り散らす。

まさか新たなライバルが出てくるとは！ とミソラが思っているとスバルの口からとんでもない言葉が発せられた。

「じゃあミソラちゃんも一緒にどう？」

ボンツ！とミソラの顔が爆発した。

怒りからではない、赤面をする。

口からは何やらゴニョゴニョと小さな声が漏れ出していた。

「で……でもまだ早くないかな……私たちまだそんな関係じゃないし……」

「そんな関係って、そんなもの関係ないと思うよ……まあ女の子は無理かな。ゴン太が一番いいと思う」

「なっ！？ゴン太くんが一番！！」

ミソラはスバルのまさかの趣味に驚きを隠せない。

これではアピールとかそういう以前の問題だ。

「スバル君は女の子に興味はなく、男の子に興味があったんだね……」

「えっ？何？なんて言った？」

突然、『すばる〜』と後ろから声が掛かる。
声をかけてきたのは金髪緑眼の少女。

「ほれっ、続きを始めようか」

「やつぱり、本当にやるの？」

「ああ、すばるが神経衰弱で敗北したのだ……罰ゲームである日本
古来の伝統的、伝説的な由緒正しき『腹痛り』……楽しみだ」

えっ？と目を点にしたミソラ。

スバルはやれやれといった感じでマジックペンで自分の露わになっ
た腹に顔を書いていく。

（な、何だ……やろうとしたのは『腹痛り』だったのか……
ホッとしたような、少し残念のような……）

ミソラが複雑な心中を抱いている間にも、スバルはそのガリ細、肋
骨丸見えの貧相な腹で屈辱的『腹痛り』を実行している。

「ひよひよひよひよひよ……！」

「……、」

金髪緑眼の少女は奇声にも似た変な笑い声を発し、ミソラはよそ見
しているフリをしてチラチラとその様子を窺っていた。

スバルはこんなにもゴン太がいて欲しいと思った日は、過去にもこ
れから先にも今日だけだろうと思ったのであった。

十一話 調査

懐かしい景色というのは感情深い思い出が湧き出てくるものである。久しぶりに来るとそこで起きた出来事が走馬灯のように駆け巡る。少年、星河スバルもそんな風にここで起きた出来事を思い出していく。

「WAXA日本支部……。懐かしいねえ……」

そう今、彼は少女二人を脇に置いてWAXA日本支部に来ていた。ああ、走馬灯のように駆け巡る。

唯でさえ喧しいウォーロックがコピーで大量生産され、押し寄せて来たあんなことや。

無口で可憐なクインティアがヴァルゴと電波変換して、クイン・ヴァルゴとなってアシッド・エースやロックマンに戦いを挑んできたこんなことや。

無口で無愛想なソロが新たなウィザード、ラプラスを連れてサテラポリスウィザードをなぎ倒したそんなことや。

「あれ？ よく考えたら戦いばかりだな……」

それ以外にも来た事はあるであろうが、あまり印象に残っていない。だが今回は印象に残るものになると思う、とスバルは確信していた。今日、彼らがWAXA日本支部に来た理由とは……！

「おい、すばる」

二人の少女の内の一人、ランドマークが袖を引っ張る。

「本当にここで私の記憶が戻るんだろうな？」

WAXA日本支部に来た理由は、ランドマークの記憶消失の原因を調査するためである。

記憶がないままだと自分の家も分からないし、色々と困る。
一応サテラポリスに報告したが結果はまだきていない。
というより今日はそれも聞きに来た。

「それはまだ分からないなあ」

「何だと！」

「痛い痛い！耳を引っ張らないでえ！！」

ランドマークがその低い身長で頑張って背伸びをし、スバルの耳を遠慮なく引っ張る。

ウォーロックはその光景に軽く溜め息をつきながら、

『おい、ミソラ……何でお前がここにいるんだ？』

「ちよつと気になって、ね？」

ミソラは適当に誤魔化しつつ、ハンターV.Gに顔を向けた。

彼女のウィザードであるハーブがミソラにだけ聞こえる程の小さい声で話しかけてきたのである。

『（やっぱりあの娘こが気になるのね？）』

「（うん。スバルくんとも仲が良いみたいだし……）」

ミソラは言い終わるとスバルの方に顔を向ける。

ランドマークは攻撃部位を耳から頬ほおに変更し、引っ張っていた。

痛そうだなあ、とミソラは見ながら、その戦いを止めるべくランドマークをスバルから引き剥がす。

「ほら、喧嘩は駄目だよ」
「喧嘩などではない。一方的な虐殺だ」

ランドマークは見た目は小学生低学年にも見えるし、何処か大人びた感じもする。

だがどんなに大人びていてもやっぱり小学生低学年にも見えることには変わりはない。

そんな低学年が“虐殺”などという言葉を用いていいのだろうか？
答えはNOである。

ミソラは正しい言葉を教えてあげることにする。

「そんな言葉は使っちゃ駄目なんでちゅよ」

「何故赤ちゃん言葉を用いるのだ！？ 私はそんな幼稚ではないっ
！」

何と言おうと小学生低学年だ。見た目はとても幼稚だ。

ランドマークは赤ちゃん言葉に怒ったのか、ミソラにまでも手を出し始めた。

「泣き叫べ！」

「いひゃい！いひゃい！」

ランドマークが頬を引っ張ることで、アイドルがしてはいけない顔になってしまっている。

スバルは止めに入ろうとしたが、中々面白い光景だったので暫くそれを見続ける。

何分経っただろうか？

ランドマークはミソラの頬を引っ張り続け、スバルはその光景をにやけながら見続けている。

目的地であるWAXA日本支部を目の前にして、彼等は一步も動かない。

WAXA日本支部を護衛する職員もそれを遠目で、声を掛けようか掛けまいかと躊躇している。

彼等は一体何をしに来たのであろうか？

「おい！お前等！！」

その場を何かが横切った。

それはその場にいる皆の視線を釘付けにする。

真っ白いボディのプロジェクターTC初の成功者、アシッド・エースが堂々の立ち姿で立っていた。

「お前等は何しに来たんだ？」

うん確かに、と護衛の職員も首を縦に振る。

ランドマークは頬を引っ張るのも止め、三人は気を付けをしてアシッド・エースを見る。

「何しに来たんだっけ？」

「あれっ？ 何だろう？」

「私の記憶を戻すんだろっ！」

ランドマークは地団太を踏む。

それはやっぱり可愛いと捉えられるものだった。

アシッド・エースはそれをじろじろと見ながら、電波変換を解除し、

暁シドウとしての姿に戻る。

「記憶を戻す？」

「ああその通りだ。しっかりと調査してくれよ」

何だこの妙に偉そうなガキは？ とシドウは顔に表す。

まあ初めての人は当然の反応であろう。

「まっ、そういうことなんで、早く中に入りましょうか？」

「その言葉を待ってたよ」

スバルの言葉にシドウは半分呆れ、半分喜びの顔をし、WAXA日本支部へと向かう。

ハッ！ と突然ミソラが口を開き、

「そっいえば何でわざわざ電波変換して、こっちに来たんですか？」

「確かに暁さん。日本支部から出てきましたよね？」

「そりゃあ、お前等」

シドウは鼻で軽く笑いながら、

「普通に出てくるより、カッコいいだろ？」

「記憶がない、ね」

WAXA日本支部の正面玄関ロビーにてヨイリー博士が呟いた。身長は低く、赤縁のメガネがチャームポイントの老婆。見た目とは違い、腕は確かである。

「そんなんですよ。ベランダに降ってきたと思えば記憶がない、ですよ。ゴスロリだし……」

「ベランダに降ってきた!?!」

驚きの声をあげたのはヨイリーではない。脇に立つミソラだ。

そういえば言っ てなかったっけ？ とスバルは内心思いながら、説明する。

その説明にはその場にいる三人は驚きの声をあげるしかない。

「まあ、後は歩きながら話しましょう」

五人は歩き始める。

階段を上り、研究室へと足を向ける。

「記憶は部分的に消えちゃっているみたいね……」
「ぶぶんてき？」

ランドマークは首を傾げる。

「だって自分の名前は覚えてるし、何故かスバルちゃんの名前も知ってるんでしょう?」

「確かに少しだけなら覚えているな……。だから部分的、か」

スバルは彼女のことを知らなかった。

だが彼女はスバルのことを知っていた。

不思議なことである。

「調べるって具体的にどのようなのですか？」

スバルの問いにヨイリーは軽く頷き、

研究室に置いてある機械を指差す。

「これを使うの」

ヨイリーが指差した機械はCTスキャンのようなもので寝転ぶタイプのもの。

ランドマーク三人分ぐらいのかなり的大型である。

「これで頭を調べる」

「私の頭を見るのか!？」

ランドマークは驚きの声をあげる。

だが多分、彼女の思っている事は少し違うと思う。

どうせ頭をぱっくり割って、直接見るとか生々しいものを想像しているのだろう。

「ランドマークちゃん。ただ君は寝ているだけでいいんだよ……」

「なぬっ!？ 直接頭にメスを入れられ、そこから顕微鏡で見た後にグロテスクな姿となった私を暗ーい路地裏に生ゴミと一緒に捨てられるわけではないのかっ!？」

最近、彼女の頭は正常なのか心配になってきた。
記憶喪失の時点で正常ではないが。

「そんなことはしないわよ。とりあえず貴女はこれを着なさい」

と言ってヨイリーが何処からともなく取り出したのは、手術の時に着るような緑色の服。

いつもゴスロリを着ている彼女がこれを着ることなど想像できない。
当然彼女もこれを着る事は嫌である訳であって……。

「やだー！」

ヨイリーの言葉から一秒も経たずに彼女は拒否した。

「駄目よ。これを着ないと検査できないわよ」

「やだー!!」

「記憶消失の原因が分からないわよ」

「……やだー!!」

「拒否権はないわよ」

「やだやだー!!」

遂にヨイリーは強行手段に出ることにした。

「ミソラちゃん。羽交い締めにして頂戴」

「了解」

「やだー!!」

命令どおりミソラはランドマークを羽交い締めにするが、彼女は負けていなかった。

その小さな体からは考えられないほどの力量で暴れ始める。

ミソラはサテラポリス極秘チーム遊撃隊メンバーではあるものの電波変換をしなければか弱き少女である。
あっという間にミソラは後ろに倒れこんでしまう。

「シドウちゃん！ 協力して！！」

「……………」

シドウからの返答はない。
なにかあったのだろうか？

「……………クカッッ」

寝ていた。

さつきから静かだと思えば寝ていたのか、とスバルは溜め息をつく。
立ちながら寝るとは中々難しい技術である。

「暁さん。呼んでますよ……………」

「ハッ……………！ ……よしっ、うまい棒は平和の象徴！！」

「この人、一体何の夢を見ていたんだ……………」

意味不明な言葉を呟き、シドウはランドマークをあっという間に抱き上げる。

その様子は丁度、たかいたかーいをしているようであった。

「おい！ 地味に胸を触るんじゃない！！」

「お前に胸は存在しない！」

シドウは抱き上げたまま手短にあったドアノブを捻り、ランドマークを投げ捨てた。

それを追う様にヨイリーとミソラが部屋に突入していく。

身のこなしが只者ではない。

S W A T 並みだ。

「フツ、仕事したぜ」

「……………」

シドウは扉に背を向け、スバルの方に向かって歩き始めた。部屋の中からはギヤアギヤア！と騒ぎ声が聞こえる。どうやらランドマークが暴れているようである。スバルは少し耳を傾ける。

『ほらっ！これを着なさい！！』

『やだ！』

『この服の材質とっても気持ちいいよ！』

『ほ……………』

『着る気になつた？』

『やだ！』

『これを着たらスバルちゃんが何でも好きなことしてくれるわよ！』

『ちよっ！ ヨイリー博士！！』

『……………好きなこと、か』

『着る気になつたかしら？』

『駄目ですよそんなこと約束しちゃあ！！』

『その条件乗ったぞ！！』

『駄目！絶対駄目ええええええええええええええええええー！！！！』

まずい、このままではまた何かやらされてしまう。

屈辱的腹踊りはとてもきつかった。

きつと性格の悪い彼女の^{フロントマーク}ことだ。

それを超える何かをやらされることである。

『頑張れよ。スバル……楽しみにしてるぞ』

「ロック。嫌味にしか聞こえ　　じゃなくてそれは完全に嫌味だよ
……」

基本的にウォーロックはスバルの勇姿はじが好物である。

だからウォーロックは地味にランドマークとは仲が良い。

「しっかし、お前はランドマークとの仲が良いな。……ミソラは大
丈夫なのか？」

「仲は良い、ですね……。まあ、あくまでも僕からの視点からです
けど。……っていうかなんでミソラちゃんが出てくるんですか？」

「いや、なんでもない……」

『星河スバル』とは鈍感な生き物である。

今までもその性格から幾度も損を繰り返してきた（本人は気づい
ていない）。

その性格は六年生となった今でも変わる事はない。

ミソラの気持ちに気づいているシドウは、彼女に同情しながら話題
を変えようと視線の先を変えていく。

先に口を開いたのはスバルだった。

「暁さんはいつ結婚するんですか？」

「ぶっ!？」

シドウは勢いよく噴出し、ワタワタと慌て始める。

その様子は面白いらしく、ウォーロック、そして珍しくアシッドも
その会話に加わる。

『おい、どうなんだよ？　ええ？』

『シドウ。顔が赤くなっていますよ』

「お前等、茶化すんじゃないよ！」

残念ながらも〜 とシドウは繋げ、

「ティアは母国の復興に励んでんだよ。俺もサテラポリスの仕事で忙しいし、そんなことは、ちよつと………な？」

「誰もクインティア先生とは言つてませんよ」

『ああ言つてないよなあ〜』

『一言も』

グツ！ と自滅したシドウは下唇を噛みながら、ガスガスガスガスガス、と壁を蹴り始める。

三人はそれを無視し、ランドマークが着替える部屋の扉の向こうの声を拾おうと耳を傾ける。

『フフフツ、ランドマークちゃんは胸が小さいのね』

『貴様には絶つつつつ対に言われたくないな』

『この中なら私が一番大きいかな？』

『ほらっ、とりあえずこれを脱ぎなさい』

『おい！ 何処触っているのだ！！』

『うわ〜。ゴスロリつて脱ぐのも大変だね〜』

『リボンが何重にもなっているからな。だからああああ！ 貴様は何処を触っているのだ！！』

ガールズトークが繰り広げられていた。

スバルは自然に中の様子を想像してしまい、赤面する。

そんなスバルを、壁を蹴っていたシドウは凝視し、ニンマリと笑う。

「今、想像してたら？」

「してないですよ」

「うん。お前も男だしな。当然の反応だ」
「だからしてないですよ！」

スバルは赤面しているのをばれないように下げていた顔を上げ、シドウを睨む。

シドウは笑っていた。やらしい顔を剥き出しにして、笑っていた。しかも右手の親指を立ててこちらに向けているオマケ付だ。

「扉、開けてきてやろうか？」

「!？」

この扉はサテラポリス専用のカードを使わないと入室できないタイプのものの筈だ。

……いや、忘れていた。

シドウはサテラポリスの若きエース。

その専用のカードを持っていない筈がない。

「……、」

「い、いや駄目です、よ……覗くなんてものは、駄目、ですよ」

スバルはツカツカと扉に向かうシドウを止めることが出来なかった。星河スバルとは優等生だ。これは誰も反論の仕様がな事实だ。

優しいし、勉強も中の上（宿題は頻繁に忘れる）。寝坊しないし、顔もそこそこイケている。

しかしそれ以前に彼は男だ。

今、理想郷への扉が開かれようとしている。

そんなチャンス而易々見逃す男が居るであろうか。

「アシッド。暗証番号の解説、頼めるか？」

「……紳士的な私にはキツイですが、私も男であり星河スバルの」

男』としての一步を進んで欲しいといのも確かです。協力しますよ』
「アシッド……ありがとう」

シドウは扉に付属されるカードリーダーにカードをスキャンし、扉の横にある九桁の相性番号機に手を掛けた。

そこで彼はアシッドの解析した番号を入力しようと、まず一桁目に触れた。

スバルの胸は膨らみ、またシドウも生唾を飲み込んだ。

未熟ながらも美しいランドマーク。

彼女の着替えシーンを覗けるなど最高ではないか。

しかしロリコン趣味は完全に否定する。

そんな期待と不安が入り混じる感情の中、

「へブシッ！」

おかしな声と共に、扉は開かれた。

扉は外からではなく、中から開かれたのだ。

そしてその開かれた扉にシドウは思いつきり頭を打ち付けた。

「あら？ シドウちゃん、どうしたの？」

「足を、滑らせ、まして……」

開かれた扉から、ヨイリー、ミソラ、そして最後に緑色のワンピースのようなものを着たランドマークが出てきた。

そんな服装をしたランドマークはゴスロリとは違った可愛さが溢れていた。

「すばる。ジロジロ見るんじゃない」

「み、見てなんかいないよ！」

スバルは慌てて、そっぽを向く。
視界の端には薄ら笑いを浮かべるランドマークとむっとした表情の
ミソラの顔が見えた。

「まっ、ランドマークちゃんはここで横になってももらえるかしら？」

指示どおりCTスキャンのような大きな機械に横になったランドマ
ークはその機械に驚きの表情を浮かべる。
記憶喪失である彼女には珍しいものであるらしい。

「検査を始めましょうか」

言葉が終わると同時に機械は動き出し、驚き続けるランドマークは
空洞になっているところに入っていく。
そして彼女は検査のための緑色の光に包まれた。

十二話 約束

ランドマークが緑色の光に包まれて三十秒ほどで診断は終了し、その後十分ほどヨイリーはモニターの前で頭を抱えていた。そしてそれも終わった。

スバル、ランドマーク、ミソラ、シドウは黙ってヨイリーの話聞いていた。

聞かされている話は『ランドマークの頭の調査の結果』。ヨイリーの一声は絶望たるものだった。

「ランドマークちゃんの記憶は戻らない」

単刀直入の鋭い刃の言葉。

遠回しにもせず、曖昧にもせず、ただ結論を述べた。

「も、戻ら、ない……」

ランドマークは途切れ途切れの言葉を口にした後、その場にペタリと座り込んだ。

それ以外の三人も頬に流れていく冷や汗を拭えずにいた。

「ランドマークちゃんの頭を調べただけど……」

ヨイリーはハア、と息を吐きながら、次の言葉を紡ぐ。

「これは記憶喪失じゃないわね」

「じゃ、じゃあ何でランドマークちゃんには記憶がないんですか！？」

スバルはヨイリーの肩を掴み、揺らしながら問う。その光景は娘が余命宣告され、必死になる父親のようである。ヨイリーの頭が激しく揺れるのを危険視したシドウは、スバルを止める。

スバルは瞳孔が開く勢いで動揺し、壁に背中から寄り掛かった。

「一体、どうして……」

スバルは何も分からない一人ぼっちの少女を助けたかった。

孤独に浸る彼女はまるで昔の自分を見ているみたいで、スバルはそこから引きずり出してあげたかった。

星河スバルとはそういう生き物なのだ。

「うん正確には『記憶喪失』じゃなくて……そうねえ」

ヨイリーは迷って、どのように表現したらいいか分からなくて逡巡する。

やがて彼女はハッ、と顔を上げ、

「ランドマークちゃんの頭の中には元々記憶はなかったのよ」

「元々記憶がない、ですか……」

ミソラは唇を尖らす。

そう、とヨイリーは答え、

「記憶ってというのは頭の中の記憶を保管する引き出しに入れられているの。そして『記憶喪失』ってというのはあまりにも大きなショックで、その引き出しが開かなくなったことをいうの」

でもね、とヨイリーは一旦言葉を切って、

「ランドマークちゃんは引き出しは開くけど、引き出しの中には何も入っていないのよ」

記憶が戻らないのではない。

そこに記憶は元々存在しない。

それでは記憶を戻すのは不可能だ。

何故なら何処にもそんなものはないのだから。

謎を解くために依頼した調査も、更に謎を深めるばかりだ。

夕日が空を支配する、夕方。

スバル、ミソラ、ランドマークの三人は帰路についていた。

ランドマークの記憶は存在しない。その事実には三人は無言を貫き通した（あのうるさいウォーロックや調子の良いハーブさえも）。

その真実に驚きもあるが、それよりもランドマークのことを考えると心が痛む。

「あ、あのランドマークちゃん」

スバルは何か元気付けることを言おうとするが、何も出てこない。自殺しようと考えてる人は自殺することを夢見るが、実際にやってみ

ようとなると怖気付く人もいる。
考えるのは簡単だ。

しかし実際にやってみようとなると難しい。
人間は悲劇系統の話や映像を見て『可哀想』と言えるが、いざ本物を目の当たりにすると何も口に出せない。
重すぎる、自分の考えを超えている。

「大丈夫。私は大丈夫だ」

ランドマークはスバルを察し、答えるが声の調子は嘘をつかない。
声は震え、今にも泣き出しそうな感じだ。

三人はようやくウエーブライナーの駅に辿り着いた。

「じゃ、僕等はこっちだから……」

「えっ？ ランドマークちゃんもそっちなの……？」

「うん。ランドマークちゃんは僕の家で居候だからね」

「へえ……そうなんだ」

スバルとミソラは一言二言の言葉を交え、そして別れた。

ええええええええええ！？ と今頃ウエーブライナーで叫んでいる
ミソラなど知る由もなく、スバルとランドマークはコダマタウン行
きのウエーブライナーに乗り込む。

ウエーブライナーは完全無人であり、運転手も居ない。

居るのはスバルとランドマークとウォーロック、それと電波空間の
ウィザードであろう。

スバルとランドマークは横並びの席に座り、相変わらずの無言を通
ず。

「や……く……」

「えっ？」

突然、ランドマークは口を開いた。
しかしそれは小さな声でスバルの耳には届く事はなかった。
すると次は大きな声で、

「約束を、覚えているか？」

「約束？ …… ああー」

一瞬忘れかけたが、完全に思い出した。

それは緑色の服を着ないランドマークのいうことを聞かせるために
ヨイリーが口にした言葉。

『これを着たらスバルちゃんが何でも好きなことしてくれるわよ！』

まったく迷惑な話である。

僕は何も関係ないのに……、とスバルは溜め息をつく。

しかしその条件は飲む。

スバルは優しい男なのだ。

「どうぞ。何でも言うこと聞いてあげるよ」

「そうだな……」

全裸でコダマタウン一周？

コダマタウン住人の女性一人残らずスカートめくり？

道路のと真ん中でギャグ連発、爆笑を得られなかった度に土下座？

スバルはそんなキツイことを考えていた。

だが、

「えっ？」

ランドマークはスバルの腰に腕を回し、抱きついてきた。その驚きの行動にスバルは動揺せざるおえない。

「……………」

「あ、あの……ランドマーク、ちゃん？」

「何でも言うこと聞いてくれるのであるう？」

スバルは無理に引き剥がそうとはしなかった。

ただランドマークの温もりを感じていた。

普段からゴスロリの格好をして体つきは分からなかったが、触れ合ってみると彼女の体は小さく、少し触れたら崩れ落ちそうなほど弱々しいものであった。

そしてそこでスバルは気づいた。

彼女は泣いていた。

小さな体は小刻みに震え、必死に声を押し殺していた。

腰に回る腕は更に力を強め、服の皺は深く刻まれる。

「わ、私には記憶が、ない。存在、しない……。私は、誰、なのだ

……………」

スバルは黙ってその言葉を聞き、ウォーロックさえも冷やかそうともせずただ黙っている。

途切れ途切れの言葉はスバルの心に刺さっていく。

可哀想な空^{ランドマーク}つぼの少女は今まで閉じ込めていた悲しみの心を今は開放していた。

「わ、私は、一人ぼっちだ」

「違う！」

気づいたらスバルは叫んでいた。
ランドマークを引き剥がす。
驚いた表情をするランドマークの眼は充血していた。
頬には涙の痕がうつすらと浮かんでいた。

「君は一人ぼっちなんかじゃない！ この町には君のことを想っている、想ってくれる人がいる！ 僕だって君の事を考えてる！ そんな皆に想われている君が、一人ぼっちなわけじゃないか！！」
「き、記憶は？」

スバルは席から立ち上がり、座っているランドマークに視線を合わせる。

「記憶はこれから作っていけば良い！ 君は空っぽなんかじゃない！ 僕と遊んだり、今日やったことは確かに記憶として蓄積されているんだ！」

だから！ とスバルは一旦言葉を切り、

「君のお話はこれから始まるんだ。そのためなら僕はこれからも一緒に居てあげるし、一緒に遊んであげる。……なんだってするよ！」

フツ、と何かが切れた音がした。
ランドマークは眼を見開き、何かを言おうとして、しかし喉が熱くなって、何も口に出せなくて。

眼からは涙が溢れ出してきた。

喉から発せられるのは声ではなく、咆哮に近いものであり、嬉しいような咆哮だった。

頬に流れる涙をスバルは拭ってあげ、ランドマークはしゃっくりをあげながらスバルの首に腕を回す。

席から飛び上がったランドマークをスバルは抱きとめ、彼女を抱っこする。

ゴスロリでリボンが何重で、真っ黒なドレスは重かったが、スバルは降ろさなかった。

友達を得たランドマークを彼は降ろさなかった。

必死に抱きとめ、ここに留め、決して降ろさない。

彼女からは涙に混じった、吹っ切れた爽やかな匂いがした。

十三話 戦前

真夏の夜、アイドルと言う仕事を終え響ミソラは下を向きながらベイサイドシティの帰り道を歩いていた。

下を向きながら……というのも彼女は今、精神的に疲れているのだ。だからといって仕事で嫌なことがあったとか、友達と喧嘩したとかいうことではない。

だが彼女にとつて、今までの人生で鬱ランキング上位に入るほどの出来事が昨日起こったのだ。

眼を閉じれば、その光景がフラッシュバックで映し出される。

ランドマークと名乗る少女がスバルの部屋にいた。

でも、それだけだったならまだ良いのだ。

しかも今日、聞いた話によると彼女は居候の身であり、同居しているのだ。

両親がいるとはいえ、思春期も間近な男女が一つ屋根の下で暮らすなど

「不純異性交遊だよー!!」

突然そんなことを叫んで、近くを歩いていた親父がビクッ!!としていたが、ミソラはそれも気にせず歩幅を大きくしていく。

早歩きだったのが、次第に足を早く動かし、全力疾走でその道路を駆け抜けた。

息が上がってくるがそれも気にせず、足が動く限り走り続ける。

気づけば、もう自分の家の前まで来ていた。

彼女はドアに装着されている認証デバイスにハンターV.Gを翳す。

ビー、という音がすると鍵が開く。

そうしてドアハンドルに手を掛けた時だった。

『ミソラ!』

ハンターから彼女のウィザード、ハーブがミソラに声を掛ける。
ミソラはぎこちない笑みを浮かべながら、ハンターを覗き込む。

「何？ハーブ……」

『スバル君とあの子の関係が気になってるんでしょう?』

「ッ!」

全くの図星なのでミソラは下唇を噛みながら、黙りこくる。

そうなのだ、今のスバルとランドマークは楽しそうで、まるで彼女と彼女のようにあるのだ。

おかげでミソラはスバルにペアチケットを渡すこともできなかった。

『……今からコダマタウンに行かない?そうしてスバルくんに聞いてみるのよ。』この子はスバル君にとっての何なの?』ってね』

「……うん。じゃ、じゃあ行こうかな」

ミソラはそう言うてから、拳を握り締めながらハンターを上に掲げて電波変換を行った。

ロツポンドーヒルズ……

ロツポンドーヒルズの象徴といつても過言ではないこの巨大なビル、TKタワー。

中には映画館や美術館などがあり、集客も上々の大人気スポットである。

そしてもう一つ、デートスポットとしても人気があり、夜空に浮かぶ星が見えるのはロマンチックである。

そして今こそ、その夜であり、真っ黒な空には綺麗な星がキラキラと瞬いていた。

ロツポンドーヒルズ内では熱々のカップルが肩を組み、その美しき星を眺めている。

窓から注ぎ込む青白い月明かりに思わず目を塞ぐ青年、ベテルギウス。

今は擬人化した状態であり、スーツ姿に長身で前髪は両目を隠し、中々のルックスの持ち主となっている。

ベテルギウスはカップルが出歩くTKタワー内で、一人寂しく窓からの夜景を眺めていた。

そんなベテルギウスに不意に後方から声が掛けられる、振り向くとドレス姿の女性が立っていた。

逆ナンパは今日で何度目だろうか？ベテルギウスは心中、溜め息をつきながら慣れたように丁寧にその女性からのお誘いを断る。

その女性は自信があったのか、ベテルギウスが断るとガツクリと酷く肩を降ろしながら、何処かに歩いて行ってしまった。

ベテルギウスも心底悲しそうな顔をする、紳士的な彼にとって女性が悲しむ姿は見たくないのだ。

「辛いぜ……」

「何、言っただやがんだ」

ベテルギウスは悲しそうな顔を保ったまま首を横に向け、そして更に顔を顰める。

そこには小学校低学年と言っても過言ではない身長を持ち主、プロキオンが立っていたのだ。

長身の彼の三分の一ぐらいの身長だ。

「虚しい……」

「人の顔見るなり、何だよその反応は！」

「そりやお前、ガキ相手じゃね……」

女性に対して優しいベテルギウスが唯一、気を使わない女性……いや女の子だ。

プロキオンは身に纏う灰色のボロ衣を揺らしながら、地団駄を踏む。そういう行動がガキっぽいんだよ、と言うとまためんどくさい事になりそうなので、ベテルギウスはあえて口にはしなかった。

「そうそう……お前の言うとおり、しっかりとロックマンの調査をしてきてやったぜ」

意外にも話を切り出してきたのはプロキオンの方であった。

ベテルギウスは真顔に戻り、プロキオンに向かい合う。

プロキオンは見上げるように言う。

「偶然にも奴の玩具箱を発見してな、内部に潜入して調査したところロックマンによる戦闘状況がサーバーにこびり付いていやがった。残念ながら、メテオGでの戦闘は分からなかったがな」

十分だ、と答えるベテルギウスに、プロキオンは歯を剥き出しにして笑みを作り、続けた。

「奴の力の源は……………絆だ。完璧主義の野郎との戦闘はFM王との絆がロックマンの力を底上げした。おそらくメテオGの時も同じように……………」

それを最後まで聞いたベテルギウスは、プロキオンとは違った上品な笑みを浮かべ、腰を屈めた。

膝を突き、王に仕える臣下の様な立ち振る舞いだ。

「ありがとな。これで俺の作戦は成立する……………」

「おう！……………って頭を撫でるんじゃないやねえよ！自分はガキじゃねえんだよ！！！」

プロキオンは自分の髪と同じ赤色に頬を染めながら、ベテルギウスの手を振りほどく。

ベテルギウスは怒る様子もなくニコニコと笑みを浮かべながら、立ち上がる。

「さて……………準備といこうか」

「頑張れよ。自分は先にあっちに戻ってるからな」

「おう。しっかり俺の帰りを待っていてくれよ」

そう言うと、ベテルギウスは誰にも怪しまれる事なく姿を消した。

まるで最初からそこに誰もいなかったかのように、ひっそりと静かに消えた。

そして残された少女は誰に言うわけでもなく、呟いた。

「待ってるからな……………」

十四話 小さな幸せ

コダマタウンは夜となった。

街頭の光は夏の夜の羽虫を呼び寄せ、暗い夜道を照らし出す。

静まる夜道、しかし電波の道ウェーブロードに夜は存在しない。

夜となっても人々のメールが行き来するし、サテラポリスがウイルスの対処をしていたりする。

ハープ・ノートはそんな賑わうウェーブロードを勢いよく滑っていた。

下を見れば暗くて静かだ。

しかし一度、^{ひとたび}正面を見ればそこには賑わいが存在している。

彼女は全くの別世界に居るような錯覚を感じる。

刹那、ウェーブロードでの賑わいが『消失』した。

だからといって、デンパ君が残らず破壊されたわけでもなければ、暴走ウィザードの出現で皆が逃亡したわけでもない。本当に、ごく自然にいなくなったのだ。

ハープ・ノートから五十メートル離れたところで、数体のデンパ君は用事を思い出したかのように一斉にUターンすることで離れる。

ハープ・ノートの近くには誰一人として近づくものはいない。

いや一人。

ハープ・ノートから数メートル離れた正面に長身の電波体が立っている。

「『完全遮蔽壁』の特性だ。これは便利なものでね、密議とかの時
に使うものなんだけど、こういうときにも使えるんだよね」

「あなた……何者？」

長身の電波体は息を短く吐いてから微笑を浮かべ、『その名を』答えた。

ハープ・ノートは『その名を』聞く、全くの同時に視界が暗くなつた。

時代は進み、生活に大いに役立つ電波技術は飛躍的に発達した。しかし電波技術にスポットが当たりがちだが、時代が進んだことで発達したのは電波技術だけではない。

例えば道路……

合成ゴムが主成分となる道路が普及しているため、転ぶなどの怪我は減少している。

例えばロボット工学……

ウィザードの集団ノイズ感染に陥った時の第二辣腕スベアライヴとして、発達したロボット工学には大きな期待が掛けられている。

例えばインスタントラーメン……

本格的なツルツルとした麺、最後の一滴まで飲み干せるスープ、バ

リエーションに富んだ味、意外にも化学調味料は無使用、なおかつ栄養に偏りが無い。

そしてインスタントの長所である、“お湯を掛けて三分”に変わりはない夢のようなインスタントラーメン。

「フフフツ……」

小学六年生、星河スバルは望んでもいないのに口からは笑いが零れしてしまう。

今、彼は幸せの絶頂に浸っていた。

目の前にはインスタントラーメンの二つのカップと生卵が二つ。

「幸せだ……インスタントに卵とかマジ幸せじゃないか」

『小せえ幸せだな……』

「なんだかんだで小さい幸せが結構良いもんなんだよ、ロック」

今日七月二十五日、月が青白く光る中、家ではスバルとウォーロツクの二人……いや、ランドマークと一緒に三人しかいなかった。

それというのも母であるあかねは大事な用があり、父である大吾にいたっては最近仕事で忙しく帰宅してないためだ。

つまり晩飯は自分達で作れ……とのことだ。

スバルはもちろん記憶喪失のランドマークが料理を出来るはずもなく、インスタントで済ませることとなった。

「おい、スバル……まだできないのか？」

「あつ、ちよつと待ってよ」

キッチンまで文句を言いに来たランドマークは生卵を二つ鷲掴むと、『殺人級地獄味噌』の容器に放り込んだ。

「ランドマークちゃん！卵は割らなくちゃいけないんだよ！それに卵は一日一個までだから！！」

「けち臭い奴だな……」

スバルは何とか割れずに済んだ卵二つを容器からそつと取り出し、別の容器に放り込んだ。

その光景にウォーロックは首を傾げる、それに気づいたスバルは人差し指を左右に振る。

「ロック甘いね……。生卵をインスタントに入れるのは素人のやることだよ。プロは温泉卵だと相場は決まっているのだよ！！」

『お前はこんなにもインスタントに思い入れがあったのか！？』

「私は生卵でいいぞ」

スバルはそう聞くと一つの卵を『即効天上昇天塩味』に黄身を入れ、もう片方の卵を温泉卵製造容器に放り込み電子レンジならぬ電波レンジに入れた。

「じゃあ、お湯も沸かすか……」

スバルが最新型のポットのボタンを押す　　と同時にドゴオオオオオオン！！という爆音が炸裂した。

それは外、夏の夜の虫の鳴き声を全て掻き消し、鼓膜に響くのは爆音に続く衝撃波の空気を切り裂く音。

「な、なんだ！？」

「ッ！」

ランドマークは突然のことに身を縮め、スバルはほとんど反射でキツチンから離れ、玄関でサンダルを履いて思いつき扉を開けた。

目の前は爆発によって炸裂する粉塵で視界は遮られていた。突然、夏の乾いた風が靡いた。

それは少しずつ粉塵を吹き飛ばしていく、そしてようやく視界が明るくなるとスバルは爆発の中心点へと向かう。

それは意外と近くにあり、そこを中心に、深いクレータのような穴が道路を抉り取った。

さらにその中央　　響ミソラが横たわっていた。

「ミソラちゃん!?!」

スバルは滑り台の要領で深いクレータを滑り降り、倒れるミソラの体を抱き起した。

外傷は　　目立たない、というよりないのだ、全くの無傷。

「う、う……ん………」

「ミソラちゃん!」

深い眠りから覚めたようにミソラは瞼をゆっくりと開いた。

スバルは必死に彼女の名を呼ぶ。

それに答えるかのようにミソラは上半身を起こした。

「ミソラちゃん……良かった………」

スバルは心の底からホッとするが、次の瞬間には硬直することとなる。

いつもの彼女じゃない、彼女の元気な声はスバルの声に返ってこない。

返ってきたのはミソラの声じゃない、透明な少女の声。

「貴方………誰?」

十五話 失われたメモリー

青々とした月が出る真夜中

リビングには独特な味噌と塩の匂いが充満している。

少年 星河スバルは『殺人級地獄味噌』を、

少女 ランドマークは『即効天上昇天塩味』を食し終えた。

中には温泉卵という豪華なインスタントのだが、スバルの頭の中は疑問で一杯であった。

実は彼の初めてのブラザー 響ミソラが外で倒れていたのだ

記憶がなくなった状態で……。

今彼女はスバルの部屋のベットで寝ている状態だ。

最初は見知らぬ男に怯えている様子だったが、疲れていたのだから、ベットに入れてやると瞬く間に寝てしまった。

腹が減っては何とやら……で二人は一階のリビングで晩御飯を食していたのだった。

スバルはそのスープも飲み干され空っぽになった容器を家庭ダストシュートに放り込む。

「さて……ハーブ」

『ええ……』

その声はリビングから聞こえる。

唯一の目撃者、響ミソラのウィザードのハーブだ。

『……私とミソラがスバルくんの家に行く途中、突然賑わっていたウェーブロードが静まり返ったの……それもミソラの周りだけね……』

……そして現れた一人の電液体……名前は　ベテルギウスだっ
たかしら？」

スバルの顔は驚愕に染まり、ランドマークは何か引つかかったよう
な険しい顔をする。

ベテルギウス　スバルとシドウがプロキオンと激突した際、その
戦いを止めに入った張本人だ。
今度は彼が動き始めたようだ。
ハープは続ける。

『すると彼は一瞬にしてミソラに近づいて………そこからは分か
らないわ、ごめんなさい』

『いや十分だよ………ねっ？ ロック』

『ああ、やるべきことは決まったな』

ベテルギウスを倒す。

彼が犯人であつてもそうでなくとも、何かを知っていることは確か
だ。

そうとなれば倒して、ミソラを元に戻す方法を聞き出すしかない。

「となると、ベテルギウスを探さないかね………」

『ヨイロー婆さんに頼むしかないな………』

『ねえ………』

考え込む二人にハープはいきなり声を掛ける。

二人は考えを中断させ、ハープを見る。
悲しそうな顔だ。

『スバルくん………ミソラとしばらく一緒にいてくれないかしら
？』

「えっ！？でも……」

記憶はないんでしょ？ という言葉をスバルは飲み込んだ。きつとミソラは寂しいのだ。

それもそうだ、存在したはずの記憶が消え、心が空っぽになったのだ。

彼女の心は今、『悲しみ』と『不安』で埋め尽くされていることだろう。

人間というのは傍らに誰かがいてくれるだけで、勇気が持てる生き物だ。

例え記憶はなくとも、傍にいただけで彼女の支えとなることだろう。

「じゃあ、今日から僕の家泊まりだよ」

ミソラは聞いた限りだと一人暮らしのようなので、寂しいだろうと考えたスバルは提案を出した。

それを聞いたハープは顔を綻ばせ、ランドマークは少しムツとした表情になる。

ウォーロックはその様子を面白そうに眺め、冷やかし始めた。

『どうした？愛しのスバルが他の女と一緒にいるのは嫌か？』

「何で私がお前に惚れなきゃいけないんだ！」

「いや……僕に言われても……」

少し頬を赤く染めるランドマークはフンッと鼻を鳴らし、席を立つ。

「私は先にすばるの部屋に行く！」

「何でそんなポテンシャル上げて言っの？」

ランドマークは無視し、リビングの扉のノブに手をかける

前にその扉は開いた。

「ミ、ミソラちゃん……」

スバルは思わず声を発する、そうリビングにやって来たのは透明な少女^{ソラ}だった。

彼女は眉を顰め、困ったような表情を浮かべた。

どうやら記憶は戻っていないらしい。

「僕のこととは……覚えてないよね？」

「……はい」

その答えはスバルにとって堪らないほどに悲しかった。

否定されると分かっていても、問いたかった。

僅かな希望にかけ問いたが、やはり返ってきたのは『否定』だった。

「あゝ、もしかして西方教会の四旬節の前に見られる祝祭の

「

「カーニバル”じゃないからね”

惜しい！『バル』は合ってるのに、とスバルは内心思いながら指をパッチンと鳴らす。

ランドマークはミソラを見て、私は覚えてるのか？ と聞いたりしている。

「ごめんなさい……」

「……そうか、スバルは？」

「あゝ、もしかして薄く伸ばした金属で叩き合う楽器の

「“シンバル”じゃないからね”

「

はてさてこの調子で響ミソラの記憶は元に戻るのでしょうか？

夜は明け、真つ黒の世界に太陽の光が差し込み始めた。

その美しい光景を眺めるのは青年　ベテルギウス。

彼はブツブツと何やら呟いている、傍目から見れば独り言のようだが、決して違う。

彼はとある場所に通信を入れているのだ。

「爺様……作戦は着々と進んでおります」

うむ……その調子で頑張ってくれよ

話し相手は爺と呼ばれし、主の電波体である。

ベテルギウスは何もないところにむかつてお辞儀をする。

この通信はサウンドオンリーなのである。

「この私がロックマンを殺害といった野蛮な行動をとらず、効率的にロックマンを無力化しましょう……プロキオンとは違って必ず成功させます」

何が“私”だ！ゴラァ！テメエの一人称は“俺”だろうか！何、

目上の人にはいい子ぶっちゃてるんだこのボケナスがあああああああ
あ！！！！

返ってきたのは洪い主の電波体の声ではなく、野蛮な声でありながら美しい声のプロキオンだ。

そうとなればベテルギウスは肩つ苦しい敬語は使わない。

「何だと、邪魔するな！お前はいつもいつも野蛮なんだよ！少しは俺を見習え！！」

ダアアアレがテメエエエなんかを見習わなくちゃいけねえんだよ！この

ベテルギウスは、プロキオンの汚らしい暴言を聞く前に通信を切った。

怒り狂っているプロキオンの姿が目に見えてくる、とベテルギウスは微笑を浮かべ空を見上げる。

真っ黒でありながら、少し赤みがかかった空。夜明けの特徴だ。

「ロックマンの無力化はもうすぐ完了される……」

ベテルギウスは誰かに宣言するかのようになり、独り言を呟いた。

十六話 あらゆる作戦

コダマタウンのとある広場にて、星河スバルは立っていた。そしてスバルから発せられた言葉に驚きを隠せない少年少女がいる。

「ミソラちゃんが……!?!」

「記憶喪失……!?!」

「ですってー!?!」

驚いているのは白金ルナ、牛島ゴン太、最小院キザマロの三人だ。その三人に向かい合っているのは、星河スバル、ランドマーク、透^{ミソラ}明な少女。

「そうなんだ……ミソラちゃんは全てを忘れているんだ」

「そうらしいぞ」

スバルは苦しそうに言い、ランドマークは付け加えるように言う。ルナはショックを受けているスバルを案ずるとともに、隣にいるフリルたくさんのコスプレ少女は誰だ?と疑問を覚える。それに気づいたスバルは、

「この子は家に居候しているランドマークという子だよ」

「居候……って一緒に住んでいるのか!?!」

「えっ!?!まあ……うん」

何故か物凄く驚いているゴン太にスバルは頷きながら、自分の身に殺気を感じた。

視線をずらして見れば、どす黒いオーラを放っているルナがいるではありませんか。

「ほお、と、というとき方は同じ屋根の下で女の子と一緒に住んでい
る……ということになるのかしら？」

「まあ、そうですね。決して疾しいことはないし、何か特別なこと
もしてませんよ……普通の生活だよ。ねっ？ランドマークちゃん」

スバルはルナの放つプレッシャーに耐えられず、バトンをランドマ
ークに押し付けた。

ランドマークは暫し眉間にしわを寄せ、思い出したように言った。

「『腹踊り』をしたぞ！」

今、爆弾のスイッチはプッシュされた。

更に今の言葉だと、『腹踊り』をしたのがランドマークみたいな感
じではありませんか？

「スバルくん……そんな卑劣なことをさせたのね？」

ルナの言い草は、まるでスバルが幼気な少女に『腹踊り』を強要し
たかのようである。

このままではスバルの身は危ない！……だがロックは助けてくれそ
うもない（彼はこの状況を楽しんでいる）。

そして誰もこの状況では助けてくれそうもない。

いや助け舟は透明な少女が出てくれることとなる。

「あ、あの！私も一晩泊まりましたけど、特に何もなかったですよ
……！」

ああ駄目だ……助けになっていない。

確かに疾しいことはなかったということを示されたが、ミソラがス

バル宅で夜を明かしたことがばれた。

もう疾しいこと以前の問題であり、スーパー大人気シンガーソングライターである響ミソラが、無防備にもスバル宅で夜を明かしたことが大問題なのである。

これにはルナのとぼっちりを受けたくない一心で引っ込んでいたゴン太とキザマロが黙っていない。

「スバル！ミソラちゃんを独り占めするなんてズルいぞ！」

「そうです！ミソラちゃんは皆のアイドルなんです！！」

「いや……別に僕専用とかそういうことじゃないんだけど……」

結局スバルには味方はいなかった。

いや正確には敵はルナとゴン太とキザマロだけなのだが、ランドマークとミソラの鈍感がスバルへのカバーになっていないのだ。

数十分経って……

言い争いはスバルの敗北で幕を下ろした。

「とりあえず……ミソラちゃんの記憶が戻るように意見を出してちようだい」

さすがクラス委員長白金ルナ、場をまとめるのは慣れている。だが誰も意見を出そうとはしない。

それもそうだろう、そう簡単に記憶が戻るなんてことができるはずもないのだから……。

『キザマロくん。ショック療法なんてどうだろう？』

提案したのはキザマロのウィザードペディア、さすが頭脳部門である。

こついう時に頼りになる……悪く言えばこの時しか役に立たないだけはある。

「シヨック療法……いいかもしれませんね」

「シヨック療法……って食えんのか？」

おかしいことを言ったのはゴン太である。

キザマロは明らかに馬鹿にしたような顔をしている。

「シヨック療法というのはですね、その名の通り相手にシヨックを与える療法なのです」

「シヨックか……俺は朝飯食い逃したときとかシヨックだな……」

『プロロツ、確かに食い逃したとき悲しそう顔するもんなお前…』

…

「話を続けていいですか？」

キザマロは簡単であり、加えてゴン太の理解能力で把握できるように説明している。

その間にルナは人差し指で透明な少女を指示し、高らかな大きな声で言い放つ。

「とりあえずシヨックを与えてみましょうー！」

「シヨックって具体的に何をするんだ？」

『そうね〜』

『

ランドマークの問いに、ハーブは思いついたという感じで口を開く。その表情は明らかに何か企んでいる顔だ。

『スバルくんがミソラに接吻するなんてどうかしら?』

「せ、せつぷうん!?!」

「だ、駄目よ!そ、そんな破廉恥ハレンチなこと!?!」

スバルはまさかのハープの発言に赤面し、ルナは必死に両手を握りしめて振り回しながら叫ぶ。

“キス”とは言わず“接吻”というところが、何か生々しかった。恋愛関係ならお任せ!ルナのウィザード、モードの体に閃光が走った。

『ま、まさかハープさん……貴女はスバルさんとミソラさんの関係を応援しているんですね……』

『そうよ、私は完全無欠のミソラSIDEよ!!!』

それなら私はルナちゃんSIDE!とか何とか言って互いに火花を散らすウィザードは放っておいて、スバルはショックのことについて考えを張り巡らせることにした。

「(ミソラちゃんが驚くようなこと、!そつだ!ロック、こ

れから僕の言うとおりにしてね)」

『(なんだなんだ?)』

ゴニョゴニョ、としばらく話した後スバルはミソラのほうを見る。彼女は可愛らしく首を横にかしげる。

「あー!あれを見る!?!」

「?」

スバルは思い切り大きな声で空の彼方を指さす。

ミソラは何事か？とその指さす方向に顔を向けた。

「（ロック！今だ！！）」

小さいと同時にテンションが高い声で、ロックに合図を送る。

ロックはその合図を読み取ると、ミソラの肩をトントンと叩いた。

『うおおおおおおおおおお！！』

「（決まった！！）」

これこそ『ウォーロック突撃作戦』！！

スバルがミソラの注意を引きウォーロックをスタンバイさせ、合図とともにウォーロックがミソラを驚かすという簡単で最もシンプルな作戦である。

きやああああ！！という声を耳にする。

やったと思ったスバルだったが、当のミソラはというと……………。

「アハハハハ！面白い顔！！」

大笑いしていた。

じゃあさっきの叫びは何だったんだと首を傾げるスバルは、驚き腰を抜かすルナの姿を目にした。

驚いていたのは白金ルナであった。

「そっいえば委員長……………ロックが苦手だったよね」

スバルは作戦失敗にがつくりと項垂れ、とりあえず助け出そうとルナに片手を差し出した。

ルナはその手を目をパチクリとして眺め、頬を赤く染める。

「しょ、しょうがないわね……仕方ないから助けてもらおうかしらね」

「何、偉そうに言ってるんだようっと」

スバルは中々握ろうとしないルナの手を、こちらから握って思いっきり引つ張った。

まずい力が強すぎたせい、ルナはキャツ、と珍しく女の子みみたいな声を洩らしながら躓いた。

「大丈夫？」

「ええ

！！」

ルナは今自分がどういう状況であるのか分かってしまった。

分かってしまったが故に彼女は顔をザク口のように真っ赤にする。

ルナはスバルの胸に飛び込んでいる　抱きついたような感じなのだ。

『（ルナちゃん！チャンス、チャンス！そのままごく自然に胸を押し付けるんだ！！）』

「（なっ！？何馬鹿なこと言ってるのよ！！）」
「？」

残念ながらルナの滑走路のような胸部では押し付けるところもない。スバルは何事か？と思いつながらルナを引きはがした。

その時残念そうなルナの顔を見たが、気のせいであろう。

「シヨック療法は駄目だったのですか？」

「うん、ほかの方法を考えよう」

『俺は作戦に問題があると思っただけだな………』

ショックを受けたのは、面白い顔と評価されたウォーロックの方であつた。

ベテルギウスはベンチを独りで占領していた。
視線の先にはああだこうだと言ひ争う子供達。

今は擬人化を実行しており、電波反応を洩らさないように努力している。

「フツ……無駄なことを」

ベテルギウスはスーツの胸ポケットから小さな小瓶を取り出す。

“夢幻瓶”と呼ばれるこの小瓶は、人が思う夢、幻、記憶などを奪取することができる物だ。

だがこの小瓶も奪取することができないものがある。

それは『知識』だ。

『知識』を奪われていないから、物の名前は分かり使い方も分かる。そしてこの国の言語を喋ることができる。

ただ『記憶』はないため、物を何時何処で買ったとか、この言語はこうやって覚えたとかは頭にはないのである。

そして正確には響ミソラは記憶喪失ではなく、記憶を奪われたのだ。

だからあの少年たちがやっていることは無意味だ。
元々頭のないことを甦らせることなどできないからである。

「無様だよな……」

出来る筈もないと知らず、無意味な行動を繰り返す。

本当に無様な生き物だ、力を欲し、地位を手に入れれば目上に反旗を翻す。

「『だから面白い』……とかプロキオンは言うが、俺はそうは思わんな」

ベテルギウスはベンチを立つ。

足が長いため座高は低いが、全体の背は大きいのでそのギャップが目につく。

通りかかる女は彼に見惚れるように横目に見る。

「作戦は最終段階だ……… ロックマンの絆を根絶やしにする」

またもや彼は見られていたにも拘らず誰にも気づかれずにその姿を消した。

十七話 函作戦

日は沈み、コダマタウンに闇が訪れた。

その闇の中で少女は、街頭で照らされて光っている道路を歩いていた。

今の時間帯、夏休み中であるなら人が賑わっている筈なのだが、彼女の周りには全く人の気配はしない。

それというもわざと人どりの少ない場所を選んで、歩いているためだ。

「全く、どうしてこんなことに」

少女　白金ルナは項垂れながら、ずいぶん昔のように思われる出来事を頭の中でエンドレス再生していた。

まだ日が沈む数時間前のこと……………

試行錯誤を繰り返してもミソラの記憶は戻らず、六人は頭を抱えていた。

だがスバルには一つの考えがあった、しかしそれはブラザーである

友人に危険が伴うものであった。
それをスバルは話すと、皆はそれがどうした？と言うように言葉を返してきた。

「協力するときに協力する……それがブラザーでしょ？」

そのルナの放った言葉はスバルの心に響き、作戦の実行を決意する火種となった。

考えとは“囷作戦”……。

読みが正しければ、相手の狙いは単にミソラの記憶喪失ではなく、スバルの周りの人物へダメージを与えることで追い詰めようとしているのだ（正確には相手の狙いは周囲を記憶喪失にし、スバルを孤立させることでの無力化が狙い）。

となるとスバルの周囲の人物が再び狙われることになる。

しかしこの“囷作戦”はそれを逆手に取り、囷をチラつかせ、飛びついて来た敵を一網打尽にするというシンプルで分かりやすい作戦である。

とまあこんな具合で囷として決まったのが、白金ルナであり、夜のコダマタウンを徘徊しているのである。

そしてその後方……スバルとゴン太はルナの跡をついていく。

記憶喪失で戦えない響ミソラはランドマークとスバル宅で、キザマ口も自分の家で待機をしている。

ここに残っているのは戦える者のみ……サテラポリス遊撃隊リーダー暁シドウにも連絡を入れているのでスバル達と同じようにルナを温かく見守っていることであろう。

もう心の準備はできている、戦うという熱い心が珍しくスバルの体に渦巻いていた。

『かれこれ一時間以上ついて行ってるけど、本当に来るのか?』
「敵は必ず来るよ……そして僕たちできっと倒す……!」

と、気合を入れていている最中にハンターに通信が入る。
横槍を入れられたスバルは不機嫌そうに通信を繋げる。

変わった様子はそちらにあるか?

「暁さん!?!」

ハンターから出現したディスプレイに映されたのはシドウの顔。
口元に菓子のカスがついているところを見ると、うまい棒を食して
いたのだろう。

「こちらは何も……そっちはどうですか?」

アシッドのサテラサーチングでも反応は全く感じられないぜ……
本当に来るのか?

その返しにスバルとゴン太は視線を合わせてから、シドウに向き直
り首を縦に振る。

「必ず来ます!委員長が危険な目に合うかもしれないのは気が進ま
ないけど、俺、がんばるぜ!……ます」

「ゴン太の言うとおりです!僕たちがしっかり委員長を尾行するの
でよろしくお願いします!!」

ハハハツ頑張れよ、と通信が切れた。

スバルとゴン太は引き続きルナの監視を続けた。

どうやらルナは気が強い女の子のようだ。
そんなことは誰でも知っていることなのだが、まさか囷に使われても構わないというのは驚きだ。

……実はルナ自身怖い。

それでも囷を引き受けたのは、友達を助けたいという気持ちか恐怖よりも上回ったのときつと守ってくれろと信じているから。
ただ単純に信じることで囷になれるとは、やはり彼女は気が強い女の子のようだ。

『……ルナちゃん、大丈夫？』

「ええ、大丈夫よ。私にはロックマン様がいるから……」

モードはルナの言葉に、溜め息をついた。

ルナはそんなモードに首を傾げると、モードはハンターから飛び出した。

『本当に“ロックマン様”がいるからなの？……“スバル君”がいるからじゃないの？』

危うくルナは噴出しそうになった。

顔を林檎のように真っ赤にし、あわわわわ！と手足をバタつかせる。どうやら囷星のようだ。

「……まあそれもあるわね、だ・け・ど！あくまでも一番はロッキマン様よ！ロッキマン様！！」

暴れるルナはドンッ！と体を通りかかった人にぶつけてしまった。ごめんなさい、と礼儀正しく謝るルナ。

さすがクラス委員長兼生徒会長といえよう。そのぶつかった人は、

「大丈夫ですよ」

とこちらも礼儀正しく言った。

ルナは優しい人で良かった、と内心ヒヤヒヤしながらその場を去ろうとした。

その時だった。

パシッ！ とルナの腕がその人に掴まれた。

「俺は貴女に用があるのですから」

瞬間、その人は眩い光に包まれた。

現れたのは青いボディに長い髪に見立てた布切れ、ベテルギウスだ。

「次はロッキマンの家族から実行しようとしたのですが、まあいいでしょう」

ベテルギウスは胸部分から一つの小瓶を取り出した。

ルナはその小瓶を凝視した。

小瓶の中には不思議な液体のような、気体のような、見ていると自然と笑顔になるようなものが入っていた。

「分かるか？これが記憶というものだ……」

「記憶……ミソラちゃんの記憶……！」

「その通りだ、君の記憶もここに溜められ」

ベテルギウスの腹の部分にカチャッとロックオンされた。

一瞬の出来事であった。

アシッド・エースがベテルギウスに斬りこんで来たのだ。

ベテルギウスは後方に跳ぶ事でこれを交わした。

「交わされたか……」

だがこれでは終わらない。

跳んだ先に待っていたのはオックス・ファイア。

オックス・ファイアの口から炎が噴出された。

ベテルギウスはこれを自身の右手で防いだ。

「ロックマン！頼むぜ！！」

続いて左腕をブレイクソードにした青き流星……ロックマンがベテルギウスを捉えた。

空中では成す術もないベテルギウスはこれを喰らった。

だが致命傷ではない。

スタツ！ と華麗にベテルギウスは着地すると目の前に立つ三人の電波体を見据える。

「俺はあんまり戦闘に特化してないんだけどな……この数はちとキツイな」

言葉とは裏腹に彼の顔は余裕であった。

これこそ宇宙を統括するグループの一員の余裕。

今、彼等は激突する。

十八話 置いてけぼり

困役を買って出たルナの元にベテルギウスはやって来た。

そして待ち伏せしたロックマン、オックス・ファイア、アシッド・エースの三人は彼と対峙していた。

彼が呟く言葉はどれも弱気なものばかりだ。

しかしそれとは反比例し、顔は自信で満ち溢れていた。

「結構簡単に引っ掛かってくれたね。ありがとう」

「どういたしまして」

ロックマンの挑発に対しても未だ自信は揺るがない。

何か策でもあるのだろうか？ と三人が気を引き締める。

そしてベテルギウスはまず最初に自身の背中を見せつけ、

「さようなら！」

逃げ出した。

そういえば先程から『俺は戦闘に特化していない』と言っていた。

三人はこれは相手を引っ掛ける技なのかと思っていたが、どうやら本当に戦闘力は弱小であるらしい。

と色々考えている間にも、ベテルギウスの背中中は小さくなっていく。

『シドウ！何をポーっとしているんですか！』

「お、オックス・ファイアは白金ルナの保護、ロックマンは俺と一緒に奴を追うぞ！」

呆けていたシドウはアシッドにたたき起こされ、仲間に適確な指示

を送る。

ロックマンは言い終わると同時に飛び上がり、オックス・ファイアは少し遅れてルナの元へと急ぐ。

「キヤー！ 赤牛！」

「……、委員長……」

ルナの言葉にオックス・ファイアは少し傷付きながらも、先程まで二人が立っていた場所を見る。

『ブロッツ、また置いてけぼり、か』

「いいんだ。俺は委員長を守れば……」

オックス・ファイアは空に向かって炎を一噴きした。

屋根から屋根へと影が飛び移る。

暫くしてそれを追う様に二人が跳ぶ。

そしてようやく一つの屋根で一人と二人は向かい合う。

満月の夜、彼らの姿は映し出される。

ベテルギウスとロックマン、アシッド・エース。

「……あと一人はどうしたんだ？」

「彼女の守りについてるよ」

『敵がテメエ一人とは限らねえからな』

ここで初めてベテルギウスは苦虫を噛み潰したような苦い顔をする。オックス・ファイア一人減ったから何なんだろうか？ と二人は首を傾げる。

しかし相手にとって嫌であることは分かった。

内容は分からなくとも、相手が嫌ならそれをやればいい。

ロックマンはベテルギウスに飛び掛る。

「ミソラちゃんの記憶……返してもらおうよ！」

「悪いが……渡せないな」

「まっ、分かってたけどね」

ベテルギウスからの答えの内容は分かっていた。

しかし一応聞いた。

これは最終通告だ。

「じゃあ行くよ！」

「……、」

迫るロックマンにベテルギウスは身構える。

だが、

ロックマンはベテルギウスの元に辿り着く前に、動きを止めた。

驚きと呆気にとられたベテルギウスは思わず構えを中断させてしま
う。

そして彼の体には赤いマーク。

これは ロックオンマークだ。

次の瞬間にはベテルギウスは殆ど反射で、後ろに跳んだ。

先程まで彼が立っていた場所にソードが空気を裂いた。

見れば、いつの間にかアシッド・エースが攻撃を繰り返していた。

ロックマンはフェイク、本命はアシッド・エース。

中々良い戦法だ、とベテルギウスは賞賛しつつ、次の攻撃に構える。アシッド・エースは勢いを殺さず、そのままアシッドブラスターから炎の弾を撃ち出す。

ベテルギウスはこれを両手で受け止め、そして消滅させた。

シュウシュウと煙を立てる両手をベテルギウスは凝視しながら、

「……大したコンビネーションだ。並みの電波体ならもう死んでるぞ」

「これで死なないお前は……化け物だな」

「いやいや、俺はあの中でも一番弱い。俺の本来の役割は頭を使う

“参謀者”だしな」

とベテルギウスは両手をパタツさせる。

戦いをしていることを忘れてしまいたい程、のんびりしている。

しかしロックマンは極力、彼に暇も与えない。

何せ『響ミソラの記憶』が懸かっているのだ、できれば早期決着が望ましい。

「バトルカード・ブレイクサーベル！」

左腕をブレイクサーベルに変え、ベテルギウスに襲い掛かる。

まずそれは縦に振られる。

「おおっとー！」

からがらベテルギウスはこれを交わす。
顔から余裕は消えない。

この攻撃は想定内だと言わんばかりだ。

「目標ヤネクが出来ると人間っていうのは強くなる。だがその分攻撃も単調になってくる……。お前の攻撃が俺に当たることなんてないと思っぞ」

「ッ！」

ロックマンは更にブレイクサーベルを振るう。

時には縦に横に一閃し、時には後ろを取る。

しかし当たらない。

「ハアハア……！」

ロックマンは息を切らしながら後ろに下がり、ブレイクサーベルを解除する。

今度は両手にバトルカード・ソードファイターを展開する。

「待て」

「アシッド・エース……」

そんな滅茶苦茶なロックマンを、アシッド・エースは止める。
このままでは負ける、いや自滅する。

そんな事はアシッド・エースからの眼でも明らかだった。

それほどまでにロックマンは必死になっていた。

しかしその必死さは裏目に出ることとなったのだ。

「今度は俺だ！」

アシッド・エースの背中に備わるウィングバーニアから高濃度の電波エネルギーが放出され、一気にベテルギウスとの間合いを詰める。しかもその高濃度の電波エネルギーは鋭い刃と化し、ベテルギウスに迫る。

相変わらずベテルギウスは自分から攻撃をしようともせず、その攻撃を凌ぐ。

「プロジェクト T.C……成功者、か」

「ッ!? 何故、それを知っているんだ!？」

「まあ、遠くて近いしな……」

ベテルギウスは適当にはぐらかし、上空に張り巡らされているウェーブロードの上に乗る。

そして二人を見下ろす。

「知ってるか? “参謀者”たる者、戦争での作戦を企てる重要な役割を持っている。その役割にはもしもの場合の時の為、代替要員が存在するが……やっぱり本命が死なないのならそれが一番良いんだ。……言ってる意味分かるか?」

『まっつつつたく!!』

「……要はだなあー」

ウォーロックの低細胞に呆れつつ、ベテルギウスは口は開く。

「戦闘力が弱くとも、やっぱり死なない術ぐらいはあるんだよ」

月明かりに照らされるコダマタウンが揺ら揺らと人影で囲まれた。それは両手で数えられるようなものではない。

だからといって眼で追えばすぐ数えられるようなものでもない。

「ざつと数千人だ」

その影はやがて色が付き、人の姿と化す。

ベテルギウスだ。

その一人一人が全て、ベテルギウスなのだ。

「戦争なんて裏切りが日常茶飯事だ。自分の身代わりぐらいは置かないと、安心して布団を敷いて枕に頭を乗せてゆっくりと寝ることもできないんだよ」

眠る必要なんてないけどなー、とベテルギウスは高らかに笑う。

そして二人がずっと戦ってきたベテルギウスは体がぶれ、やがて消えた。

《これが『パペットダミー』》

姿が見えずとも、声だけが二人の鼓膜に直接響く。

その声は明らかに二人をあざけ笑っていた。

《似てるだろ？ あまりにも似すぎてもう誰が本物なのか、俺自身分かんなくなってくる。俺って本物なのかな？》

クスクスクス、と間に微笑し、

《戦争では“参謀者”は部下との連携が大切だ。よって思考を共用し、自分の意のままに動かすことのできる『パペットダミー』は重宝する。戦争時にはこれで部下とワンツーマンだ》

ロックマンとアシッド・エースはその声を聞きながら、冷や汗をか

いていた。

たった二人で、

この数を相手にしなくてはいけないのか。

その事実が冷や汗の原因。

一人一人が弱くとも、束にかかればそれは脅威となる。

《格が違つんだよ、格が》

今まで防戦一方であつたベテルギウスの反撃が、今、始まる。

十九話 更なる術

『パペットダミー』を発動したベテルギウスは、やはり余裕の表情を浮かべていた。

相手がどんなに手練であつても、『パペットダミー』の数は数千人。まず二人でそれらを全て倒すのは不可能だ。

「それに加えて、俺の目的は別に『ロックマンを殺す』わけじゃない……」

彼の目的は自分達の組織に歯向かうことをしないように『ロックマンを無力化』させることだ。

彼らの組織が『ロックマンを殺す』目的を作ったのは、ロックマンが組織の本当の目的の妨げにならないためだ。

『冬の大三角形』の一人であり、その組織でも三本の指に入る強さを誇るプロキオン。

彼女は頭が悪いので（ベテルギウス視点）速攻でロックマンを殺すことしか考えなかった。

しかし方法などいくらでもあるのだ。

とりあえずロックマンが組織に歯向かわなければ良いのだ。

「じゃ、そろそろ始めるか」

ベテルギウスは『パペットダミー』に加え、更に術を発動させる。

これは『ロックマン無力化』の仕上げだ。

ベテルギウスは眼を閉じ、両手に力を込める。

両手は紺碧色こんぺきに染まり、手を翳す先には丸い球体のエネルギーが集結する。

そして丸い球体は風船のように膨らみ続け、破裂する。破裂したことで、球体の強大なエネルギーが衝撃波となってコダマタウン上空を均等に広がる。

刹那、紺碧色の巨大な壁が四枚、コダマタウンを囲むように地面から出現する。

コダマタウン住人は突如現れた四枚の巨大な壁に困惑し、後に騒ぎ出す。

人々は夜であることを忘れ、騒ぎ立てる。

これはベテルギウスにとってあまり良い状況ではない。

「さつさと蓋^{ふた}、するか」

ベテルギウスはその両手を真上に上げた。

シューンツ！ とF1カーが通り過ぎたような音がコダマタウンの騒ぎを更にも上書きする。

視点を上空に移せば、紺碧色の線が空を走っていた。

しかもそれは一本では留まらない。

無数のその線はパズルのように組み合わせあっていき、一つの巨大な壁と化す。

それは先程、地面から生えた四枚の壁と同じもの。

そして

「遮断！！」

その作り出された一枚の壁は四枚の壁に被さるように落下し、コダマタウンに蓋をした。

壁に包まれたコダマタウンは、まるで箱庭のようだ。

「さて……、仲間を守り、それを力の糧として戦うお前が……。その『守るべき仲間』から忘れ去られた時、一体何が起ころんだらうな？」

完全に遮断されたコダマタウンを見ながら、彼は呟いた。

ロックマンとアシッド・エースは目の前の様子を啞然として眺めていた。

先程から様々な出来事が起こりすぎである。

突如現れたベテルギウスの分身、数千体。

そして本物のベテルギウスが消えたかと思えば、コダマタウンを囲むようにして出現した四枚の壁。

しかも上からは一枚の壁が落ちてきた。

どうもご親切に『蓋』付きのようである。

「……何が、起こったんだ？」

ロックマンは思わずぼやいてしまう。

あまりにも突発的なことに二人は啞然とし、身動き一つ取れずにいた。

そこから数秒後、ようやく二人はコダマタウンが完全に包囲されたということにふと気が付く。

「……アシッド・エース。これからどうします?」
「うん……。ベテルギウスの消息を掴まないといけないが、それより前にこれをどうにかしないとイケないな」

アシッド・エースは人差し指で周りを指し示す。

その指差す方向には『パペットダミー』のベテルギウス。
しかも指差す方角以外にも、うじゃうじゃと存在している。
簡単に言ってしまうえば二人は囲まれているのだ。

《『パペットダミー』。凄い術だろ?》

驚く二人にして四人の鼓膜に直接響く声。
ベテルギウスだ。

《二人とも、楽しんでるか?》

「この状況を楽しめると思ってるのか?」

今、二人はベテルギウスの分身である『パペットダミー』に囲まれている。

この状況を楽しめる程、能天気な二人ではない。

《フツ、その通りだな。だがそんな困っている二匹の羊さんに、『パペットダミー』について耳寄りな情報をワンクリックでお教えしますよ》

ワンクリック? と首を横に傾ける二人に有無を言わず彼は続ける。

《『パペットダミー』は君には襲い掛からない》

一見ホツとする場面ではあるが、ロックマンは釈然としなかった。理由は簡単だ。

『君には』という言い方に疑問を覚えたのだ。この言い草ではまるで

《でも他の動かない人達には襲い掛かるかもね》

一番予期していて、最悪な答えが返ってきた。

ロックマンとアシッド・エースは動こうとしたが、それよりも前に『パペットダミー』が動き出した。

数千人が一斉にバラバラの方向へと逃げ出したのだ。

《まあ大丈夫。襲い掛かるって言っても危害は与えない。ちよつと記憶を貰うだけだ》

「全然大丈夫じゃないぞ」

アシッド・エースはまず一体のベテルギウスをロックオンしながら、ベテルギウスの言葉を返した。

『シドウ！この数を二人ではキツイです！応援を寄越しましょう！』

「ああ！分かってるんだ！分かってるんだが……通信が繋がらないんだ！」

こんな受け答えにベテルギウスは欠伸をしてから、

《当然だろ。コダマタウンは『完全遮断壁』によって完全に遮断された空間と化してるんだ。コダマタウンは完全に孤立してんだよ》

ワツハツハツハ、と盛大に大笑いした後、我に返って言葉を続けた。

《そうだな……。俺の目的、教えといてやるよ。俺の目的はロックマンの周りの人物全ての記憶を奪い、ロックマンを孤立させ、弱体化させることだ。……目的教えるとか俺、優しいな》

そこでベテルギウスの言葉は切れた。

アシッド・エースは顔を上げる。

目の前には何体ものの『パペットダミー』。

ロックマンと二手に分かれ、今、アシッド・エースは一人だ。

そして彼は退院したばかり、電波変換も間にならない。

それでも

「やるしか、ないな」

アシッド・エースは『パペットダミー』を容赦なく斬り裂いた。

「クソッ……多すぎるだろ、これ」

ロックマンは一気に三体の『パペットダミー』を引き裂きながら、
呟く。

もう何体倒したかも覚えていない。
もう何人の記憶が犠牲になっているのかも分からない。
そして自分達はたったの二人。

これは追い詰められていると言わざる負えない状況である。

「さて何分ぐらいこつやつて戦い続けているんだろっかね？」

『コダマタウンの時間は止められているからな。唯一の手掛かりは自分の腹時計ぐらいだな』

「それはいえてる、ね！！」

ロックマンは自身の左腕に展開されているバトルカード・ソードで更に『パペットダミー』を斬り裂く。

《……結構頑張ってるのな。さすが英雄》

「僕はそんな大それた人じゃないよ。ただ僕は皆を守りたいだけなんだ」

《お前の謙虚なことか最高だね。……あいつにも見習って欲しいな》

ベテルギウスは心からその言葉を吐き、

《だけど……忘れてないか？》

次は真剣な声でロックマンに呼びかける。

『忘れてる？何の話だ？』

《俺の目的だよ》

「ベテルギウスの、目的……？」

確か『ロックマンの周りの人物の記憶を奪い、ロックマンを孤立さ

せ、弱体化させること』だった筈だ。
それが一体どうしたというのだろうか？

『パペットダミー』の数は数千体にも及ぶ。だがな、コダマタウン住民全ての記憶を奪おうとなると

それはそれは手間もかかるし、なにより“夢幻瓶”の容量が足りなくなってしまう。……となると数も限定しなくちゃいけないだ』

サー、とロックマンは血の気が引く音が聞こえた気がした。

周りの人物の記憶を奪うことでロックマンの無力化がすすめられていく。

しかし記憶を奪う数を限定しなくては、手間もかかるし何よりも“夢幻瓶”の容量が足りなくなってくる。

そうなると少人数で、尚且つロックマンの無力化に有力な人物の記憶を奪うのが良い。

そしてその有力な人物とは

「ッ！」

ロックマンは頭で考えを張り巡らせ、そしてその結果に気づいたときにはもう走り出していた。

『気づいたかな？』

やめろ。

『パペットダミー』は無差別に人の記憶を奪いには行っていない』

言うな。

《お前と親しい人物から記憶を奪っているんだよ》

最悪だ、スバルは思った。

やりにくい、ともスバルは思った。

ベテルギウスの『パペットダミー』は『星河スバル』と親しき人物の記憶を奪うつもりだ。

いくつも思い当たる。

星河大吾、星河あかね、白金ルナ、牛島ゴン太、最小院キザマロ、そして今戦っているシドウだって例外ではない。

そして何より ランドマーク。

彼女も記憶を狙われる。

「ランドマークちゃんは記憶がない。でも今、作り出している。僕と出会ってからたくさんさんの思い出を作った。そんな数少ない思い出を……奪われてたまるかあ!!」

ロックマンは怒りの咆哮を上げながら、ウェーブロードを滑る。

向かう先は唯一つ。

響ミソラとランドマークがいる、スバルの家だ。

二十話 勝利の活路

一体何なんだ！？ とランドマークは顔を強張らせる。

スバル達が白金ルナを囷に使う作戦を実行している間、ランドマークとミソラはスバルの家で待機していた。

記憶がないという同じ境遇に立っている二人であったが特別話が弾むわけでもなく、ただ黙ってリビングのダイニングテーブルに座っていた。

面白いわけではないが、ただ平和をかみ締めていた。

しかしそんな平和な時間も、突然崩れ落ちた。

三人の同じ顔に同じ姿をしている何かが、玄関の扉をすり抜け、現れたのだ。

もちろんこの場にいるランドマークもミソラ共に（記憶がないので当然だが）見覚えがない顔だ。
だがその三体からは嫌な^{オーラ}雰囲気を感じる。

「お、お前達！ い、一体何者だ！？」

震える声を押し殺しながら（押し殺せていない）、ランドマークは問う。

しかしその三人は答える雰囲気もない。
ただ彼等が起こした行動は、サツ、とそれぞれが小瓶を取り出したのだ。

この小瓶も二人には全く見覚えがなかった。
しかし嫌な予感^{オーラ}は頭の中に掠めた。

『二人とも！　ここから逃げるのよ！！』
「どうやって、に、逃げるんですか？」

玄関はその三人によって阻まれている。
よって逃げるといっても二階へ行くしかない。

「みそら！こつちだ！！」
「うん……」

ランドマークは片手で派手なゴスロリのスカートを持ち上げ、もう片方でミソラの手を掴みながら階段へと連れて行く。
後ろは振り向かなかった。

三人が追ってくると思うと怖くなったからだ。

しかしそんな足音は聞こえない。

おそらく余裕の表情で歩いて追ってきているのだろう。
それは彼女達にとっては好都合であるが、この先が行き止まりであることも事実。

だが非力な彼女達ができることはこれぐらいだ。
ならばそれを真つ当するのみ。

「　ッ、すばるの部屋だ！　とりあえず行こう！」

ランドマークは慣れ親しんできたスバルの部屋へと入り、思いっきり扉を閉める。

玄関をすり抜けるところを見ると無意味なようだが、開けっ放しというのも不安だ。

「……………どうでしょうか？」

「……………どうしようもないな」

非力でか弱き少女二人では、あの三人を相手にすることなど出来な
いだろう。

それは記憶がない彼女達でも容易に判断できることだ。

『……………ミソラ、電波変換よ』

「でんぱ、へんかん？」

ハーブは苦肉の策と言つかのように苦しそつに言う。
もちろん記憶がないミソラにとって、それが何であるかも分からな
い。

『私と合体して、あいつらを倒すのよ』

「た、倒す？ 無理だよお……………」

記憶がなくなる前の元気だったミソラの面影はない。
そこにいるのはか弱き少女だ。

『…………私だって、記憶がないミソラに重荷になるような事はして欲
しくないわ。でも、今はそれしかないのよ!!』

「で、でも……………」

やはりミソラは踏ん切りがつかないようだ。
当然だ。

突然戦えと言われても誰だって困惑するし、怖くもなる。
しかしそんなことをしている間にも、敵は彼女達に迫り来る。

「ッ！ 奴らが来たぞ……………」

見れば、扉をすり抜け三人は部屋に侵入してきた。
そして二人は恐怖で身動きも取れず、ただそこで立ち尽くす。

やはり三人は容赦なくその歩みを止めることなく、同じテンポで続ける。

そしてあっという間に彼女達の目の前までやって来た。
彼女は恐怖で声も出せず、ただただその三人を見ていた。
そしてそこで

「させるかあああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああ!!」

その場に居ない筈の彼の声が轟いた。

声がる方向は、天井。

その場に居る五人は思わず上を見上げようとするが、その動作が終わる直前でまず一人が縦に一闪、斬り裂かれた。

「手は出させないよ……」

仲間が突然やられた事実困惑しながらも一人が、彼に後ろ横蹴りを繰り返すが、彼はそれを身を屈めることで交わり、そして体を真つ二つに斬り裂いた。

「彼女達は、僕の友達だ！」

最後の一人が右拳を彼に放つが、彼はそれを交わしつつ肩を切断し、そして容赦なく体を斜めに斬り裂く。

その場に居た三人は瞬く間に消えていってしまった。

彼は青い姿をしていた。

彼女達二人は彼を知らなかった。

しかし彼女達は彼に既視感を覚えていた。

ランドマークはまさかと言わんばかりに眼を見開き、人差し指で彼を指差しつつ聞いた。

「ま、まさかお前……すばるか？」
「うえ？ ああ……、まあ一応ね」

彼はロツクマン。

その姿を初めてランドマークに晒した。
しかしランドマークは見事にその正体を星河スバルであると見抜いてしまった。
侮れない少女だ。

「話は後。とりあえず早くここから出よう」
「おお！何かすばるが頼もしく思えるぞ！！」

これが本当の僕さ、とスバルは冗談交じりに答え、そして女の子二人を先導して家から出て行った。

「ハア、ハア……」

アシッド・エースは限界を迎えていた。
相手は強いわけでもない。

むしろ弱いぐらい、そこらのウイルスよりもそこそこできる程度の

もの。

だがその様々な術を扱えるのは恐ろしいものだ。その一つ、『パペットダミー』は特別恐ろしい。

「斬っても……ハア、斬っても減らないな……」

『この数は聊か反則ですね。……やはり本物を叩かないとこの状況は抜け出せません』

分かってるよ、とアシッド・エースは悔しそうに下唇を噛む。

そんな彼は何か虹色に輝く何かを横目に捉えた。

バツ、とアシッド・エースは首を横に傾ける。

それはフワフワと漂い、やがて色を薄め消え去った。

「アシッド……」

アシッド・エースは先程まで漂っていた何かを思い浮かべながら、ニヤリと笑みを浮かべる。

それをアシッドは不審そうに見ている。

「どつやら活路が開けたようだぞ」

『活路、ですか？』

アシッド・エースは後ろに跳んで、屋根の上に着地する。

そして遠くのほうでワラワラと動く『パペットダミー』に目をやりながら、

「アシッド、サテラサーチングだ」

『おそらく』パペットダミー』は本物と反応は変わらないでしょう。ならば無意味ではないですか？』

実際にそれは試してはいないが分かる。
彼は“参謀者”。そんな温い失態は犯さないであろう。
しかしアシッド・エースの狙いは別にあった。

「サテラサーチングの目標は『パペットダミー』じゃない。さつき漂ってた奴だ」

『先程のをですか？』

ああ、とアシッド・エースは頷き、アシッドの次の言葉を先読みし、さつきと口にしてしまう。

「あれはおそらく、『記憶』だ」

『記憶、ですか……』

「俺の予想が正しければ……いけるぞ！」

暁シドゥは普段は少々抜けているところもあるが、頭は切れる男だ。それはアシッドが良く知っている。
アシッドは一度溜め息をついてから、

『コダマタウン丸々一つサーチするのはエネルギーが足りません。シドゥも一緒にやってください』

「任せてくれ」

『おそらく今の『アシッド・エース』ではサテラサーチングも出来て、一度だけでしょ』

アシッド・エースは戦闘態勢を崩し、丸腰で立つ。

こちらに向かつて来る『パペットダミー』には気づいていたが、それでもその丸腰状態は崩さなかった。

「……ベテルギウスがこの町にいることを大前提として仮説を組み

立っているからな。一度だけっていうのも不安だが……やるしかない」

『では、いきますよ!』

サテラサーチング! という二人の声がコダマタウンに轟き、それと同時に輪の光線が放出された。

もう目の前までやって来た『パペットダミー』も気にせず、ただそれをやり続ける。

戦局は、常に同じことをこなしているだけでは傾かない。

いつか戦法を変えなくてはいけない、変えなければならぬ。

そして彼はその後を一人の少年に託すことにする。

二十一話 方針の変更

今、ロックマン、ランドマーク、ミソラの三人は道路の上で立ち尽くしていた。

「さてどうしたものか……」

ロックマンは頭を悩ませていた。

後ろを振り向けばボーッと突っ立っているランドマークとミソラ。自分は早くベテルギウスを倒しに行きたいが、二人も一緒に……というわけにはいかない。

何処かに身を潜めさせるのも一つの手だが、何せ相手の数は数千人。先程、二人の居場所はすぐにバレてしまった、ただ身を隠させるのは不安要素が多い。

「僕が一緒につて訳にも行かないしなあ……」

「私達の心配はしなくてもいいぞ！」

ランドマークはさっきから元気良くそう言っているが、根拠なしの言葉なので信用できない。

考えては否定し、クルクルと思考が空回りしていた。

『ハーブ。お前が戦って守ればいいじゃねえか』

『私は戦いが苦手なのよ。二人も守れる自信なんてないわよ』

ウォーロックは黙り込み。

ロックマンは溜め息をつきつつ、

「アシッド・エースに、頼むしかないのかな？」

『あいつらにベテルギウスを任せるのか!?!』

うん、とロックマンは頷き、

「この際、仕方ないと思うんだよ」

「残念だが、それは無理だ」

突然声が、その場にいる三人の耳に響いてきた。

声のする方を見れば、そこにはオックス・ファイア、白金ルナ、そして今も戦っている筈の暁シドウがいた。

加えてシドウは、白金ルナ共々オックス・ファイアに背負われた状態だった。

「暁さん!?! 何でここに?」

「ワルい。戦線離脱だ」

シドウはそのまま地面に腰を下ろした。

スバルは怪訝な顔をしながらシドウを見ていると、オックス・ファイアが口を開いた。

「暁さんが無茶したんだよ」

「そんな時、オックス・ファイアに助けってもらったってわけよ」

あぶねーあぶねー、シドウはと大笑いしている。

本来なら笑って済む話ではないのだが、それを笑って終えることのできるシドウ。

流石エース、とスバルは賞賛しつつその無茶振りに腹を立てていた。何か言っただろうと口を開きかけた時、

「ロックマン様?」

白金ルナが目にはハートをキラキラ輝かせながら、ロックマンに襲い掛かる。

ロックマンは冷静にそれを交わすことに成功し、即座に彼女との距離を置く。

そしてロックマンは彼女の悔しそうな顔を華麗にスルーしながら、シドウを見る。

『星河スバル。私達は無事にベテルギウスの居場所を特定することに成功しました』

「!?!」

『ほ、本当かよ!?!』

ええ、とアシッドは二人を落ち着かせ、

『貴方に……ベテルギウスを任せます』

紺碧色に輝く光の玉がベテルギウスの右手に集結していた。それらは『記憶』だ。

既に星河スバルを知るコダマタウン住人の記憶はほぼ奪い取った。だがこれでは足りない。

まだまだ集めないと星河スバルは絶望しない。

「……………絶望、ねえ」

その言葉はベテルギウスから発せられたものではない。

その声は彼の後方から発せられたもの。

彼は恐る恐る振り向けば、そこには青き流星ロックマンが堂々の姿で立っていた。

「……………居場所がバレていたのか」

「うん。少し前からね」

ロックマンはそこで言葉を切り、

「……………君は僕、『ロックマン』の調査不足じゃないのかなあ？」

「……………、どうということだ？」

「もし仮に僕の大切な人達の記憶を片っ端から奪ったとして、僕はどんな行動を取るだろう？」

「絶望、だな」

だから調査不足なんだよねえ、とロックマンは呟き、ベテルギウスに近づく。

一瞬でベテルギウスの眼前に移動したロックマンは最高の笑顔で、

「僕ならその記憶を取り戻すために何らかの行動を起こす。まあ、確かに少し前の僕なら絶望するだけだろうけどね……………」

「そうか。それは不覚だったな。まあぶっちゃけ調査はあいつに任せていたんだが、俺自身が向かうべきだったか」

「どっちにしる僕は君達に齒向かう。僕達の友達、僕達の街に手を出した時からそれは決まっていたことだ！」

ロックマンは力強く握り締めた右拳を、容赦なくベテルギウスの顔面に放つ。

バトルカードは使っていない。

これが僕の答えだ、と言わんばかりの自己主張。

「なら奪った記憶はただお前を更に焚き付ける引き金となっただけなのかな？ 最悪だな。 “参謀者” たる俺が前線に出向いたというのに、それは無駄骨だったわけだ」

ロックマンの攻撃により後方に飛ばされているベテルギウスはその勢いを一切殺さずに、ぼそぼそと静かに呟いている。

それをしばらく続け、ビルに突き刺さる咄嗟にその勢いを落とし、空中で停滞する。

ふざけんなよ、とベテルギウスは言う。

「ロックマンの無力化は失敗かもしれない。しかし勢力は低くすることはできる。決して無駄骨ではないわけだ。現に『ハーブ・ノート』は戦闘では役に立たない存在となっただけだから」

「確かに、それは成功だよ。でもそれはこれから失敗になる。僕が失敗させる」

ロックマンは両手にブレイクサーベルを展開する。

対するベテルギウスは集結させた記憶を庇うように立つ。

「しかし俺の居場所を特定したのは流石、と賞賛するほかないな」

「正確には僕が発見したわけじゃないんだよね。アシッド・エース、僕の尊敬すべきエースだよ」

言葉が終わると同時にロックマンはベテルギウス目掛けて跳んだ。

両手のブレイクサーベルを振り上げ、思いっきりベテルギウスに振り下ろす。
対してのベテルギウスは『パペットダミー』を変り身にし、自身は後ろに跳んだ。
そして彼は無事にビルの屋上に足を突き、

「今まで俺は結構、優しくしてやってたんだぞ」

『ミソラの記憶を奪つといてそれはねえんじゃねえのか』

ベテルギウスはウォーロックの言葉に微笑し、

「いや優しくかったね。何せロックマン自体には何もしなかつたんだからな」

「……………」

不思議に思わなかったか？ とベテルギウスは一度言葉を切つてから、

「実際に俺が手を出したのはロックマンに間接的に関係のある人物だけで、ロックマンには何もしていない。目的が『ロックマンの始末』であるにもかかわらずだ」

『間接的でも俺達に迷惑掛けてんじゃねえか』

「そうだが、やっぱりお前自身には危害は加えていない。それは俺の良心からと言わざるを得ない。やはり天然物のお前を我等の仲間として迎え入りたいという気持ちもあつたのかもしれない」

ロックマンはベテルギウスの言葉を聞きながら、笑みを浮かべる。
ベテルギウスも同じく笑みを浮かべていた。

「ああ、お前の答えは分かっているさ。仲間思いのお前が俺達の仲

間になるとは思えないし、もう俺も諦めた」

ベテルギウスは『パペットダミー』に指示を送りロックマンに襲いかからせる。

ベテルギウス自身は飛び掛ろうともせずその様子を遠目で見る。

そして彼は悔しそうに顔を歪めながらも、自身の作戦の方針を変更することにする。

「……、プロキオンと同じ戦法っていうのが気に食わないが、致し方あるまい。良いだろう。俺は全力でお前を倒す！！」

ベテルギウスの咆哮は暗闇に支配されるコダマタウンに轟いた。

二十二話 ブラックエース

暁シドウ、オックス・ファイア、白金ルナ、響ミソラ、ランドマークの五人は地面に座り込んでいた。

ベテルギウスの『パペットダミー』がコダマタウンに放たれている今、ここまで余裕の行動ができるのはロックマンがベテルギウスと戦闘を行い、全ての『パペットダミー』がその戦闘に向かっているからであろう。

そんな中、

「恐らく最小院はもう記憶を奪われているだろう」

信じられない言葉を口にしたのはシドウ。

それはキザマロの事を諦めると言っているようなものだ。勿論ルナやオックス・ファイア（ゴン太）にとって信じられないことであり、キザマロと会って間もないミソラ（記憶喪失のため）やランドマークにとっても容易には信じられることではない。それを理解しているシドウはルナ達を遮るように口を開く。

「大丈夫だ。ロックマンがベテルギウスを倒してくれる。そうすれば記憶も元に戻る」

その言葉にルナ達は口を閉ざす。

これはもう彼に賭けるしかないのだ。

「しかし気配は完全に消してたはずなんだけど、よく俺を特定できたよな。ほんとに」

ベテルギウスは数多くの『パペットダミー』をロックマンに向かわせながら呟いた。

ベテルギウスの主な戦法は『パペットダミー』による数の押しだ。対するロックマンはこの数を身一つでこれを超えなければならぬ。

ロックマンはその難解な局面を何とか耐えつつ、ベテルギウスの問いに答える。

「特定対象はベテルギウス、君じゃない。君が奪い、君が集めた『記憶』だ」

「……………、『記憶』か。その考えはなかったな」

ロックマンは、ベテルギウスの下に向かう前にシドウが言った言葉を思い出していた。

『白金の記憶を奪いに来た時のベテルギウスは確かに本物だった。『パペットダミー』という技がありながら、奴はそれを使わずにコダマタウンに乗り込んできた』

この言葉にスバルは反論できなかった。

そうわざわざベテルギウスがコダマタウンに乗り込むことはない、『パペットダミー』を使って記憶を集めればいい話だ。

しかし彼はそれをしなかった。否、できなかった。

『考えることは二つ。『パペットダミー』は遠距離で発動できないか、奴がよほどの自信家であること……』

相変わらずスバルは黙って耳をすます、

『奴は『パペットダミー』を戦争時に他の奴とのワンツーマンの指示に扱っていた。広範囲で行われる戦争となると前者の予想は否定していい。……となると余程の自信家、という予想は強ち間違いではないのかもしれないと読んだわけだ』

シドウは存分に間を空け、やがて口を開いた。

『そんな自信家だったら自分の手で「記憶」を持ち帰りたいという願望が出てくると俺は思っんだ』

彼は『パペットダミー』を使ってコダマタウンに乗り込ませるべきだった。

本物は後ろでそれを眺めておけば良かったのだ。

しかし彼はそれをしなかった。

それは完全な自信家だからこそその失態。

ロククマンはそれらを思い出しながら目の前の敵、ベテルギウスに視線を集める。

「君のような強者に限って自信家が多い。でも僕のような弱者はその強者との間を埋めるべく四苦八苦する」

「フツ、世界を三回も救っておいて弱者、ね」

『謙虚って言っても良いぞ』

ベテルギウスは大きく笑う。

その笑いに反比例するかのようになり、『パペットダミー』は無表情で口ツクマンに襲いかかる。

ロククマンもまた微笑を浮かべ、『パペットダミー』を薙ぎ払う。

「俺は少しお前を舐めていたようだ。その余裕がこんな無様な失態を招いたと思うと歯痒いな」

「記憶を返す気になった？」

「フツ、俺は失態を後悔しているだけで、勝負を捨てるつもりは毛頭ない」

ベテルギウスは掌から銀色に輝く縄を作り出した。

彼はそれを馴染ませるように何回かそれを振るうと、

「宝具“バーストリレットレス融通の捕縄”。お前の相手、やってやるうじゃないか」

“バーストリレットレス融通の捕縄”はベテルギウスの周りを螺旋状に蠢く。

銀色に輝くそれらはベテルギウスの身を守る盾とも見て取れるが、こちらの出方を見て攻撃のタイミングを見計らっているようにも見える。

「正々堂々と戦うって言うなら、『パペットダミー』も引っ込めてくれると嬉しいな」

「俺自身の戦闘能力は低いんだ。これぐらいのハンデは許容範囲だろ？」

ロククマンはその言葉に苦笑しながら、ウェーブロードから跳んだ。それを止めるかのように襲い掛かる『パペットダミー』も薙ぎ払い、小細工なしにベテルギウスに突っ込む。

それをベテルギウスは嘲笑うかのように見ながら、

「融通の捕縄」^{バーストリレットレス}を甘く見すぎなんだよな」

“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}はロックマンに巻き付き、素早い動きは一瞬にして止められる。

そしてそのまま彼は投げ捨てられ、道路に身を引き摺った。

痛みに堪えながらベテルギウスに視線を集中するが、そこには既にベテルギウスは居ない。

彼は殆ど反射で上を見れば、“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}を構えるベテルギウスの姿。

彼は距離を取ろうと立ち上がるが、時既に遅し。

彼の周りを“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}が地を這うように囲む。

逃げ場所は……ない。

しかし攻撃する隙間は存在する。

「バトルカード・インパクトキャノン!!」

ロックマンは“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}の隙間を縫うようにインパクトキャノンをベテルギウス目掛けて発射する。

ベテルギウスはそれをからがら交わすことに成功し、そして“融通”^{バーストリレットレス}の捕縄”に指示を送り出す。

それに反応して、“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}はピクンツ、と動くと一緒にその輪を縮めロックマン目掛けて襲い掛かる。

「バトルカード・オーラ!!」

ロックマンの周りに張られたオーラでそれをやり過ぎそうと考えるが、そこまで甘くもない。

“融通の捕縄”^{バーストリレットレス}の攻撃を喰らい続けるオーラは簡単に碎け、ロックマンに攻撃する。

ロックマンは地面に転がる。

そして“融通の捕縄”^{バーストリフレックス}は途中で何本にも枝分かれして、ロックマンに襲いかかる。

ロックマンは転がりの勢いを殺さずバク転を繰り返し、その攻撃を交わし続ける。

そして建物の壁に差し掛かると、ロックマンは壁を蹴り、飛び上がる。

屯った『パペットダミー』がロックマンに襲いかかるが、ロックマンは一体の『パペットダミー』を踏み台にし更に飛び上がることでそれを回避する。

その高さはもはやウェーブロードさえも超越している。

『完全遮断壁』で閉ざされた空に差し掛かったところで、ロックマンは下を見る。

「『パペットダミー』ってというのは数が多いもんだよね」

『ああ、それは驚異ではあるが、利用することもできる』

大人数を相手にすることは体力的にも精神的にもとてもキツイことだ。

何せ体の動きも早くしなければ大人数の相手の攻撃を交わし続けることはできないし、頭を使って反撃の策を考えなければならぬ。

大人数相手は早期決着が好ましいが、その早期決着が困難である。

しかし大人数相手の戦いが絶対に不利ということはない。

有利な面も出てくる。

例えば、

ノイズ。

敵の数が多ければ多いほどノイズ率は飛躍的に上昇する。

それはノイズを扱う戦法を持っているロックマンにとっては好都合。

だから利用しないわけではない。

「ノイズ率二千……、これは凄いね……」

『ああ、だが俺達には有難いな』

うん、とロックマンは頷き右手を上挙げる。

その様子を遠目で見るベテルギウスはこれを心安と見送るはずはない。

『パペットダミー』に指示を送り、ロックマンを止めるべく高度を上昇させる。

だが遅い。

あっという間にロックマンを囲むように漆黒の球体が表れ、そしてそれは全ての方向に均等に放出された。

その衝撃波は“パペットダミー”を吹き飛ばし、“バーストリレトレス融通の捕縄”を揺らし、ベテルギウス自身をプレッシャーで押し潰した。

漆黒の球体から現れたのは、球体と同色である漆黒のボディを煌かせたロックマン　ブラックエース。

『やっぱりメテオGの残りカスだけじゃ、長くはファイナライズも続かねえぞ！』

「早期決着だね」

ブラックエースは一瞬で高度を下げると、ベテルギウスの眼前に移動した。

ベテルギウスの周りに蠢いていた“バーストリレトレス融通の捕縄”さえも通り抜けたのだ。

ベテルギウスはその動きに翻弄され、一瞬我が目を疑ったがすぐに我にかえる。

バーストリレトレス“融通の捕縄”に囲まれ絶対安心の空間が完成していたが、ブラックエースはそれを無視し、そこに入った。

ベテルギウスの唯一の防御手段である“融通の捕縄”バーストリレットレスを目の前のブラックエースに使えば、恐らく容易く交わされその攻撃は自分自身に激突する。

しかし眼前にはブラックエース。どちらをとつても死しかない。

「　　ッ！拡大せよ！！」

ベテルギウスは“融通の捕縄”バーストリレットレスの螺旋状を解除し、その輪を広げることがブラックエース相手にその行動は遅すぎた。

もうブラックエースは銃口をベテルギウスに向けていた。

それは容赦なく発射され、ベテルギウスの体は特大の漆黒の球体に包まれる。

体は動かない、指一本も。

『お前を倒せば、記憶は戻るよな』

「……………」

ベテルギウスは答えない。だが答えなくても関係はない。ロックマンには分かっていた。

人間と記憶は切っても切れない関係。

それを無理やり“夢幻瓶”を使って記憶を留めている。

“夢幻瓶”の持ち主であるベテルギウスが倒されれば、解放された記憶は何処に行くか？

答えは簡単。持ち主の下へ行く。

それをロックマンは理解していた。

理解といつてもほぼ『勘』であるが、ロックマンは絶対的な自信があった。

ならば容赦はしない。

全力で眼前の敵を倒す！

「ブラックエンド……」

その言葉はベテルギウスの残りの命のカウントダウン。
ベテルギウスは反抗はしなかった。

「ギャラクシー……」

ブラックエースの短剣は漆黒の球体ごとベテルギウスの体を引き裂き、後に猛烈な爆発を起こした。

真夜中に咲く爆発。

その虹色に輝く爆発の中ベテルギウスは終始、笑顔を崩しはしなかった。

そしてそのまま“参謀者”ベテルギウスは完全に消滅した。

それと共に『パペットダミー』はシュツ！と一斉に姿を消し、加えて“完全遮断壁”も消え去る。

そして空中に停滞していた“融通の捕縄”も姿を消した。

最後に特大に膨らんでいた記憶の塊はパチンツ！！と破裂し、コダマタウンに降り注ぐ。

ロックマンの予想は大正解だったようだ。

ロックマンはファイナライズを解除し、道路に足を付く。

そして疲れがドツと溢れ出し、静かに腰を下ろした。

耳には後方から聞こえる聞きなれた声。

今まで一緒に居たが、一緒に居なかった少女の声。

星河スバルが取り戻したかった者を取り戻した瞬間だった。

二十三話 深い悲しみ

もう少しで日付も変わる真夜中……

ベテルギウスを倒したことで、奪われた記憶を取り戻した響ミソラは、サテラポリス直属の国家病院へと連れて行かれた。

ヨイリー曰く、空っぽだった脳にいきなり沢山の記憶を押し込まれたため、負担がかかる恐れがあるためだとか。

スバルも同行しようとしたのだが、ヨイリーに『貴方は休みなさい』と言われたので実行には移さなかった。

そしてここは、展望台……

スバルとランドマークは夜空を見上げていた。

あかねと大吾が帰らないということで、無断の星空観測だ。

「なあ……スバル」

「何？」

手すりに寄り掛かるランドマークを横目で見ながら、スバルは答えた。

彼女の視線は星空に釘付けである。

「……星は私の心を癒してくれる……少ない記憶の中で私が覚えていたことなのだ」

「星が心を癒してくれる、か」

スバルは深い息を吐いた、溜め息ではない、全くの同感だったための苦笑いだ。

ランドマークは白いフリルを揺らしながらその溜め息に反応する。

「なんだ？ 悪いのか？」
「いや……別にそういうわけじゃないんだけど………」

ランドマークは明らかかな不機嫌そうな顔ですいつとスバルに近づくとスバルはアハハ……と口元を引き攣らせながらの笑み。そんな彼らの間を割り込むかのように出現したのは　ウォーロック。

「どうしたの？ ロック」

「……感じるぞ」

「何をだ？」

「強大な電波反応だ……！」

スバルは何だつて！？ と叫び返す前に真夜中の展望台は眩しい光に包まれる。影は消え去り、下手をしたら夏の昼間よりも明るい光が起こっている。

スバルとランドマークは瞼を強く閉じる。しかしその光は閉じられた瞼をも突き抜け、眼球を直接突き抜ける。激しい痛みが眼球に走り、二人は思わず両手を目元に押し当てた。

「おお、やって来たな。地球……うん」

聞き覚えのない、爽やかな声が鼓膜を震わした。瞼を開くことができない。

まるで瞬間接着剤を張り付けたように瞼は微動だにしなかった。

「……… 案外近い」

次に聞こえてきたのは小さな声であり、その中に美しさを持ってい

る……俗にいう美声。
やっぱり瞼は動かない。

「もうあつちには帰れない……上等上等」

今度は濁声だ。

今度は眼は開いた。

目の前には、電波体が横に並んで、三体立っていた。

中央には鎧をモチーフにしたボディの電波体。

左にはスリムなボディに、その周りに泡沫のような物が浮遊している電波体。

右には刺々しいボディに、大きなランスを二本背負っている電波体。

「ッ！」

スバルは咄嗟にランドマークを庇うように、三体の電波体に立ちはだかる。

その様子に中央の電波体は、両手を上にあげる。

「ほれっ、俺は何もしねえよ……まず落ち着け……うん」

どうやら無抵抗を示しているらしい。

だがその程度で引き下がるスバルではない。

ハンターを右手に持ち、いつでも電波変換ができるようにしておく。そんな彼に左側の電波体は口を全く動かさずに言う。

「……話がしたい」

「別に私等は戦いに来たわけじゃない。……無害無害」

続いて右側の電波体はスバルを宥める。
そうは言っても、背負っている馬鹿でかいランスが怪しい。
やはりスバルは警戒を解かない。

「……………どうする?」

「きっとあれだ……………自己紹介が足りないんだ……………うん」

「おお、そういうことならさっさと済ませようか。……………実行実行」

何やらスバルに背を向け、ヒソヒソと話し込んでいる三体の電波体。スバルはいつもと違う雰囲気（？）に戸惑っている。

「俺の名前はアルタイル……………『夏の大三角形』のリーダーだ……………うん」

「『夏の大三角形』!?!」

『こいつ等、やっぱり敵なのか……………』

「後二人も紹介するな……………うん」

何処かズレているアルタイルは、スバルとウォーロックの洩らした感想を受け流し、言う。

アルタイルの言葉が終わると同時に左右に立つ電波体は言い始めた。

「……………ベガ」

「私の名前はデネブ。……………紹介紹介」

スバルはそれらを頭に留めておきながら、その電波体を睨みつける。睨まれたアルタイル、ベガ、デネブの三体の電波体、そのうちの一人アルタイルはニヤリと不気味な笑みを浮かべた。

「まあ恨む気持ちも分かるけど、もう俺たち脱退したから……………うん」
「脱退……………?」

「そつ、脱退……うん」

アルタイルはそう言ってから、体が発光し始めた。そして姿を現したのはカウボーイの格好をした男、人間だった。この人間に変身する能力は

「プロキオンと同じだ……」

「奴ともう接触したの!? ……よく生きていたね。………感心感心」

スバルが何気なく言った言葉に、デネブが反応する。

次の瞬間には彼女も発光し、擬人化をした。

紫の長い髪でウェーブがかかっていた。

服装はジーンズに白シャツというシンプルなものであったが、背負ってるランスがそのままなので奇怪な色を発している。

「こ、こいつら、一体なんなんだ……」

ランドマークはカチカチと歯を鳴らしながら、スバルの袖を掴む。どうやら怖いらしい。

スバルは背中に隠れる彼女の心配を取り除くため話しかけようとするが、その前に、

「……話は本当みたい」

ベガは辛うじてスバルの耳に入る声量で呟く。相変わらず全く口を動かしていない。

彼女も他の二人と同じように体が光り始める。

出現したのは黒い長髪にスリ姿の女性、スラリとした長い脚がスリツとマッチしている。

「……お前達の目的は何だ？」

「勘違いしてはいけないよ……うん。俺達は君と敵対するつもりはない……俺達がここに来たのには、理由がある……うん」

アルタイルは両手を組み、首を上下させながら言う。

スバルはまるで子供を守る母親のようにして、背中にランドマークを匿う。

その光景にアルタイルは苦笑いを浮かべながら、ゆっくりこちらに歩み始めた。

「動くな！」

「……知りたくはないか？『冬の大三角形』のこと、爺のこと、奴らの目的のこと、そして」

アルタイルは人差し指で、

「……彼女のことを」

スバルの背中に縮こまるランドマークを指し示す。

「……ランドマーク先導巫女をね……うん」

一人寂しい夜道を少女は歩く。
彼女の名前はプロキオン 『冬の大三角形』の一人だ。
小さな小さな影はフラフラと揺れ、足取りは覚束ない。
時折、クスンクスン、と悲しげに鼻を鳴らす音が聞こえる。
頭の中では、ある一つの言葉が繰り返し渦を巻いていた。

『ベテルギウスが死んだ』

爺から聞かされた言葉はプロキオンにとって、重い一撃だった。
口の中にダイナマイトを放り込まれるよりも、超熱線の光線を浴び
続けるよりも、
それは深く、プロキオンの心を抉っていく。
思い出すたびに胸が苦しく、喉が熱く、口を開けば嗚咽が漏れだす。

「……………べ、テル……………ギウ……………ス」

それはもはや言葉ではなかった、正常に言葉を話すことができない。
彼女の精神状態はボロボロの状態であった。
足を一步前に出すが、それは地面に弱々しく着地する。
上手く力が入らない、誰にでもできる“歩く”ことが、今、彼女に
とって難しいことであった。
遂に彼女は力なく仰向けに倒れこんだ。
もう彼女には起き上がる、気力もなかった。

時間は、彼女の心を回復させることはできなかった。
時間は、ただ彼女の心にダメージを与えていくだけであった。

二十四話 ランドマークの正体

「教えてやるよ……全てをね……うん」

それはコダマタウンの展望台に突如現れた『夏の大三角形』のリーダー、アルタイルの口から飛び出した言葉だ。そしてそれに喰い付いたのはランドマークである。

「知ってるのか！？私のことも!?!」

「……………知っている」

スバルは、歓喜と驚きで入り混じった表情を浮かべるランドマークを必死に引き止める。

これは『夏の大三角形』の罠の可能性は否定できないからである。容易に彼らに近づくのは危険だ。

「そうだな……君のウィザードはウォーロックだったよね……………
うん」

『呼んだか?』

ウォーロックがハンターから飛び出し、その姿を現す。

デネブはアルタイルを遮るように、

「FM星人だったら知ってるはずなんだけどね……………絶対絶対」

『人間のことなんて知らねえな』

突然ベガはそんなウォーロックをスルーして、人差し指でランドマークを指し示した。

そしてその小さな口がボソボソと動く。

「……………彼女は人間じゃない。電波生命体」
「ツんな馬鹿な！？ 見ての通り人間じゃないか！！」

スバルはランドマークの両肩を掴みながら前に差し出す。
アルタイルは楽しげに微笑みながら、

「これは俺達と同じ“擬人化”を使っているからだ……………うん」
「でも ツ！？」

スバルは否定したくても言葉が思い浮かばなかった。
何故なら辻褄が合うからだ。

何故、空から落ちてきたのか？

簡単だ、彼女は地球外生命体の電波生命体だからだ。
人間に出来ない芸当も電波生命体なら可能。

「それに彼女の本当の名前は……………アルテミスだ……………うん」
「アルテミスだと！？」
「ウォーロック知ってるの？」

ウォーロックが信じられないといったような顔をする。
それもそうだろう、何故ならアルテミスとは

『FM星の救世主、最強の魔術師と謳われている電波体だ』

人間は無関心な生き物だ。

こうして見た目が幼女であるプロキオンが仰向けに倒れていても、裏通りの連中は反応を示さない。

精々、踏みつけるか、唾を飛ばすかだ。

普段のプロキオンなら殴り飛ばした後、コンクリートにめり込ませるぐらいの仕返しはしてやるのだが、今の彼女は普通ではない。

そんな異常な幼女の傍らに置かれる“発想の壺”に誰かが触れた。

「おい、これ質に入れようぜ」

「高く売れそうだな……へへ」

裏通りに群れる裏の人物は更に無関心に磨きが掛かっており、仰向けに倒れる幼女よりも壺に興味を持っているようだ。

普段のプロキオンなら蹴り飛ばした後、五十階の高層ビルからロケットランチャーを超えるスピードで突き落とすぐらいの仕返しはしてやるのだが、今の彼女は無気力だ。

(ベテルギウス……どうして死んじまったんだよ……自分は待ってたのに……帰ってこなかったら意味がねえだろうがよ)

やる気は起こらなかった。

空虚感が彼女の心を埋め尽くしていく。

「うん？　なんだ壺の中に何か？」

“発想の壺”を漁っていた一人が言い始めた。

仕方ないから、『冬の大六角形』のリーダーをプロキオンに享受する。仕方なくな！

皮肉げに書かれたその言葉さえもプロキオンには懐かしい。泣きたくなるが、今の彼女にはやるべき事がある。

「バカ……………」

プロキオンは小さく呟き、

「やってやるうじゃねえか！」

次は大きな声で叫んだ。

「おい！テメエ何さつきから無視してやがんだ！！」

「ここは子供がやってきていいところじゃねえんだよ！！」
「……………」

居たんだ？ とプロキオンは言いたげな顔をする。

緩んだ額に巻くボロ衣を結びなおすと、

「テメエら親とか親戚いるか？」

急な質問に男二人は目を天にして、

「いや俺ら孤児だったからいねえよな？」

「そんなことはどうでもいいんだよ！こいつ生意気な」

「そりゃあ良かった」

？ と首を傾げる男二人をプロキオンは無視して、ゆっくりと一歩歩んだ。

たったそれだけの行動でさっきまで偉そうにしていた二人は恐怖を抱く。

自分より小さな女子供に、大した行動も起こしていないのに、その歩みが恐ろしかった。

「爺から人間の無駄な殺しは止められてるんだけど、テメエら孤児なんだろう？」

遂に腰が地面に付いた。

助けを呼ばなくちゃ、しかしこの喉は動いてくれない。

立って逃げなきゃ、しかしこの膝は震えを押さえてくれない。

何も出来ない、ただの小学生低学年の子供ガキを前にして何もかも行動が許されない。

「じゃあ殺していいよな？」

一瞬の出来事。

グチャッ！ と不快な音が響いた。

二十五話 家の案内

『後、詳しい話はこいつに聞いていてくれ……………うん』

……………と完全に丸投げされたデネブは明らかに不機嫌そうな顔をする。目の前には星河スバルと先導巫女^{ランドマーク}。さて何から話そうか……………思考思考、とデネブは悩みに悩む。

「くそお、アルタイルとベガ……………完全に丸投げなんて酷い。……………卑劣卑劣」

「あのお話を聞かせて欲しいんですけど」

スバルは優しく問い。

「もっと、早く、分かりやすく、私のことについて教えてくれ！」

ランドマークはきつく問う。

「とりあえず腰が下ろせる所で話がしたいんだけど……………長閑
長閑」

「ああ、それなら僕の家がいいと思いますよ」

そんなスバルにウォーロックは肩を組んで、二人に背を向ける。ヒソヒソと二人に聞こえない声で話し合う。

『（いいのかよ？あいつ等、敵かも知れないんだぜ？）』

「（不安なのは分かるけど、情報が欲しいじゃないか、今のところ何もされてないしね？）」

『（でもよ、アルタイルとベガが消えたたる？何か情報流してんじ

「やねえのか？」

「いや、デネブの行動を見るとそうは思えないんだけど……」

確かにデネブは心の底から“置いてかれて悲しい”を表している。これが演技だったらよっぽどの演技バカだろう。

「（とりあえず僕の家を招待しよう）」

「（……そうだな）」

ウォーロックが妥協し、スバルは振り返る。

「……僕の家はこっちです」

とりあえずスバルはデネブを家に招待することにした。

スバルは展望台から家までの道のりがこんなに長いと感じたのは初めてのことである。

七月二十七日の午前一時、小学生がこんな時間まで外に出ていないのかと疑問に思ってしまう。

そんな時間帯でも外に出ている人はちらほらと目にした。そしてスバルは明らかに浮いていた。

いや、正確には後ろについていく二人が浮いているのだ。まず、絵本からそのまま飛び出したような格好をしている少女。ゴシッククローリータファッションのランドマークだ。

更にその後方、ジーンズに白シャツの普通の格好に思いきや、背負う三本のバカでかいランス。

『夏の大三角形』の一人、デネブだ。

何とか人々から目立つという屈辱に耐え、スバル宅の前にまで来た。

「目立ってたなあ……………」

「確かにな」

「恥ずかしいね。……………赤面赤面」

「言っとくけど君達二人の服装によるものだからね……………」

スバルはドアの鍵を開けた。

今日、両親は帰らない筈だからである。

本当にその筈だったのだ……………。

しっかりと両親は玄関で立っていた。

「ハハハッ」

これはもうあれだ、笑おう。

それで解決されるわけもないとは分かっているが、笑うしかない。

「二人とも親がいないからって夜遊びなんて駄目じゃない」

「そうだぞ、俺達は心配して帰ってきたんだぞ」

「ごめんなさい」

「うん、ごめんなさい……………その〜」

スバルとワンドマークは深々と頭を下げ、申し訳なさそうな声を発する。

すると後ろから現れた一人の女。

「こんばんは……いやおはようございますかな？……私の名前はデネブ、スバル君のお友達をさせてもらってます……宜しくよろし」

とデネブは言葉を切った。

それというのもバカでかいランスが扉に入りきらず引っ掛かってしまったのだ。

気まずい空気。

だがプツ、と音が聞こえたと思えば、あかねと大吾は大口を開けて笑い始めた。

「スバルったらこんな面白いお友達がいたなんて……フフフ」

「背負うランスが扉に引っ掛かるなんて……ワツハツハツハツハツハ！！」

本当にこの二人はずれてるな、とスバルは内心思いながら部屋に続く階段に上った。

「爺、話がある……」

とある宇宙の一角にプロキオンはいた。

“擬人化”は解いており、電波体としての姿である。

「何だ？改まって……」

「『冬の大六角形』の召集についてだ」

『冬の大六角形』とはベテルギウスを中心に、かなりの手練の電波体六人が集まったグループである。

数の多さと戦力と“参謀者”であるベテルギウスの的確な指示により、現時点での最強の宇宙グループである。

だがそのあまりにも強すぎるグループを危険視した者が多数存在したので、普段は戦力を縮小して『冬の大三角形』として活動している。

しかし今、的確な指示を下す“参謀者”ベテルギウスと様々な宝具を保管する玩具箱ブラックホールサーバーを操る“完璧主義”シリウスという重要な役割を持つ二人が死んだ。

『冬の大三角形』はプロキオン一人のみになってしまったのだ。

「奴らと呼ぶのか？」

「ああ、こうなっちゃあ仕方ないだろ？」

確かにそうであろう。

宇宙の三本指に入る実力であるプロキオンであっても一人でグループを支えるのはキツイ。

そう分かってか、爺は反論もせずゆっくりと頷いた。

「じゃあ、呼ぼうかね……」
「ああ……」

そう言っつてプロキオンがその場を後にしようとした時、

「……プロキオン」

爺と呼ばれしその電波体は、背を向けるプロキオンを引き止めた。
プロキオンは怪訝な顔を顕わにしながらも、しっかりと目を合わせた。

「何だ？」

「……ベテルギウスの死は私の責任だ。本来、“参謀者”たる奴を前線に向かわせたのは私のミスだ。すまなかつたな……」
「……、」

プロキオンは一瞬哀しそうな顔をしてから、ハッと我に返り真面目な顔を作る。

「……ベテルギウスアイツがそれを望んだんだろ？ だったら自分から批判の言葉はない」

そうか……、とその電波体は答え、視線を永遠に広がる宇宙へと移した。

二十六話 召集

もう午前二時を回ったが、星河スバルは眠ろうとしなかった。眠くないわけではない、とても眠い。

だが目の前に座るデネブから話を聞き終えるまでは眠らない、という覚悟が出来ていた。

「じゃ、手っ取り早く済まそうか。……………早急早急」

デネブは背負っていた三本のランスを軽々と持ち上げ床に置いた。ミシミシッ！ と物を置いたとは思えない音を発している。

このままでは床が抜けてしまうのではないかと思っただが、我が家もそこまでやわではない様だ。

「とりあえず先導巫女の正体は教えたよね？ ………………確認確認」

「まったく身に覚えがないがな」

部屋を落ち着かない様子で歩き回っていたランドマークが床に座り込んだ。

デネブは首をパキパキと鳴らし、

「それはそうだろうね……………記憶がないんだから……………当然当然」

いとも簡単に答えた。

それは分かっているのだ、要はどうして記憶がないのか知りたいのだ。

その事を聞くと、デネブはニンマリと笑みを浮かべた。

「それで少し話があるんだよね。……………嘆願嘆願」

「話……?」

そう、とデネブは人差し指で頬を掻く。

何か申し訳なさそうな、そんな顔をしている。

「単刀直入に言うよ、星河スバル君、君はこの町から出て行け。…

……………家出家出」

頭の中が真っ白になった。

この人は何を言ってるんだ? と頭の中で渦を巻く。

何故そんな話になるのかも疑問に思うし、何故町を出なくてはいけないのかも疑問に思う。

「先導巫女の記憶は、爺の力で具現化され四つに分かれた。……………」

…それは世界に散らばり、今も眠っている。……………割れた割れた」

「じゃ、じゃあ私の記憶は世界中に散らばっているのか!？」

うん、とデネブは笑みを絶やさない。

「スバル君が町を出る理由は“記憶”を探す必要があるから……………」

…必須必須」

『必要がある?』

失礼かもしれないが“記憶”を探すのは強制ではない。

スバルは拒否しようと思えば拒否できるのだ。

それに“記憶”探しなら、別にスバルでなくても出来ることだ。

「私達の本拠地の名は“宇宙庭園ヴァルハラ”。……………紹介紹介」

『じゃ、そこに行こうぜ!』

「まあ、待って。例えば“宇宙庭園ヴァルハラ”に辿り着いたとして

も、敵に勝つことはできない。……………不可能不可能」

『そんなのやってみなくちゃ分かんねえだろ!!』

「いや絶対に勝つことはできない……………次元が違うんだよ……………最強最強」

「そのためにランドマークちゃんの記憶を取り戻して、戦力にする……………ってこと?」

「その通り。……………明察明察」

後もう一つ、とデネブは紫のウェーブがかかった髪を弄りながら、立ち上がった。

「“四神”に協力を仰ぐんだ!……………解決解決」

「“四神”?」

えっ?知らないの? とでも言いたげな顔をするデネブ。

そんな彼女にスバルは口元をピクつかせながらも、必死に湧き出る怒りを押さえ込む。

「まあとりあえず世界に散らばる“四神”に協力を頼むことも、町を出る目的の一つだね……………理由理由」

「……………」

「……………スバルどうするんだ?」

悩むスバルに、ウォーロックやランドマークとは違って、デネブは容赦はなかった。

「答えは今日中に聞こう……………答弁答弁」

「今日中……………」

早すぎる、スバルは思った。

突然すぎる町の家出命令に、今日中に答えなくてはならないのだ。

そこまで事態は急ぐものなのかと疑問に思ったスバルは、敵の目的がロックマンを倒すことだということに気づいた。

自分がコダマタウンにいたら、敵は容赦なくコダマタウンに攻めてくる……となると他の人との迷惑がかかる。

これは単に先導巫女の“記憶”を取り戻すとか、“四神”に協力を仰ぐとかそれだけの問題じゃない。

コダマタウンに迷惑をかけないようにするためのものでもあるのだ。自分が旅に出ることで他に迷惑が掛かるかもしれない、今まさにスバルは不幸に追われる疫病神。

そのことが分かってしまったスバルは哀しくなってしまった。だがそれと同時に

決意が生まれた。

「時間は要りませんよ」

その言葉に三人はスバルの顔を見る。

顔は決意と自信が表れていた。

言葉など要らない、顔を見れば分かる。

今、スバルの口から三人の思ったとおりの言葉が発せられた。

真つ黒な世界が広がる宇宙にポツンと場違いな物体が浮遊している。それは暗い色の宇宙に、鮮やかに輝く有色の様々な色。

赤、白、黄色、と聞いたことのある童謡の歌詞に出てくる有色では収まらない。

それはまさしく様々な花が咲く庭園。

ここは“宇宙庭園ヴァルハラ”……………

そこで“磊落多情”らいらくたじょうプロキオンは仁王立ちをする。

美しき庭園には、あの戦闘好きで敵には容赦がない彼女でさえも思い出はあつた。

思えばいつも隣にはベテルギウスがいた。庭園での思い出もいつもベテルギウスが出てくる。

シリウスが死んでも何も感じなかった彼女は、ベテルギウスが死ぬと深い悲しみに陥つた。

どちらも同じ『死』であるのには変わりはないのに、思い入れる感情は全くの別物だった。

プロキオンは見た目とは違って、残虐な性格の持ち主だ。

そんな彼女はベテルギウスに思い入れる『感情』は理解できなかつた、この熱い気持ちは『ただの仲の良い友達』程度のものだと認識している。

その『感情』にプロキオンが気づくのはもっと先の話である。

だが今、彼女はベテルギウスが大切な者であることはしっかりと認識していた。

「失ってから気づくんだよな、大切なものってのは……………」

その呟きは宇宙に溶け、誰にも聞かれる筈もなかった
なかつたのだ。 筈も

実はその呟きはしっかりと聞かれていたのだ。

「なんかプロキオンが珍しく感傷に浸ってるぜ」

その声は背後から聞こえた。

プロキオンが振り向くと四人の電波体が立っていた。
相変わらず強い電波がビリビリ伝わってくる、とプロキオンは評する。

「しかしシリウスに続いてベテルギウスが死ぬなんてな………驚きだぜ」

最初に聞こえた声と同じ声、ザリガニの顔を持つ電波体。
名をポルツクス。

「それで我々を招集したのですね、新リーダー」

続いて冷静な冷たい声を発した、馬の顔に額に長い角を生やした一角獣の顔を持つ電波体。
名をカペラ。

「戦えるなら万々歳だ！」

続いて気迫の伝わる声を発した、ヘラジカの顔を持つ電波体。
名をアルデバラン。

「ま、また戦いになるのでしょうか……？」

弱々しい言葉を告げたのは、ジユゴンの顔を持つ電波体。名をリゲル。

この四人の電波体こそ、『冬の大三角形』のメンバーと合わせて『冬の大六角形』となるのだ。

『冬の大六角形』の戦法は“参謀者”^{ベテルギウスの『パペットダミー』}による参謀、シリウスの『玩具箱』^{ブラックホールサーバー}の武器による補助、リゲルの『絶対防御』^{オクタヒードラ}による侵攻防御、後はプロキオン、ポルツクス、アルデバランの戦闘力によるものだ。

そして今、残ったのは戦闘力が特化した者ばかりだ。

なのでグループ最強は不動、現時点でも第一位であろう（以前より弱くなったのは事実）。

これならいける！ とプロキオンは心の中でガッツポーズを繰り返す。

「じゃあ、新リーダーである自分から命令を下す

」

“宇宙庭園ヴァルハラ”で、彼等も新たな動きを見せ始めたのであった。

二十七話 旅立ち前日

星河スバルは遅い起床を果たしていた。

それもそうであろう、寝たのは午前三時。

なので少しぐらいの遅い起床も致し方ないであろう。

で只今、昼の十二時……。

スバルが体を起こすと既にランドマークとデネブは起きていた。

まあ電波体であるから眠る必要もないであろうが……。

今でもスバルは信じられなかった、今まで一緒に居たランドマークが電波体で更にAM星の女王アルテミスという事実を。

当の本人ランドマークは昨日のことなんてすっかり忘れてしまっているぐらいに普段と変わりはなかった。

相変わらず美しい金髪で、煌く緑眼、目立つゴスロリ、なんら変わりはしない。

「で、デネブは何で居るの？」

……スバルの日常にいつもと違った者が部屋に居るのだ。

デネブも昨日見た姿となんら変わりはない。

相変わらずバカでかいランスを三本背負っている。

「私もスバル君と旅に出るんだよ……………一緒に一緒」

「……………」

この時スバルは、デネブが旅に参加することに驚きは感じなかった。どちらかというと自分が旅に出るといふ事実が現実のものであるという事の方がそれを上回っていたのだ。

旅行ではない、“旅”……………何時戻ってくるかも分からない。

それは未だ小学生のスバルにとっては重く、厳しいものであった。

『どうしたんだ？ 怖気付いたか？』

「否定はしないよ……ロック」

スバルは否定はしなかった、だって本当のことだから。

だけど、逃げるわけにはいかない。

怖いからって、不安だからって、道を避け続けてなるものか。

「……… だけど考えは変わらない」

「よく言った、スバル」

ランドマークは待つてました、と言わんばかりの笑顔を浮かべる。

スバルもその笑顔につられて、苦笑に近い笑みを浮かべた。

「……… 出発は今日の深夜、住人に悟られないように町を出る。移動

手段は出来る限り電波変換は使わずにね……… 説明説明」

「何だ、今すぐじゃないのか………」

「それはスバル君の事を考えれば致し方ないこと……… 我慢我慢」

スバルが町を出る目的は先導巫女^{ランドマーク}の具現化された“記憶”を取り戻すことと世界に散らばる“四神”に今回の戦いの協力を仰ぐこと………

……… だけではない。

敵の目的は“ロックマンを倒すこと”、狙われているスバルがゴダマタウンに残ったままだと破壊事件を起こしたプロキオンの時のように周りに被害が及びかねない、そのため相手から身を隠しつつ町を出ることによって被害を抑えようとしているのもスバルの目的の一つ。

「相手に感づかれないために、電波変換は必要最低限にし

ておくんですね」

「その通り、私も普段から“擬人化”をしておくから宜しく……………」

…ランドマーク先導巫女は必要ないか……………無用無用」

ランドマーク先導巫女、爺と呼ばれる電波体に記憶を具現化され世界中に散りばめられた。

そのため記憶はない、知識もない、空っぽの少女。

元の電波の姿には変身出来ず、人間としての姿（何故かゴスロリ）で生活をしている。

だが元の電波体の彼女、アルテミスはAM星の女王であり、AM星育ちだが全然AM星について知らないウォーロックでさえもその名を知る程の有名っぷり。

“最強の魔術師”としての異名を持っているが、記憶がない彼女は何も出来ないただの人間であり、電波反応も感じられない。

「私はスバルの助けになれないが、私の“記憶”を戻す旅だ……………ついでに行くぞ」

「私もアルティルに頼まれてるし、お供するよ……………守護守護」

「ハハハッ、二人が来てくれるなら頼もしいよ」

『二人じゃねえだろ！』

突然、ウォーロックが乱入してきた。

言わずとも分かる、二人じゃない三人。

スバルには頼もしい仲間が三人もいる。

スバルは自然と心に蟠っていた靄が綺麗に取り払われた気がした。

白金ルナは自身の部屋で紅茶を啜っていた。

それは茶葉一袋何万円とする、そこらのスーパーではお目にかかれない特注品だ。

それは値段を違わず、美味そのものでありルナの舌を喜ばせたのだが、心は迷いで渦巻いていた。

今から星河スバルを買い物に誘おうか、その事でルナは迷っている。簡単なことの筈なのだ、今から家に行つてポチッとインターホンを押して、『あつ、ちよつと買い物に付き合つて。拒否権は存在しないわよ、委員長兼生徒会長の命令ですからね』といつても通りの感じで誘えばいいのだ、簡単なことの筈なのだ。

だがルナにとってこれはどんな難しい数式よりも困難なことである。この積極性がミソラに遅れを取る要因である事はモードから耳が痛くなるほど言われていることなのだが、やっぱり踏ん切りがつかない。

「はあ……」

何度目か分からない溜め息。

スバルを買い物に誘う、ことを実行に移したい自分と逃げたい自分が存在した。

『ルナちゃん！頑張ってみましようよ！』

モードの励ましが耳に入ってくるが、やっぱり踏ん切りがつかない。そんなルナが立ち上がった、と思えばまた座り、再び立ち上がる。

心の天秤は忙しく傾き、不安定な状態。
ルナはカップに五杯目となる紅茶を注いだ。

響ミソラは納得していた。

よく、人間とは猿が進化した生き物という。

だがそれには確証は存在しない。

たまに毛深く、『ああ猿っぽい……』みたいな人もいるが、間違ってもその人を本気で猿と見間違いはしない。

あくまでもその人は猿っぽいのだから……。

だがどうだろう？

今、彼女の目の前に立つ人間（？）。

これは目の端に捉えて猿みたいと気づくとかそういう次元ではない、直視しても猿にしか見えないのだ。

例えばこの人の骨を博物館に展示して、『これはネアンデルタール人の全身骨格です』と言つてもばれないと言つほどのレベルなのだ。似ているとかじゃない、そのものなのだ。

もうお気づきだろうか？

「　　で調べた結果だが特に気にすることもないだろう……さつきから俺の顔を凝視しているが何か付いているのか？」

あついえ、とミソラは慌ててその顔から目線を外した。視界に入れなくともその強烈なインパクトな顔は脳に直接染み渡っており、忘れることもできそうにない。

彼は医者。

プロキオンの事件の時、負傷したスバルとシドウの治療を担当した医者だ。

顔はともかく腕は確かであるらしい。

「本当に何もありませんか？」

「ああ、何もなし」

ミソラはベテルギウスに突然記憶を奪われ、そして再びぶち込まれた。
た。

デリケート 敏感な脳だ、そんな抜いたり入れたりしては危険だ。

しかしシンガーソングライターの脳はそんな弱いものではなかったらしい。

「じゃ、帰れ」

「えっ！？もう帰っていいんですか？」

ミソラの予想では精々もう一日ぐらいは入院することだと思っていたので、思わず聞いてしまった。

医者はその猿顔を顰めて、足を組んだ。

「お前は既に健康体だしな」

「は、はあ」

それにしてもお客である患者がこんな雑に扱われるとは酷いものだ。“お客は神様”という会社の基本は百八十度傾いてしまっている。

まあ腕は確かなので、病院自体は人気なので良いのだが……。

「じゃ、失礼します」

ミノラは席から立ち上がり、ペコリと医者に頭を下げた。

医者はどうでもいいからさっさと帰れ、と感情丸出しの顔を浮かべた。

パタンと横閉じの扉を閉めた。

『良かったわね』

「うん、とりあえずベイサイドシティに戻るっか？」

こうしてミノラは日常へと戻っていく。

二十八話 旅立ち

スバルは非日常へと足を踏み入れようとしていた。

スバルは鞆を背負った。約束の時間は過ぎている。

先にランドマークをデネブをBIGWAVEの前の広場へと行かせ、自分は最後の準備をしていたのだ。

一言も喋らず、これからのことを頭に入れつつ、一步步いた。

ドアノブに触れた時、彼はゆっくり振り返り自身の部屋を見返した。思えば自分はずっとここに居た。そして今、そこから離れようとしている。

『名残惜しいか？』

「……、」

当然だ、名残惜しいに決まってる。

哀しくない別れなんてないのだから。

だがスバルはその道を選んだ、もう迷わない。

ドアノブを捻り、階段を一步一步下り始めた。

音を立てないように慎重に慎重に、親に悟られないようにゆっくり下りる。

電波変換をしないのは、敵にスバルがコダマタウンを出たという事実を知らせないためだ。

難しいことだ。

敵をコダマタウンから遠ざけたいのならロックマンの存在をチラつかせねばならないし、ランドマーク先導巫女の記憶搜索や四神への協力を頼むには気配を悟らせたくない。

気づけばもう階段は下り終えて玄関の目の前まで来ていた。

「……さようなら、僕の家」

だがスバルの選択肢はもう既に一つしかない。
どんなに哀しくとも、ここに留まるつもりはない。

これは皆を守るためだ。

もう思い残りも無い、と無理やり湧き上がる悲しみを押し殺し最後の扉のノブを触る。

「待てよ」

！？ とスバルは後ろを振り向いた。

壁に寄りかかって立っていたのは星河大吾、スバルの父親だ。

スバルは目を見開いていたが、すぐにその顔を冷静なものに戻した。

「スバル、お前が何を抱えているか知らないがこんな時間に家を出てどうする？」

「……、」

スバルは答えない。

本当の事は言えない。

大吾に言えば、きっとそれは広まって皆に心配をかけさせることになるからだ。

『大吾、ここは何も言わずに見逃してくれ』

「ウォーロック、俺はスバルに聞いてるんだ」

大吾は一回息継ぎをする。

「お前が家を出る理由は知らない、だがなお前のやってる事は現実から逃げているだけじゃないのか？」

それは大吾なりの問いかけ。

攻めているのではない、問いているのだ。

スバル、我が子がどんな返しをしてくるのか、と少し楽しみにしながら問いているのだ。

「……これは“逃げ”じゃないよ」

今まで口を開かなかったスバルはポツリと一言。

「“攻め”だよ」

スバルは無言を言わず、最後の扉を開いた。

そして長年住んできた自身の家に別れを告げた。

大吾はそんな我が子の背中を見送った。

そこまでの決意が溢れている我が子を止めに入る親が一体何処にいるのであるのか？

宇宙庭園ヴァルハラで、爺と呼ばれし電波体は佇んでいた。頭の中ではベテルギウスが地球に降り立つ少し前のことを思い出していた。

私はこの戦いで死ぬつもりです』

これが彼の第一声。

爺と呼ばれし電波体はそれに顔を驚愕に染めざるを得なかった。そんなベテルギウスは、

我々『冬の大三角形』の一人シリウスが死に戦力は格段に下がっています。『冬の大六角形』に戦力を拡大させたいのですがプロキオンは応じてくれません。

仲間の賛同を得ていないのにそれを無視しての戦力拡大は混乱を招くだけ。何かの切っ掛けが必要なんです。切っ掛けが……。

重すぎる切っ掛けだ、と爺と呼ばれし電波体は思った。

恐らく『冬の大三角形』が私を含め、まだ二人だから危機感を感じないのでしょう。しかし私が死にプロキオンがただ一人となった時、『冬の大六角形』に戦力を拡大せざる負えなくなるでしょう。

爺と呼ばれし電波体は勿論『止めておけ』とベテルギウスを止めようと努めた。

しかしベテルギウスの意思は変わらない。

安心してください。勝てるのなら勝ちにいきますし、無駄死にだけはしません。

爺と呼ばれし電波体は溜め息をつく。

相変わらず頭でっかちな奴だ、と思いつつ庭園に咲き誇る様々な美しい花々に目をやる。

ロックマンに勝てば良し。

ロックマンに負ければ『冬の六角形』召集し、再びロックマンに戦いを挑む。

失敗はない。

どちらに転んでもその先の解決策は存在する。

成功率100%の任務。

「ロックマンが我等の脅威となるとは思えない。ベテルギウスはロックマンを危険視しすぎだと思っただがな……」

『ある電波体』はそう思いながら、宇宙を見上げた。

スバルがBIGWAVEの前の広場に行く待ちくたびれたかのよ
うにブランコに腰を掛けるランドマークとポーツと何もせずただ空
を見ている擬人化状態のデネブの姿があった。

「……すばる、遅かったな」
「うん。途中で父さんに見つかってね……」

そう言うと空から視線をスバルに移したデネブは背中に背負うラン
スを振り上げながら、

「どうだった？ ……確認確認」

「うん。特には……ねえ？」

『ああ、励まされた……？ いや許しを得たのか？』

スバルは眉を顰め、ウォーロックは言葉を濁す。
その言葉にデネブは笑顔で首を縦に降りながら、

「許しを得たのならそれは良いことだ。本来ならこの世界から星河
スバルという存在を消すのが最善なだけど、ランドマーク先導巫女がこんな状
態なら仕方ないな。……余儀なし余儀なし」

「存在を消す……」

顔を蒼白させるスバルに気づいたデネブは両手をパタつかせながら、

「存在を消すっていつでも殺すわけじゃない。……安心安心」

と一度デネブは言葉を切って、

「難しい話になるけど記憶を消すとは違う。存在を消すっていうのはこの世界には星河スバルという存在は居なかった、っていうことになる。しかし死ぬわけじゃない。ま、ある意味では死んだようなもんか。……………滑稽滑稽」

「まあそれもランドマークちゃんが出来る術なんだよね」

『お前もあの姿見たらおったまげるぞ。めっちゃ強いからな』
「全っつっつっく覚えてはいないがな」

デネブはフツ、と微笑を浮かべ、

「後始末はアルタイルとベガがやってくれる。私達はただ先に進めばいいんだ」

三本のバカデカイランスを背負ったデネブは背を向け歩きだした。その先を追うようにランドマークも行く。

スバルは少し躊躇うかのように一回振り返る。

コダマタウンの風景、懐かしい思い出。

それらを目に焼き付け、スバルはその足を前に進めた。

七月二十八日、三時十七分の早朝……、

星河スバル。

ウォーロック。

ランドマーク。

デネブ。

この四人はコダマタウンを出る。

二十九話 彼は居ない

星河スバルの家出の噂はあっという間にコダマタウン中に広まった。それは白金ルナ、牛島ゴン太、最小院キザマロは勿論、ベイサイドシティの響ミソラの耳にまで届いていた。

それを聞いた彼等がのうのうと右から左にその話を受け流すはずもなく。

何も打ち合わせもしてないにも拘らず、星河スバル家に自然に集合していた。

そんな彼等の目の前には星河夫妻大吾とあかねの姿がある。

「スバルはここを出た。恐らく同居してたランドマークと一緒にだ」

まず大吾の第一声。

これには皆、顔を驚愕に染める。

大吾は彼等の反応を見ながら、

「だが追うなんて考えるな。スバルの自由にさせてやってくれ」

「そ、そんなの無理です！ やっぱり……………心配ですもの」

白金ルナ、彼女の言葉を聞いて大吾はスバルの上手くいっている人間関係に嬉しく思いながらもその言葉を拒否する。

スバルの目は本気だった。

それを横槍するのは大吾は望んではない。

それを伝えてやると、どうも納得いかない様子だった。ルナは押し黙った。

大吾はルナの気持ちを察しながらも、大きな口を開いて言い放った。

「……………スバルは、スバルは……………我が愛する寄宿ランドマークと駆け

落ちしたのだ！」

！？ とその場に居る少年少女のみならず、あかねさえも驚きに顔を引き攣らせた。

スバルの気合の入った別れ言葉は愉快なほどに大吾が勘違いをしていた。

「スバルがあんな小さい娘こが好みだったとは……、知らなかったなあ」

「……シヨックです」

ゴン太とキザマロは友のまさかの趣味に若干（と言うよりもかなり）引き、

「スバル君が！スバル君が！！ スバル君が駆け落ち……！！」

「やっぱりそういう関係だったのか……」

ルナとミソラの少女二人はあまりのシヨックに落胆し、

「スバルったら……大人になったわね」

スバルの母あかねはあらあら、と感嘆している。

大吾は、

「もう一度言うぞ！ 我が息子スバルを追わないでくれ！ アイツの好きにさせてやってくれ！ 以上！ もうこれ以上話す事は無い！」

大吾はそう言い残すと、あかねの手を引いて家へと入っていた。残された四人はただただ無言で立ち尽くしていた。

その夜、大吾は展望台に居た
あかねを先に寝かせ、自分は星空観察という所だ。
ハア、と大吾は一度息をつくと、後ろも振り向かずに、

「これで良いんだろう？」

その声を引き金に大吾の真後ろに二つの影が現れた。
片方はカウボーイの格好をした男。
そしてもう片方は黒髪長髪のスーツの女。

「ご協力感謝します。……………うん」

カウボーイの格好をした男がそう返した。
大吾は漸く後ろに振り向いて、

「皆を巻き込みたくない、か。スバルらしい言葉だな」
「……………全くです」

スーツの女は同意の言葉を告げる。
大吾は微笑を浮かべながら、

「俺はアンタ等を信用して良いのか？」

「今のところは。……………うん」

「今のところは、ね。言っておくが、家の愛すべき我が子に手出し
たら」

大吾の表情が一転して二人を睨みつけ、

「許さねえからな」

その言葉と覇気に二人は思わず後ろに身を引いてしまう。
だがすぐにケロツ、と大吾の表情がまた緩やかになると、

「まあ、世界を見て回るのは悪くないな。アイツの志がどこまで貫
いていけるのか……………」

大吾はもう一度息を吐くと、

「帰ってくるのが楽しみだ」

三十話 再会

コダマタウンを出発してから三日経った。持ってきた食料は尽き、存在感を放つ大きな鞆も虚しくも軽くなっていた。

「あ、足がアアアアアア!!」

そう叫びながら地べたを転がるのは星河スバル。彼は右足を攣つかってしまったのだ。

「……………スバル君は結構ひ弱なんだね。……………意外意外」

共に旅するデネブは身軽に跳とんだり跳はねたりしている。

三日歩きっぱなしで足を攣つかるぐらいは当然ではないのだろうか、とスバルは内心思いながらも立ち上がる。

スバルは顔を上げると、眼前に広がるのは一面の雪景色、ここはヤエバリゾートだ。

移動手段が己の足のみという状態で行ける距離など限られてくると三日前のスバルは思っていた。

しかしいざ三日ぶっ続けて歩けば、ウエーブライナー三時間ほど乗ってようやく着くヤエバリゾートにまで来てしまった。

「これが雪というやつか。TVで見た通り美しいものだな」

同じく共に旅をするランドマークは雪を掴んで空中でパラパラとそれを振り落しながら呟いた。

真っ暗なゴスロリ姿は真っ白な雪景色に映える。

彼女は記憶喪失　というよりは記憶を四つに具現化され世界中に

散りばめられたというのが正解だ。

それを取り戻すのが今回の旅の目的でもあつたりするのだが、三日目にして右足も攣るし、持参の食料も尽きた。

金も小学生のお小遣いでは数も知れている。

これは先が思いやられるなあ、とスバルは深く考え込んでいる刹那、頭に冷たさと痛みの衝撃が走った。

一瞬何が起こったのか逡巡し、やがて我が身に何が起きたのかと気づき、少女ランドマークの姿を見る。

「ひよひよひよ。私の手に掛ければこの美しき雪も一瞬にして凶器となる。どうだ？痛いか？その痛みでもがき苦しみ私の目の前で雪に顔を埋めながらひれ伏すがいい！！」

「おいっ！スバル！あんなこと言われて黙ってて良いのか？男なら戦え！！」

スバルは全く気にせず頭につく雪を払いながら、落ち着いて言い放つ。

「僕はもう小学五年生だ。ランドマークちゃんのような子供相手にムキになるほど幼稚じゃないよ」

『小学五年生って子供じゃないのか……』

大人なスバルはアルカイックスマイルを浮かべ、ランドマークを見る据える。

当のランドマークは素っ気ないスバルの反応に頬を膨らませながらスネてしまう。

しかしランドマークは諦めない、雪を掻き集め雪玉を形成し、戦闘準備を着々と進めていく。

そして訪れるのは星河スバルのみに狙いを絞った殺戮シヨゆきだまなげー。

「滅びよ！」

ランドマークの投げる雪玉は的確にスバルの急所に当たり、地味に苦しみを与える。

「ひよひよひよ！！ どうした？ どうした！？ 貴様はその程度のものなのか！？」

不気味な笑い声を上げるランドマークの言葉にスバルは次第に頭が熱くなつていく。

プツプツと頭から湯気が立ち始め、遂に彼は少しだけ怒った。地面から雪をすくってランドマークに思いっきり投げる。

それは見事にランドマークの顔に当たり、彼女は尻餅を付いてしまふ。

「ハハハッ！ 大人をあまりからかうものじゃないよ！！」

「何を言う！ お前も子供ではないか！？」

言い合い二人は互いに雪玉を投げ合う。

それはまさしく互角。

当たればやり返し、当てればやり返される。

そんな攻防が続く。

そして十分後、スバルの投げた一つの雪玉がランドマークの顔に容赦なく当たり彼女は盛大に後ろにコケた。

軍配が上がったのはスバルだ。

「ハアハアハア……ワ、ワツハッハッハッハ！！ どうだ思い知ったか！！ これが僕の手だよ！！」

小学生低学年と言われても全く違和感がないような少女を容赦なく

打ち倒し、しかも本当に嬉しそうに大笑いをしている小学五年生の姿がそこにはあった。

その様子はとても勇敢とも叡智とも程遠く、卑劣としか言わざるを得ない。

『スバル。それはちよつと流石に……………』

「ああ、さつきから様子を見させてもらったけどそれはないねえ。」

ハレンチ……………
ハレンチ破廉恥破廉恥

「……………やっぱり？」

スバルもまずいと思ったのか倒れ込むランドマークを抱き起こす。ランドマークは愉快に目をクルクル回している。

「気失つちやつてるね」

「……………それはマズイね。休ませるところないかな。……………探す探す」

デネブはそう言って首をキョロキョロと動かす。

やがてある一つの建造物に目を釘付けにし、クルツとスバルの方向き直る。

まああそこで休ませようとか言うんだらうなあ、とスバルは思っていると案の定デネブはそう言ってきた。

確かにこの三日間、休みと言えぬ休みをしていない。

休めるなら休みたいのは山々だが、スバルはあそこだけは絶対に駄目だと思っている。

スバルがそこまで思ってしまうデネブの指差す先とはヤエバリゾー
トホテルだ。

「あそこには僕の知り合いがいるんだ。出来ることなら巻き込みたくない……………」

今回の旅は敵から逃げることも目的であり、つまりスバル達は敵に追われている状況だ。

スバル達が居るところには（対策はしているものの）敵がやってくる可能性は有りうる。

言わばスバル達は疫病神であるのだ。その中で皆には迷惑を掛けたくない。

「……………まあ、ランドマークは本当は電波体であるし、かの最強の名を持つアルテミスだ。これぐらいどうってことないかな。……

……………安心安心」

『……………今でも信じられねえけどな』

ウォーロックは悪態をつきながらスバルを見る。

まあそれに関してはスバルも全くの同感だ。

そんな中、鼓膜に聞き慣れた声が響いた。

デネブとウォーロックとランドマークを抱きかかえるスバルは後ろを見るが、そこには誰もいない。

気のせいかな、と思ったが次の瞬間、目を疑う光景が目についた。

「……………なだれ？」

スキー場の坂を激しい雪煙が上から下へと濁流のように進んでいた。スキー場で雪崩が起こるのか、とスバルは内心思いながらそれに見とれる。

しかしそれは完全にイレギュラーな動きを始める。

地面にたどり着きいても尚、その動きは止まらずこちらに這うように迫ってくる。

それはもう雪崩の動きじゃない。

ようやく三人はそれが雪崩ではないことに気づく。

「……………おい。スバル」

「何？ロツク……………」

「あれ、こつちに近づいてねえか？」

「奇遇だね。僕も……………そう思ってたんだ！！」

雪崩ではない何かがちらに迫り、逃げようとしたスバルを巻き込んできた。

抱き上げていたランドマークはその衝撃で飛んでいってしまったが、デネブが何とかそれをキャッチする。

これでランドマークは安心だ。

だがスバルはそうはいかなかった。

「イテテテテ……………。一体何なんだ！？」

体全身を雪だらけにしてスバルは顔を上げる。

そしてやけに重みを感じた。

雪だけのせいではない、と理解できた。

重みの中に僅かな温もりを感じたのだ。

「久しぶりだね！……………スバル君！」

一番そう思い、しかし望んではいなかった人と出会ってしまった。

オレンジ色のスキーウェアを着込み、茶色い髪が後頭部から飛び出している少女。

彼女の名前は滑田アイ。

星河スバルの知り合いだ。

ロックマンを殺すべく、『冬の大六角形』はコダマタウンにやって来ていた。

「クソツタレ!!! ロックマンの野郎はとっくにここから出ちまってやがるのか!!!」

プロキオンはコダマタウンを見下ろしながら悪態を付いた。その隣りに立つ一角獣の顔を持つカペラは冷静な顔をして、

「リーダー。これは我等の内部事情を知る者がバックに付いていると考えると間違いないでしょう」

「チツ、大体の見当はつく。……『夏の大三角形』だな」

暫くすると二人の前に一体の電波体が姿を現す。

真っ赤なザリガニの顔を持ち、両手の巨大なハサミが不気味に光らす電波体。

ポルツクスという名の彼は悔しそうな顔を浮かべながら、

「^{ストーリー}“電波追跡”を実行したが、反応がないぜ。奴等、尻尾を出さねえぜ。多分デネブの野郎が用心してるんだぜ」

プロキオンは強く齒軋りをし、頭をガシガシガシ! と掻きまくる。『冬の大六角形』全てを（シリウスは死亡のため除外）コダマタウ

ンに向かわせロツクマンを潰すはずが、肝心のロツクマンが居ないので意味がない。

プロキオンはリーダーとしてはとても良い訳ではない。

それは彼女自身も良く分かっていることであるし、乗り気でもなかった。

元々戦うことがプロキオンの仕事であり、このような頭を使う仕事はベテルギウスの次ならカペラが適任である。

しかしそのベテルギウスの“現状通知”によりプロキオンが次の“参謀者”の位を譲り受けたので仕方ない。

「うおおおおおおおおおおおおおおおお！！ 戦わてくれええええええええええ！！」

いつの間にかポルツクスの隣に出現したのは、大きな角を携えた鹿の顔を持つアルデバラン。

相変わらず戦うことが大好きな奴であり、実力も確かだ（プロキオンには劣る）。

しかしその低細胞から戦う時の知能は最悪で、グループの三本指には入れず四本目として甘んじている（力単体であれば三本指に入るのは確実）。

「アルデバラン、まあ落ち着こうぜ」

「フーツ、フーツ、フーツンー！！」

アルデバランはポルツクスの助言を受け入れ、鼻息を荒らげるに留めている。

プロキオンも少し落ち着くことに努めることにし、首をキョロキョロと動かしながら、

「……………リゲルは？」

「そう言えば姿が見えませんか」
「う、ここにいます……！」

四人の頭上から、か細い女の声が聞こえた。
上を見れば黒紅色くろべにの無数の正八面体が浮遊している。
更にその上、ジュゴンの顔を持つリゲルが控えめに立っていた。

「リゲル、“絶対防御”オクタヒードラを解いてはどうです？」
「は、恥ずかしいです……！」

戦闘能力が特化している者ばかりがいる『冬の大六角形』で、彼女は唯一の防御専門の電波体だ。
たった一人といっても彼女の技“絶対防御”オクタヒードラの変則的な防御により、攻撃を許したことはない。
しかし彼女は残念ながら恥ずかしがり屋の小心者であり、敵に対しても気弱な態度を取る。
いつも強気のプロキオンはそれを良くは思っていないが、それで油断する敵もいるので結果オーライと考えている。

「リゲルはどう考える？」
「ひっ！ えっ！？ あっ！ はい……。ろ、ロックマンがここにいないなら探すしかないです、よね？」

プロキオンの問いに終始ビビりまくっていたリゲルはそれ以降、“絶対防御”オクタヒードラに隠れて顔を見せなくなった。
プロキオンはとりあえず一番初めに思いついた作戦を口にすることにする。

「皆、血眼ちまなこになってロックマンを搜索してくれ。何をしてもいい。
国内だけじゃなく外国もだ。だが人間はそんなに殺すな。爺が怒る

からな」

プロキオンは大雑把な性格だ。

それは“参謀者”としては命取りではあるが、時にそれは敵にとつては嫌に思うこともあるのだ。

三十一話 食という名の欲

「久しぶりだね！……スバル君！」

雪崩の正体は天才スキー少女滑田アイであった。

これはスバルにとっては最悪の事態だ。

何せスバルは敵に狙われているのだから。

「ヤア。コンニチハ。ジャ、ボクハコノヘンデ」

スバルは適当に言っただけでその場を後にしようとするが、そう上手くもいかなかった。

アイが背中を見せたスバルの右手を掴んで引き止めたのだ。

「まあまあ、ゆっくりしていったら？ 何か倒れてる人もいるみたいだし、ね？」

「大丈夫だと思うよ。この娘は結構丈夫だから」

「いや、駄目だと思うよ。そっちの方角だと、スバル君はヒマナラを超えようとしてるんでしょ？ だったら準備万端の体制で臨まないと倒れちゃうよ」

いやそれも心配ないと思う、という言葉を通してスバルは押し殺した。

アイ視点からだと、ゴスロリや半袖シャツ一枚の女二人が山を超えるのを無理だと思うだろう。

だが彼女達は電波体なのだ、山を超えるぐらいどうってことない。しかしだからと言ってこのまま押通るのも気が引ける。

「……そうだね。お腹も空いたし、グルメタウンで何か食べようかな……」

「め、飯か!? 食わせる!!」

「うお! 飯に釣られてアルマイルが起きた! ……驚愕驚愕」

「アハハハ。スバル君の友達って面白い人が多いね。あっ……そう言えばゴン太君達は?」

その言葉にスバルは顔を引き攣らせる。

まさか『僕は家出したんだ。テヘ』じゃ済まされないし、どうやって答えようかと考えていると、アイが思いついたようにポンっと自分の掌を叩いた。

「分かった! 今回は家族旅行なんですよ? こっちがお母さんでこっちが妹さんかな?」

「……う、うん。そうそう、家族」

「私は母親、か。……ひきつひきよ比興比興」

「私はすばるの妹なのか……。屈辱的だ……」

とりあえずこれでアイの追求は免れたとスバルは安堵の息をつく。

「じゃ! 私はまだスキーの練習してるから、困ったことがあったら呼んでね!」

アイはそう言い残し、走ってホテルに入って行ってしまった。

ここからリフトに乗るにはホテルを経由しないと行けないからだ。まあそれはさておき、と行った感じでスバルは二人に向き合う。

「お腹減ったし、グルメタウン行っていい?」

「……」

地球を三度救った英雄も食という欲には勝てない。

夏の日差しが滑田アイの皮膚を襲う。

その日差しは遥か上に存在する太陽からのみだけではなく、日差しが下の雪に反射して上からも下からも日差しが刺す。

雪の中にいるがその日差しの中では結構暑い。

スキーウェアは汗で蒸れるが、防水透湿素材で出来ているためそれはすぐ外に排出される。

彼女は一度大きく息を吸う、大自然の味がした。

そうこの感覚。これがスキー特有の感覚だ。

彼女はそれを存分に味わうと、一気に滑り出した。

シヤアアアアア！ とスキー板のエッジが細かい雪煙を散らす。

冷気が顔の肌を刺すが、全く寒さや痛みは感じなかった。

今は全神経を滑ることに注いでいるのだ。

彼女は一気に腰を屈め、スピードを上げていく。

景色が目まぐるしく変わっていく。

(そう。このタイミング………………。行くぞ!!！)

彼女はそのスピードを一切殺さずに跳んだ。

それは空中で止まっているかのような錯覚を起こす、が着地する際に失敗し転んでしまう。

「イテテ、やっぱり新技は難しいな……」

彼女はこの技を練習しているが成功したため験しがない。
失敗ばかりが募っていく。
しかし彼女は諦めずに立ち上がる。

「よしっ、もう一回！」

彼女は意気込み、もう一度滑り始めた。

「……………」

彼女は気づいていなかった。

上からじっと自分を見る者がいることに……。

三十二話 スキー

空腹とは最高の調味料というが、それは迷信ではなく本当のことである。とスバルは理解した。

ここはグルメタウン。

ここでは安く美味しいモノが食べられるというゴン太が喜びそうな場所だ。

普段スバルはそこまでご飯を食べない。しかも普通の人より更にご飯を食べない、所謂小食者なのだ。

彼は今、肉汁が溢れ出しそうな骨付き肉にガブリツ！ とかぶりついていた。

その大きさといったら自分の顔よりも大きく、更に濃い味付けが施されており、マウンテンゴリラがこれを一個だけ食べてもお腹一杯になりそうなそんな力オスな骨付き肉だ。

しかもこのポリウムでこの骨付き肉は最高の安さ。これはスバルにとって大いに助かる。

しかしスバルがそんな肉を食べて大丈夫なのかと思う人もいるかもしれない、が意外にも既にその骨付き肉は半分以上食されていた。これは空腹というモノが後押ししてくれたおかげだ。

『お前がこんなに食べてるのを見るのは初めてだ』

「僕自身もこんなに食べるのは初めてだよ」

スバルはそう言っている間にもまた骨付き肉にかぶりつく。

しかしスバルは何か引つ掛かっていた。

肉も美味しいのだが、何より隣を見れば

「うむ。この骨付き肉は美味しいな」

「これは私好みの味付けだ。……………美味美味」

ランドマークとデネブがスバルと同じく骨付き肉にかぶりついているのだ。

「何で君達が食べてるの!? 電波体でしょ!？」

「ああ。食べなくてもいいけど、食べてもいい。何より舌が喜ぶ。

…………… 娯楽娯楽」

「食べなくていいなら、食べないですよ！ お金もそんなにないんだからさっ！」

まったくモー、と頬を膨らますスバルはそこである疑問が思い浮かぶ。

「ウォーロックもご飯、食べられるの？」

『食べねえよ』

あれじゃあ何で？ とスバルは首を横に傾けていると、デネブがいつになく真面目な顔で、

「私達は普通の電波体と作りが違っただよ。…………… 特異特異」

デネブはそれ以降、スバルの質問にも口を開かなかった。

ただ肉を食べてる時、終始デネブは悲しそうな顔をしていたのがスバルの心に残ったのだった。

数時間後、スバル達一同はこれでもか！ というぐらいにご飯を胃に注ぎ込んだ。

おかげで満足を得たスバルだったが、ランドマークとデネブはまだ満足していないようだった（果たして満足することがあるのか？）。そんな彼等がすることは再び歩くことしかないわけだが、突然ランドマークが『なあすばる、スキーをしたくないか？ 私はどちらでもいいが、すばるがやりたいと言うのなら私も一緒にスキーをしてあげてもいいぞ』と遠回しにスキーがしたいと言ってきたので、彼等はグルメタウンの奥のリフトに列に並んでいた。

「何でデネブもやろうとするのさっ!？」

「私もやってみたいんだ。……………興味興味」

デネブは長い紫色の髪をニット帽に収めようと四苦八苦しながら答える。

背中には未だ三本の大きなランスが担がれている。

しかし顔は中々良いので、スキー姿は似合っていた。

「ふむ。私はゴスロリ万歳なのだが、これは地味だな……………」

ランドマークは地味な赤一色のスキーウェアを抓りながら呟く。

あまりの地味さに気に入らない様子、しかもゴスロリを捨てきれずレンタルのスキーウェアに勝手にいくつものリボンが付けられていた。

しかし元々可愛い顔立ちをしているので似合っている。

「レンタル料とかお金もかかるのになあ……………」

大人な発言をしているスバルは鬱な顔を露わにし、深いため息をつく。

コダマタウンを出てからスバルはお金の心配をする機会が増えたような気がする。

そんなことを考えているうちにリフトはスバル達の番になった。

三人は意外に器用にスキーを乗りこなし、難なくリフトの乗ることに成功した。

するとデネブは『スキーは初めてじゃないからね……………上手上手』というので、それも肯けた。

ので一気にプロコースの一番上の頂上に行くことにした。

「少し、雪が激しくなってきたな……………身震身震」

スバルもそれには同感なので額に付けられていたゴーグルを目に装着した。

雪の白一面だった世界が一瞬でゴーグルの赤色に染められていく。

スバルはゴーグルの装着具合を確かめながら、ハンターを見る。

ハンターのディスプレイに映っている天気予報では驚くぐらいの快晴だ。

「……………天気予報では快晴の筈なんだけどね」

ピーッ！ と静かな雪山に騒がしい警報が鳴り響く。

ガクンッ、とリフトがその動きを止めた。

反動でユラユラとリフトが前後に揺れる。

突然のことにランドマークは恐怖で固まり、デネブは何事もないように微笑を浮かべる。

吹雪により大変強い風が吹いておりますので、風が弱くなるまでリフトを一時停止させていただきます。大変申し訳ありませんが、ご理解とご協力をどうぞよろしくお願いします

ワイザードの抑揚のない声がスピーカー越しに響いた。

これにはランドマークは足をバタバタと振り、怒りを露にする。

「何がご理解だ！ 理解などしたくはない！ 私は早く滑りたいのだ！！」

「ランドマークちゃん！ 暴れるとリフトが揺れるから！ 少し落ち着いて！」

スバルはバタバタと暴れるランドマークを宥める。

余程滑りたかつたらしく、ランドマークはその動きを止めない。

もうその揺れといったら軽くマグニチュード5……ぐらいだ、多分。

「うおおおおおおおお！？ 揺れる！ 揺れるうううう！！！」

『グフツ……！ ププププ！ ヒーツ！ か、勘弁してくれええ

……！！』

スバルは激しくなる揺れに恐怖し、ウォーロックはスバルの反応が余程面白いらしく、必死に笑いを堪えていた（堪えられていない）。デネブはこの程度の揺れは大丈夫らしく、顔色一つ変えない。

するとランドマークの願いが叶ったのか、警報が鳴ると再びリフトが動き出す。

このままお客を残すわけにもいかないと考えたのだろう。

相変わらず吹雪は吹いていたものの、風は弱まっているのでリフトはそのまま押し通る。

揺れていたものの目的地にはたどり着いた。

三人はスキー板の具合を確かめながら滑り出しのタイミングを探る。

スバルはランドマークの心配をするが、

「まっ、大丈夫だよな」

ランドマークのことはデネブに任せて、自分のことを心配しようとしてスバルは思った。

自分もさほどスキー経験があるわけではなく、特別うまいわけでもない、それに加えてのプロコースだ。自分のことで精一杯になるのは当然のことだ。

「すばる、先行ってるぞ」

「うん、大丈夫　　ってええ!？」

デネブと共に坂を駆け下りたランドマークはスバルの心配したとおりにはならなかった。

普段のゆっくりとした動きが嘘かのように見事な滑りを見せてくれた。

啞然とするスバルが気づいた頃には、既にそこにはデネブとランドマークの姿はなかった。

プロコースなど滅多に人が来ないからか、その場はスバルたった一人となってしまうた。

『なんか……………寂しいな』

「……………否定はしないよ」

スバルは渋々その坂を滑り始める。
流石プロコース、容赦ない急な坂。

「ランドマークちゃん達が滑っていたと思うと、とんでもないね」

ぼやきながらも転ばないようにゆっくりと滑っていく。

『ゆっくり滑ってスキーの意味あんのか？』

「転ぶと痛いしね」

何とかプロコースを転ばずに一般コースにたどり着いた。

何やら耳をすませば『スゲエー。あの二人組めっちゃスキー上手いぞ』『プロなのかなあ？』 とスバルには見覚えがありありの二人の噂を耳にする。

『凄い噂になってんぞ』

「……………」

スバルは答えなかった。

悔しいわけではない、考えに耽っていたのだ。

「デネブの言うことが正しければさ……………」

唐突にスバルはウォーロックに言葉を投げかけた。

ウォーロックは言葉のキャッチボールが成り立っていないことに腹が立つが、真面目な顔をするスバルを察し、何も言わなかった。

「ランドマークちゃんはアルテミスっていう……………、電波体なんだよね？」

『うん？ ああ、FM星の救世主だな。正しければ、な』

そうだよね、とスバルは頷き、

「でさあ、地球以外でスキーってあるの？」

『んなもんあるわけねえだろ』

「じゃあさ、初体験のスキーが何であんなに上手いの？」
『素質があつたんじゃねえのか？』

スバルは黙りこくる。

スキーを滑ることも忘れ、考えに耽る。

「考え過ぎ、かなあ？」

『きつとそうだろ。そんなことよりさつさと滑ろうぜ』

そうだね……、とどうにも煮え切らない様子のスバルはそのまま考えに没頭しながら平面の場所を滑る。

考えながら滑っていたものの慈悲の心があるためか、しっかりと人を交わしていく。

そこは『星河スバル』らしいの一言だ。

しかしぶつかりそうな人には気づけたスバルだったが、ある一つのことには気づけない。

本当に気づくべきところは周りの人の視線の先。

その視線の先には一つの、大きな雪玉。

唐突なことに周りの人は叫びという行為すら忘れる。

その場に気づいていないのはスバル、ただ一人。

キヤー！！ と漸く一人の女が叫ぶ。

これにはスバルも虚を抜かれ、次に周りの人の視線が自分の頭上にあることに気づいた。

スバルは上を見上げた、と同時に一つの大きな雪玉が彼を押しつぶした。

「グハ！ こんなところでロックマンのガキに会えるとは俺は幸運だな」

次に上から現れたのは巨大な 雪男。

雪男はその巨大な体を 先程スバルに激突した雪玉に 押し付けた。

一般コースの人々は突然現れた雪男とたった今踏みつけられた少年のことを考え恐怖し、叫び声を上げながら一斉に坂を降りた。

その場にいるのは雪男と雪玉と更に雪男に潰されるスバルだけとなった。

「グハ！ お前には色々恨みがある。リゾートホテルを奪う時！

インサイダー取引の時！！ その他諸々！！！！」

「……………、そんなこと知ったこっちゃないよ」

雪玉の下から押しつぶされたはずのスバルの声が聞こえる。

これには雪男も驚愕を顔に浮かべる。

「悪いけど僕のパートナーは……………」

『そんなヤワじゃねえんだ！！』

雪玉が粉碎すると同時に、雪玉から飛び出したウォーロックのビーストスイングが雪男に炸裂する。

「グオア……………！？」

雪男は胸に刻まれた傷を抑えながら呻き声を上げる。

雪玉からはウォーロックに続いて雪まみれのスバルが出てきた。

「誰かと思えばイエティ・ブリザードか……………何の用？」

「グハハ！ 俺にそんな口を聞いていいのか？」

なに？ とスバルが眉を顰める。
イエティ・ブリザードは意地悪くニヤリと笑みを浮かべると、

「滑田アイ。……何処にいったんだろうな？」

「！？ まさか……………！」

ああ、とイエティ・ブリザードは一度言葉を切って、

「人質として俺が拘束している」

『……………卑怯だな』

「卑怯、違うな。賢いんだ」

スバルは頭が沸騰する。目の前の相手に怒りを覚えている。

しかし頭の中は冷静で、ある一つのことを思い出されていた。

それは三日前、旅立つときにテネブが念を入れて言ってきた言葉。

『電波変換をするな』

今、スバル達は旅をしている。

それはいくつもの目的があるがその中の一つ、敵からの攻撃を事前
に防ぐ、というのがある。

電波変換をすると一発で居場所が特定されてしまったため先程言った
ことが約束されている。

しかし今それを守れば、滑田アイはどうなる？

答えはすぐに出た、間違いなく滑田アイは生きては帰れない。

「元々コダマタウンを出たのは、皆に被害が及ばないためだ。その
ための旅だ。でもその旅の約束が……結果として僕の友達に被害が
及ぶのなら、僕はその約束を守らない！！」

スバルは躊躇いなく電波変換を行なった。

後悔はしなかった。

敵に見つかってしまっても構わないと思った。

友達を助けるための行為だ。

それに後悔するような弱い心をスバルは持ち合わせてなんかいない。

スバルは今、全力で眼前の敵を倒すと心に刻み込んだ。

三十三話 倒す、殺す

ロックマンとイエティ・ブリザードは吹雪が吹く中、対峙していた。まず周波数などから見て圧倒的にイエティ・ブリザードはロックマンを下回っている。

それだけを見ればロックマンの勝利は確実だ。

しかしイエティ・ブリザードの言うことが正しければロックマンの友人、滑田アイを人質に取られている。

それはロックマンにとって、とても重い足枷だ。

なので無理な攻撃はせず相手の出方を見計らい、ただただ対峙する。対してのイエティ・ブリザードは何の心配もせず戦うことができる。ロックマンとの戦闘能力の違いは重々承知している。

だからこそ、その差を縮めるために最終手段である滑田アイを人質に取った。

これは完全にイエティ・ブリザードの優勢と違って間違いない。

「ユキダマラッシュー!!」

「ッ!」

ロックマンはその雪玉をギリギリの位置で交わす。

「イエティ・ブリザード! アイちゃんを何処に隠した!」

「グハ! 切り札の場所を安安と教えるわけねえだろ!」

まあね、とロックマンは苦笑いをする。

それと同時にこのままではまずい、とロックマンは思った。

アイの居場所を掴めていない今、無闇に攻撃して相手を怒らすようなことをしたくない。

「難しい状況だね……」
『確かに、な。相手も何時までもこんな小競り合いに乗ってくれ
か分かんねえしな……』

ロックマンは微妙な戦闘を行なっている。
殆どは相手の攻撃を回避し、自分からの攻撃は交わしきれない攻撃
との相殺のみ使用する。
自分からは決して攻撃しない。

(このままじゃいけない……。あいつを倒さなければアイちゃんを
救うことはできないんだ……。！)

ロックマンはある一つの対策を講じることを決意する。
それはチャンスは一度しかない。
しかしやるしかない。

「ビクスタンプ!!」
「……、」

ここでロックマンは回避行動を取らなかった。
イエティ・ブリザードはニヤリと、不気味な勝ち誇ったような顔を
浮かべるとその速度を更に早めた。
その技、ビクスタンプは確かにロックマンに激突した。
しかし、感触は感じられない。
しかもロックマンの姿が煙と共に姿を消した。

「チッ！　ヘンゲノジュツか!？」
「チッ！　気づくのが早い!」

ロックマンはイエティ・ブリザードとは違った舌打ちをしながら、その巨体を切り裂く。
グウア、という呻き声が上げられるがロックマンはその攻撃を止めることはない。

全くその速さを殺さずにバトルカード・ブレイクサーベルで追い打ちをかけるように更に斬る。

その巨体に違たがわず頑丈なもので、中タイエティ・ブリザードは倒れようともしなかった。

更に一閃！ だが

「グハアアアアアアアアアアアア！！」

その動きが震えるほどに咆哮を上げながらイエティ・ブリザードは頭上のウェーブロードに跳んだ。

まずい！ とロックマンは血の気が引いた。

講じた対策とは相手に反撃の隙も与えず一気にカタをつけるというものだったが、予想外にイエティ・ブリザードの体は頑丈でケリはつかなかった、この対策は失敗に終わったのだ。

つまり

「滑田アイ、どうなってもいいんだな？」

「ッ！！」

ロックマンは殆ど反射で跳んだ。

しかしイエティ・ブリザードの方が早い。

「クソッ！」

一歩及ばずイエティ・ブリザードは更に上に跳び背中を見せて逃げ始めた。

ロックマンはイエティ・ブリザードの背中を見据える。
絶対に彼より早く滑田アイを助けなければいけない。

「クソッ！ クソッ！ クソッ！ クソッ！ クソッ！」

しかし吹雪の中ではイエティ・ブリザードの方が早かった。
彼の背中はどうもどんどん小さくなっていく。

また失う、恐怖が彼を襲った。
目尻には涙すら浮かぶ。

「失いたくないのに、僕のせいでまた失う！！」

ロックマンはウェーブロードを強く踏みしめた。

たどり着いたのは雪山の頂上。

そこはプロコースの更の上、スキーコース外の場所。

雪は整えられておらず、凸凹でこぼことしていた。

しかし吹雪は止んでおり視界は良好、間近の太陽の光は思わず目蓋を閉じさせる。

全くの絶景、目の前にイエティ・ブリザードと人質に取られている滑田アイさえ居なければロックマンはそう気づけただろう。

「グハツハハー！ これ以上近づけばコイツの命がないってことは分かるよな？」

「クッ……」

ロックマンは思わず顔を顰める。

イエティ・ブリザードはガツチリとアイを押さえつけている。

今回は攻撃すらも許されない。

ロックマンはイエティ・ブリザードによって投げられた雪玉によっ

て後方に吹っ飛ばされる。

「ロックマン!!!」

「おおっと、少し大人しくしてもらおうか?」

アイはどうやら意識があるらしい。

それによってロックマンは再び立ち上がる。

友達の前で倒れるわけにはいかない。

しかし容赦なく雪玉は何発も何発も何発も何発も、投げられる。

スバルは相殺もせず、ただそれらを全て体で受け止めた。

口からは血がうつすらと滲んでいた。

遂にロックマンは地面に平伏せた。

耳にはイエティ・ブリザードの笑い声が聞こえる。

何とかその鼻をへし折ってやりたいが、ロックマンには立ち上がる気力すらも残っていない。

「無様だね。ロックマン」

その声はイエティ・ブリザードから発せられたものじゃない、とすぐにロックマンは分かった。

何故ならその声の主は後に『……………醜態醜態』という言葉を二回重ねたからだ。

「だ、誰だ!?!」

思わぬ新たな乱入者にイエティ・ブリザードは驚きを隠せない。

首をキョロキョロと動かし、その乱入者の身を確かめようとするが全くそれらしきものが見当たることがない。

「私の名前はデネブ。『夏の大三角形』の一人、“先陣者”として先陣を駆ける戦士だ。……………紹介紹介」

言い終える全くの同時、イエティ・ブリザードの腹部が容赦なく、貫かれた。

貫いたのは一本のランス。

デネブがいつも背負っている三本のランスの内的一本。

そのランスは人質に取られるアイに掠りもせず、その間を縫うように投げられていた。

「グウア……………」

痛みよりも驚きが上回っていたと思う。

イエティ・ブリザードは自分の腹部を通して地面に刺されたランスにより身動きを取ることができなかった。

そしてすぐに痛みが彼を襲う。

「グウア！ い、痛てえ……………！！」

「うん。分かつてる。……………承知承知」

その痛みを分かっているが、デネブは容赦ということをしなかった。上から落下してきたデネブはイエティ・ブリザードに突き刺さるランスの手持ち部分に体重を乗せ、更に腹部に食い込ませた。

ロックマンは唐突に巻き起こった目の前のことに愕然とし、次に腹部から滴り落ちる血痕に顔を顰めた。

ロックマンは今まで敵を倒してきた、殺してはこなかった。だが今、目の前に起きているのは確実に殺しにいつている。

そう考えた瞬間、ロックマンは寒気がした。

それと同時に激しい怒りを覚えた。

「で、デネブ！ もう……良いよ……」

「良い？ 良くはないよ、スバ……、ロックマン。それと勝手に電波変換してまずいじゃない。……危険危険」

「……た、助けてくれ……！」

腹部を貫かれ、呻き声を上げながら弱々しく足掻くイエティ・ブリザードに対してデネブはランスを握る手を強めて黙らせた。

それに比例するかのようイエティ・ブリザードの顔は激痛に歪んでいく。

「もう人質も解放された！ これ以上そいつを傷つける必要なんかないじゃないか!？」

「いや、こいつを放っておいたら後々面倒でしょう？ また君を狙いにくるかもしれないしね。………予防予防」

「もういいです!!」

その叫びはいつの間にかイエティ・ブリザードから解放されたアイが発していた。

デネブはまさか最も酷い目にあつた少女から言われるとは思っていなかったようで、少々驚いていた。

「もう十分です……！ 私もこの通り無事でしたし……もう大丈夫ですから、ね？」

「……そう。………妥協妥協」

デネブはそのランスをイエティ・ブリザードから引き抜くと、淡い緑色を発しながら、両手を傷口に翳す。

「私の専門じゃないけど、死なない程度には応急処置はしてやった。………不承不承」

電波変換は解除され、ピンクのスーツを着込むゴリに戻っていく。傷は塞がれたものの、そのスーツの腹部は未だ赤く染まっていた。

「人質ちゃん、ここでじっとしときな。その内救助隊が助けに来るから。……………安心安心」

デネブはアイにそう言うのとロックマンに向き直る。

「君が電波変換したおかげで、多分……………いや、確実に場所は特定された。早くここからずらかろう。……………逃走逃走」

「うん……………ごめんね」
「過ぎてしまったことを悔やまない。……………切り替え切り替え」

ロックマンは頷き、その場を去ろうとする。

だが後ろから『待つて』、とアイに声を掛けられたためロックマンはその行動を中止する。

「な、なんでしよう?」

「うん。ありがとね……………ロックマン」

「えっ!?! ああ、うん……………」

そう言い残すとロックマンはデネブと共に周波数を変え、姿を消した。

アイは誰もいなくなった場所を見て、一言。

「ありがとね……………スバル君」

「お前等何、漫才やってんだ？」

ランドマークは、スバルを介抱するウォーロックを見ながら呟いた。珍しく彼女は呆気にとられている。

“先陣者”だからか先陣を切るデネブは立ち止まった三人に気づくと、

「ほらっ遊んでないで、早く行かないと死ぬぞ。……………マツマツ本気本気」

するとスバルはウォーロックシュ（ウォーロック）の温もりを感じながらスクツと立ち上がる。

「いや、君達は良いかも知れないけど僕自身が結構リアルに危ない状態なんだよ」

『確かに人間のスバルには一晩でこの山を越えるなんてことできねえよ』

二人の言葉を聞いたデネブは、やれやれ、と言ったように首を左右に振って地味にバカにする。

「一度ヒマナラ村に行く。こんなクソデカイ山、一晩で登れるわけないでしょ。……………不可能不可能」

その瞬間、スバルはヘナヘナと力が抜けた。

「良かった〜。もう死にそうなのに、これ以上山を登るなんてことできないもん」

「スバル君は弱すぎる。少し体を鍛えたら？……………特訓特訓」

冗談じゃない、とスバルはそれを拒否する。

スバルは運動は不得意ではないが、好きではない。よって鍛えようとは思わないのだ。今はそんなことよりもスバルは気になることが一つあった。

「……………敵に僕達の居場所を特定されてるのにそんなところに行つて大丈夫なの？」

心優しきスバルは他の人に迷惑が掛かるのを良しとしない。自分達が来てしまったために、ヒマナラ村が被害を受けることをスバルは気にしているのだ。

「だったら尚更良いね。……………最高最高」

『どういうことだ？』

「ヒマナラ村には“四神”の一人、海神が居るって言う情報が入ったんだ。……………確認確認」

「そ、そうなの!？」

スバル達の旅の理由の一つ、“四神”への協力を求めるが成されようとしている。

三日目にして確かな成果である。

「海神があゝ。どんな人なのか楽しみだなあ」

「あんまり期待しないほうが良いと思うよ。大酒飲みだし。……………」

…中毒中毒」

「ええー、タチ悪いなあ……………」

「でも実力は確かだ。協力してくれたら大きな戦力アップになる。

……………期待期待」

デネブは紫色の髪を弄くりながら呟いた。

全く話についていけないランドマークはつまらなそうに口を尖らせ

ながら、

「すばる」

「何？」

「爆発しろ！」

「いひゃい！ なんれ！？」

思いつきりスバルの頬を抓る。

スバルは冷たさから固まっていた頬を抓られる痛みを堪えながら、
両手をパタパタと動かす。

見かねたデネブはランドマークを引き剥がし、仲介してやる。

「まあまあランドマーク先導巫女、止めてやってくれよ。……………中断中断」

「離せ離せ離せ離せ離せ！」

「一体何なんだ……………」

『まあ、もうちょっと構って欲しいってことだろ？』

「？ たったそれだけで、オーバーだなあ」

「やつぱ、やつちゃっていいよ。……………鈍感鈍感」

「ちよっ！ 何でランドマークちゃんを放しちゃうの！？ あ！

あー、ちよっと止め 痛い痛いいいい！！」

雪山の中で彼等三人は楽しそうに山を登る。

数時間後、スバル達は何事もなくヒマナラ村に辿り着いた。

日は地平線に落ちる前に辿り着いて本当に良かったと三人にして四人は思い、今晚泊めてもらう宿はないかと探した。

しかしヒマナラ村に観光名所があるわけでもなく、場所が場所なので宿と言うものがなかった。

となれば『民宿だ！ 民宿をしよう！』と芸能人が宿を決めずに田舎へ旅に出て、地元の人家に宿泊させてもらうというテレビ番組を想起させるようなことをウォーロックが言ったので、ヒマナラ村の家を転々としていた三人だったが、突然の訪問に加え背中にランスを二本背負う女というあまり健全とは言えない人がいるので、民宿を断れ続けていた。

そして漸く行き着いた先が、ヒマナラ村の村長の家だ。そこでデネブが絶望の絶叫を上げていた。

「で、出てったあー！？ ………………絶叫絶叫」

デネブはらしくもなく声を荒げた。

ああ、と村長は申し訳なさそうに首を縦に振る。聞いたのは、海神の行方について。

ここに来たのは海神がここに滞在している情報があったためだ。だが村長の話だと数日前に海神はここを飛び出したらしいのだ。まさに入れ替わり、運が悪いものだ。

「となればここに居る意味もなくなった。二人とも、行くぞ。

……………早急早急」

「ええー、また登るのあー？」

「私はまだ余裕だぞ」

「君達、また山を登るのは止めたほうがいい。日が沈んで視界一面

真つ暗、足を滑らせてお陀仏だぞ」

大丈夫だと思えますよ、とスバルは口に出そうとしたが、村長からはか弱き女二人とか細い男というコンビだったということを出し止めた。

「まあ、今日は休んで明日、出発しなさい」

村長が黙る三人に言ってやる。

スバルは返答に困ったので、ランドマークとデネブと肩を組み村長に背を向け相談に入る。

「……………どうする？」

「もう泊まるというのはどうだ？」

「うん。居場所が特定されてたらここは危ないけど、今から登って敵と遭遇して戦うっていうのも雪崩の危険があって危ないな……………」

……………五分五分」

『じゃあ泊まっちゃうおうぜ。俺とデネブで徹夜で護衛してよお』

「私とお前で？……………質問質問」

『おお』

「いいかもね。デネブ強いし」

「ええ〜、やっぱりい〜……………微笑微笑」

微笑を通り越し満面の笑みを剥き出しにするデネブを尻目にスバルは村長に視線を移し、

「じゃあ、お世話になります？」

「ああ、まあまずは風呂にでも入りなさい」

そう言つと村長はソファから立ち上がり、奥の部屋に声を掛ける。

すると部屋のドアが開き、出てきたのは一人の少女。
背はスバルよりも大きく、室内なのにニット帽を被っている。
彼女はこちらに視線を当てると頭を下げながら、

「ラーナです。ゆっくりしてってくださいね」

「僕は星河スバル。で、こっちがランドマークちゃんです。こっちがデ
ネブ」

「……………よろしくだ」

「……………宜しく宜しく」

ラーナはお客様三人の名前を覚えると、営業スマイルを浮かべなが
ら、

「お風呂ですよね？　こちらになります」

スバル、ランドマーク、デネブの三人は、先導してその部屋を後に
したラーナの後についていく。

三十五話 銭湯で戦闘

ヒマナラ村は、ヒマナラの山頂付近にあるからか人口が大変少ない。家は手と足の指で数えられるほどしかなく、若い者は山を下り都会で働きに出ているためここには年寄りや女子供しか居ない。所謂、過疎かそというやつである。

『…………ジジイばっかだな』
「…………うん」

村長に風呂に入るといいと勧められ、村長の孫ラーナに連れて行かれた先は何故か外だった。

そして徒歩三分ぐらいで辿り着いたのは温泉だった。

てつきり部屋に設置されているタイプのものかと思っていた三人は意外そうに顔をキョトンとさせた。

そして男、女に分かれたノレンでスバルはランドマーク、デネブ、ラーナと別れた。

ラーナも女のノレンを潜ったという事は彼女も温泉に入るのである。

そしてそのまま今の状態…………つまり温泉に入っているという事になったのである。

「うううう…………温泉は良いけど、寒すぎる…………!!」

壁はある、屋根もある。

だが設計者が何を考えたのか、外の景色が見えるように上下左右前後の壁の内、前の壁が割り貫かれていた。

ここはヒマナラ山脈の山頂付近であるヒマナラ村、当然寒い。

温泉内はあったかいものの、いざ体を洗おうと浴槽から出たら最後、

湯で温められた体は即効で冷気に晒され凍えることだろう。

「さてどうしよう?」

スバルは温泉から出れずに居た。

周りの常連フロはどのようにして浴槽から出るのか実際に目に入りたいものだが、年を取っているからか(?)中々浴槽から出ようとはしない。

「くっ……! 江戸っ子め……!!」

『とりあえず出る方法をその辺のジジイに聞けばいいだろ?』

確かにそうだなあ、とスバルは思い湯船に浸かるお爺さん達に視線を移す。

お爺さんの合計人数は三人、一人はガリ細で、一人は体全身に傷をつけた不良っぽいので、もう一人はハゲ頭が目立つお爺さん。

どのお爺さんが話しかけやすいかなあ、とスバルは考えているとお爺さんの一人、ガリ細が話し掛けて来た。

「君の連れの子二人? 可愛いね。僕達ヒマナラ村には婆さんしかいないから華がないんだよね。あの面子の訪問は嬉しいよ」

「そうっすかねえ」

ガリ細のお爺さんの口は止まらない。

ずっと話しているのは女の話ばかり、何故か自分の婚約者の婆さんとの出会いまで話してくれた。

すると見かねたのか不良のお爺さんがこちらに寄ってきて、ガリ細に強い視線をぶつけ黙らせた。

そろそろ爺臭い恋バナに飽きてきていたので内心不良お爺さんに感謝しながら、視線を合わせる。

すると不良お爺さんがニヤリと口の端を釣り上げると、

「あれは俺がまだ若い頃、ある一人の女性と会

(こつちも恋バナ来たアアー……!)

今度は不良お爺さんが望んでもいないのに昔の恋バナを話してくれた。

ガリ細のお爺さんが眼をキラキラ輝かせながらそれを聞いていてるところを見ると、ガリ細はかなりの恋バナ好きのようである。

「あまりの美しさに俺がバイクのツーリングに誘ってやると、その女は『バイクよりも私の上に乗らない?』と逆に誘惑されちまったんだ」

(下ネタ来たアアー……!)

もう恋バナではなく、下ネタに移っていく。

もちろんそれもスバルは望んでいない。

するとハゲ頭のお爺さんが見かねたようにこちらに近寄ってきた。

彼は不良お爺さんを片手で制すると、スバルに視線を移した。

そして彼はいやらしく微笑みながら、

「恋バナより俺と一緒に……女風呂を覗かないか?」

「名案だ!」

「いいねえ! いいねえ!」

「……、」

「……、」

何言ってるんだ、コイツ……とスバルは脱力しきつた顔をする。

ヒマナラ村のお爺さんは皆、変態のような気がする。

この人たちだけで判断してはいけませんが、スバルはそう思ってしま

った。

「君も参加しないか？」

「遠慮しときます」

「分かった。早速、作戦の準備に入ろう」

（僕、参加しない運びだよな？）

ハゲ頭が不敵に笑みを浮かべ、ガリ細と不良のお爺さんはゴクリツと喉を鳴らす。

そしてハゲ頭は閉じていた眼を勢いよく開けたと思えば、告げた。

「作戦は突撃あるのみ！ 離散！」

「「イエッサー！」」

湯船の中で離散した三人は一気に湯船から飛び出す。

ガリ細はその体重の軽さを利用し、壁を攀じ登る。

男湯と女湯は壁で阻まれているものの天上付近でそれは途切れている、謂わば繋がっている、それを利用した作戦だ。

対しての不良はガリ細の様子を見守り、これからの出方について考える。

何故か、スバルの腕を掴みながら。

「なっ！ ななななな何で、ぼぼぼ僕まで!？」

「安心しろ！ お前の心の声は読み取った！」

「よ、よよよよ読み取って、ななななないですって!!
ってどうか……さささ、寒い!!」

湯船から飛び出すと一気に冷気により体温を持っていかれる感覚がした。

だが何故か不良は寒そうにしなかった。

これは歴戦の猛者だからなのか、それとも唯単に女風呂を覗くと言う欲望による力なのか不明である。

「ふむ……、まずガリ細が特攻したか……。一先ず様子見、だな」
「……………」

暫くすると、グハッ！ という悲痛な叫びがすると同時に、ガリ細が上から落下してきた。
すぐさま不良は近寄って、ガリ細を介抱してやる。

「ガリ細！ 大丈夫か！？」
「グッ……………」

スバルには思い当たる節がある単語を吐いたガリ細は首をガクツ！と落とし、気を失った。

「（デネブだね？ 容赦ないね…………）」

「（奴はあれでも女の端くれだからな。気をつけるよ。スバル）」
ヤル気ないよ、とスバルはウォーロックに返す。
不良は気絶したガリ細に敬礼すると、背を向け自前の石罅を取り出した。

石罅も自前と言うところが銭湯みたいだった。

「少年。俺はこいつの仇を討つぞ」

「そうっすかあ」

「だが敵は思った以上に厄介だ。これは完全に我々の劣勢だ」

『我々』に自分が入っていないことをスバルは祈る。

「しかし上には上が居る。あの女どもには教えてやらないといけない」

言い終えると不良は右手に持つ石鹼を女湯に向けて投げた。滑らかな弧を描きながらそれは見事に女湯に侵入を成功する。

「今だ！ 奴等が石鹼に気を取られている内に侵入だ！」

「えっ！？ 僕もですかー！？」

不良はもう年がいつているにも拘らず飛び抜けた跳躍力を見せ付ける。

床を蹴り、次に壁を蹴り、再び壁を蹴り飛ばしの三段ジャンプで男湯と女湯の狭間に侵入することに成功する。

「やってくると思ってたよ。……………的中的中」

不良と不良に引っ張られるスバルの眼に入ったのは、紫色の美しい髪を持ったデネブ。

左手には一本のランス、右手には二本のランスが握られている。

そして肝心の体はタオルによってしっかりとガードされていた。

しかし露出が高いのは事実であり、彼女の隠れた巨乳、つまり隠れ巨乳がタオルから溢れ出さんとしている。

普通の男ならこれで満足する者が大多数であろうが、この不良のお爺さんはこの程度では満足しない。

「ほう……………待ち伏せ、か。女なら女らしく湯船に浸かり『キヤー、エッチ！』とでも言っておけば良いもの！」

「残念ながら私はそんなオーソドックスじゃないのでね！……………」

…異端異端」

二人は言葉を交え、そして戦闘に入る。
不良は拳を、そしてデネブはランスを、相手に振るう。
その衝突の勝者はデネブ。

不良は成す術もなく、男湯へと落下していく。

「ああ……、不良のお爺さん〜」

「スバル君。……………呼集呼集」

男湯方面に落下した不良のお爺さんを案ずるスバルは、勝者デネブによって呼ばれる。

「覗きは良くないな。……………禁物禁物」

「僕、覗きなんかしてないよ！」

『いや、スバル。この状況で信じてくれる訳はないだろ……………』

「その通り。事情は何にせよ、私からは君はお爺さんと共犯者の変態クソ虫の覗き魔にしか見えない訳よ。……………変態変態」

実は被害者であるスバルであったが、男湯と女湯の狭間の空間に来てしまつてはフォローの仕様がなない。

ギリギリとランスを両手にスバルとの間合いを詰めるデネブの眼は本気だつた。

万事休すか、と両目を瞑るスバル、だが、

「まだ、勝負は終わつちやいない」

「!?!」

「ふ、不良のお爺さん!?!」

不良のお爺さんは狭間に堂々の立ち姿で立っていた。

手加減しているがデネブのランスをまともに喰らい、加えて狭間から落下した不良のお爺さん。

狭間から床の距離は約五メートル程、落ちたら先程のガリ細のように気絶するのが道理だ。

だが彼は立っていた、ピンピン元気というわけではないが、彼はこうして五体満足で狭間に再び参った。

「これは驚いた……。驚愕驚愕」

「フンツ、俺は三十年前まで都会で不良やってるんだ。これぐらいのスタント……どうってことは、ない!!」

不良は言い終える前にデネブに突撃する。

デネブはランスを握る手を強めた、だが彼はその突撃を中断し、真横に跳ぶ。

まさかの敵前逃亡にデネブは驚く。

不良のお爺さんはプールの飛び込む姿勢をしながら、勝ち誇った顔を浮かべる。

「お前と戦わずしても女湯には入れる！ 作戦勝ちってわけよ！」

「それはどうかな……？」

「なっ……!？」

不良のお爺さんは顔を蒼白にする。

先程まで後方に立っていたデネブがいつの間にか眼前にまで来ていたのだ。

「貴様、一体……!？」

「私は他の人より少し体育の成績が良かったただけだ！ ………………単純単純」

不良のお爺さんはデネブによって振るわれたランスによって後方に吹っ飛ばされた。

だが不良のお爺さんも中々の実力、からがら狭間に踏み止まる。

「（デネブ……、完全に能力使ってたよね？）」

「（かなり本気だな。どんだけ女湯を死守したいんだよ……）」

デネブも不良のお爺さんと同じように狭間に足を着き、スバル達の言葉を聞いていたかのように口を開いた。

「先陣を切ることで戦争の始まりを物語り、同胞達の路を切り開く
“先陣者”……。私の『嵐劫撃』に死角なし。……好調好調」

デネブは口の端を釣り上げながら、狭間に着地する。

どうやら『嵐劫撃』とはデネブの技のようだ。

見る限りでは一瞬で他の場所に移動するタイプのものであろう。

まさかこういう形でデネブの技を見ることが出来るなんて……！
とスバルとウォーロックは心の中で呟いた。

三十六話 シワールド

「くっ……、体の動きが人間を超えている……。相当、体育の成績が良かったみたいだな……」

もう体育の成績は関係ないと思うがスバルは余計な口出しはしない。デネブの正体が電波体であるということを感じかねないためだ。

「諦めたら？ …………… 勧告勧告」

確かにそれが得策だ。

このまま続けてもデネブを倒して、女湯を覗くことなどできない。だが彼は、

「諦める、はありえない」

「……………そうか。分かってたけど、ね。…………… 承知承知」

デネブはランスを持って、不良のお爺さんに向かう。

傷を付けられている彼では回避不可能であることは明確な速さ。

これで終わりだ、とスバルは思った。

だが、この場に彼を助ける者がやってくる事になる。

「こつちを見る！」

デネブは攻撃を中断し、スバルも、不良のお爺さんも思わず、声が出した方向に目をやる。

それは彼等三人が居る男湯と女湯の狭間から少し離れた同じく狭間だ。

「お前の熱き心にやられた。掩護^{えんご}してやるぞ！」

そこに居たのはハゲ頭のお爺さん。

今まで姿を晒さなかつた彼はここで初めてその姿を晒した。不良のお爺さんの熱き心の叫^{たましい}びに打たれて、やって来た。

「チツ……まだ居たか。……………退治たい」

彼女の言葉は最後まで言われなかった。

原因は彼女の腕、そこに学校の理科室に置かれる骨の標本……………いや先程、気絶したガリ細がしがみ付いていた。

「早く行け！」

「ガリ細……………」

「何をしている！？俺が止めている間に早く！」

ガリ細の勇士に不良は涙を堪えながら、女湯に飛び入ろうとする。

「猪口^{ちぶくち}才^{さい}なああ！……………抵抗抵抗」

しかしそれを止めようと腕にしがみ付くガリ細をブンブンと振り回すデネブ。

彼女の力ならあつという間に彼は引き剥がされてしまつてあつた。

「お嬢さん！」

「な、何だああ！？……………反応反応」

ハゲ頭のお爺さんは彼女を呼び、

「これを喰らえ！」

「ぐっ！ くあ！ ま、眩しい！ …………… 瞑目瞑目」

ハゲ頭のお爺さんはその自慢のハゲ頭を天上にぶら下がる光を反射させ、真っ直ぐとデネブの眼へ発射する。

その光はとても眩しく、これだけで夜の野球ドームを照らして野球の試合が出来るほどの輝かしさ。

それをまともに喰らえば、眼に激痛が走るのは当然のことであろう。

「て、テメエらアア！」

「おい！ 何でお前まで……………！」

何と不良のお爺さんはデネブのもう片方の腕にしがみ付いたのだ。これでは二人の気持ち上台無しにしたようなものである。

「この女の動きを止めていられるのは時間の問題だ。俺も手伝う！」

「何、言ってるんだ!？」

「大丈夫だ！ 俺達の意志は……………あの少年が継いでくれる！」

と不良に指差されたのはスバル。

「え、僕ですか……………？」

「さあ！ 俺達に構って行かないで行くんだ！ お前の念願が叶う時だ！」

「待つて下さい！ これは僕の念願じゃありませんからね!？」

スバルは言うが、何故か三人はこちらに顔を向け首をしきりに頷かせていく。

止めてくれ、キラキラとお目を輝かせながらこっちを見るのは止めてくれええー！ とスバルは叫びそうになる。

「クソツ！ やはりこいつ等の盟主はスバル君だったか……………！ 私

とした事が、最後まで自分を信じるべきだった……！ ……………不
覚不覚』とデネブが呟いたのをスバルは耳にした。
完全にスバルをこの集団のそきまの盟主リーダーと勘違いしている。

『行くしかねえな……』

『いや、別に行かなくてもいいと思う』

『男たる！？』

『ロツクの言っている男ってどんな男なの？ もしかして変態な男
？』

『……、』

『答えてっ！』

そんなやり取りをしていると、ズルツ！ という音を耳にした。

それが自分が暴れるために床に足を滑らせた音だったことに気づく
頃には、既に視界は揺らいでいた。

そして真っ直ぐと落ちていく、落ちていく先も悪かった。

女湯方面だ。

『修羅場、だな』

『まずいよ！ まずいよまずいよ！！ ロツク、電波変換だ！』

『クソツ！ ここは風呂の湯気のためか電波環境が悪い！ 電波変
換ができないぞ！』

『嘘だよな？ それ。完全にこの状況を楽しんでるよね？ 僕が酷

い目見るからって』

『否定はしない』

『やっぱりね。大体君はいつも ヘブシッ！』

スバルは見事に女湯の床に落下した。

ウォーロツクの助力がない彼は壁を攀じ登ると言う荒業は出来ない、
だが平凡な入り口からの脱出も不可能（壁の一つが刳り貫かれ、身

を隠す湯気が持つていかれているため。
もう腹を括るしかないのだ。
幸い自分の最も大切な下の部分はタオルで隠れている。

「後はランドマークちゃんの怒声とラーナさんの冷たい目、を耐えれば……！」

そう心に決めたのだが、

『ランドマークもラーナの姿も見当たらないぞ』

「と言うよりも誰も居ないじゃないか」

実はスバル達が温泉に入ってもう既に一時間は経っている。

これほどの時間が経っても彼女達が居たら、相当の長風呂好きであろう。

腹を括り、相手の侮辱に耐える必要もなかったのだ。

何故なら誰も居ないのだから。

「何だ。心配して損した」

『じゃあデネブは何のために守っていたんだ？』

「さあ、気分的に聖地おんなゆに男を入れたくなかったんじゃないの？」

そういうもんか？ とウォーロックは呟く、スバルは安心したように冷え切った体に鞭を打ちながら入り口の扉へと急ぐ。

温泉に入りなおせばいいじゃないか、とウォーロックに言われたスバルだったが女湯に入るのは気が引けた。

もう一度男湯に行くという選択肢もあったが、あの変態お爺さん三人組に再会するのも嫌なのでそのまま村長の家に戻ることを決意する。

一步、また一步。

歩み、この女湯の脱出路である扉の前へと辿り着く。
思えば長かった。

変態お爺さん三人組との出会いがデネブとの戦いに繋がったり、女湯への侵入へと繋がった。

おかげで寿命が五年縮まった（ような気がする）。
だがそれも今、終わりを告げようとしていた。

ガラツ、と扉が開いた。

だがそれはスバルによって開かれたのではない。
だからといってひとりで開いたのでもない。

この出来事で考えられる事は唯一つである。
誰かがあちらから扉を開いたという事だ。

扉の向こうから皺しわが出現した。

「……………」

スバルは言葉を忘れた。

目の前に立つのは皺……………だらけのお婆さん、その数五人。

一人でも主張が強い皺。

それが今、五人という大人数となり皺が更に強調されている。
皺と皺と皺と皺と皺。

ウエルカム トウ ザ シワールド

この皺スバルが、僕の覚えている最後の場面だ。

三十七話 故郷

スバルは、眼が覚めたら見知らぬベットの上に居た。

何が起こったのか、と脳の中の記憶のタンスに触れれば、トラウマ級のことが温泉で起こったことを思い出し、頭を抱える。

ハンターの時計を見れば、午後九時を指していた。

腹が空いていた。

思えば、何も食べていなかった。

『起きたか』

「あ、ロック。ここは？」

『村長の家だ』

どうやら温泉で気絶した後、無事に村長の家まで運ばれてきたようだ。

服は見知らぬものを着ていた。

苦しくないようにか、パジャマのようなものを身に着けられていた。スバル自身、身体的には苦しくないのだが、この心遣いは嬉しかった。

『何、ニヤニヤしてんだ？』

「し、してないよー！」

スバルは顔を触り自分が本当にニヤニヤしていることに気づき、急いで直した。

その慌てっぷりに逆にウォーロックがニヤニヤする。

本当にロックは僕をからかうのが好きだなあ……、とスバルは思っている、その部屋の扉が開いた。

入ってきたのはラーナ、スバルが起きたことに気づき笑顔を向ける。

「大丈夫？ いきなり家に運ばれてきたんだもん」

「ハハハツ、でも誰が運んできたの？」

「知らないと思うけど、坂本さんと吉田さんと関口さん」

まさか、とスバルは内心思いながら、ラーナに問う。

「もしかしてガリと不良とハゲのこと？」

「う、うん。よく分かったね」

ラーナは少し驚きながら首を縦に振る。

スバルの予想は当たった、あの変態お爺さん三人組が運んでくれたのだ。

しかもラーナが続けて言うには運んできてくれた三人は帰り際に『我等が同志を宜しくお願いします』と口を揃えて言い放ち、その場を去ったという。

スバルにとっては『何時から同志になった！？』という気持ちで一杯であったが、今は押さえておいた。

「お腹空いてない？ 今、皆で晩御飯を食べてるところなんだけど

……」

「うん、死ぬほど空いてるよ」

「死ぬほど……フフフツ、じゃあ行こうか」

スバルはうん、と頷き、先に行くラーナについて行く。

長い廊下を歩くスバルは、『流石、村は小さくとも村長の家だ。中々大きい家をしている』と思った。

そう思いながら歩くスバルは、顔に出てたらしくラーナは微笑しながら、

「一応、お爺ちゃんには村長だからね。家ぐらいは立派にできるよ」

「ハハハッ、それにしても良い匂いがしてきたね」

「嬉しいことを言ってくれるね。晩御飯、私が作ったんだよ」

「凄いね。きつとラーナさんは良いお嫁さんになれるよ」

するとラーナは赤面し、恥ずかしそうに両手の人差し指を合わせた。なんやかんやでリビングに辿り着いた。

リビングに置かれる大きなテーブルの上は沢山の料理で埋められていた。

そしてそれを美味しくそうに食べるのはランドマークとデネブ、村長は客人より先にご飯を食べるのに気が引けるのか、ただ美味しくそうに食べる女二人を眺めていた。

そして村長はスバルとラーナがリビングにやってきたことに気がつくくと、席を引いてスバルを座らせてくれた。

スバル達は民宿の身なのに大変親切な村長だ。

「では、頂きます！」

「ああ、沢山食べてくれ。御代わりが欲しいなら言ってくれ」

本当に親切な村長だ、とスバルは思った。

そして彼はその親切を噛み締めながら、食事に手をつけ始めた。

スバルの日課は食後の星空観測だ。

それは旅をしている中でも変わることはない。

なので村長の家での食事を終えたスバルは星空を見に外に出ようとしたのだが、村長が危険なので引き止めてきた。

聞くことによると夜には視界が悪く足を滑らす人が多く危険であるらしい。

しかも……熊が出るらしい。

だが物心ついたときからの日課を、滑って死ぬや熊に会って死ぬなどで止める訳にはいかない。

そう伝えると村長は諦めたらしく、しかし客人を怪我させるわけにはいかないで、孫のラーナがついて行くということで話がついた。

そして今、二人はヒマナラ村の夜空を見上げていた。

「……こんな高いところからの星空観測はやっぱり最高だね。空気も澄んでるし」

「ヒマナラ村の唯一の名所だよ。ハッキリと星も見えるしね」

「うん。僕の町で見えるのも格別だけど、ここで見るのも良いなあ」

「そう、ここは良い所なんだよ。でも皆、ここを出て行く……」

スバルはラーナが哀しそうな顔をしていることに気がついた。

言葉から察するに、皆がヒマナラ村から出ることで孤独感を感じていることは明確だった。

その孤独感を埋める事はできないのか、とスバルは思った。彼は優しい人なのだ。

「星空が綺麗……」

「えっ……？」

予期せぬ言葉にラーナは顔をキョトンとさせる。

スバルは視線を真つ暗な夜空からラーナに移すと、ニツコリと笑みを浮かべる。

「これはヒマナラ村の良さだ。そして僕はその良さを知った。だからまた来たいと思ったんだ。きっとそれはここを出てった人達も同じなんじゃないのかな？」

「……………そう、だよ。皆、戻ってきてくれるよね……………！」

そう永遠の別れじゃない。

きっと皆、ヒマナラ村に戻ってくる。

自分の故郷なのだから、そう簡単に切り捨てることなどできない。

(……………)

スバルは故郷、という言葉に沈黙する。

自分はこの旅を無事に終え、そして無事に自分の故郷であるコダマタウンに戻る事が出来るのだろうか。

そう思うとスバルはコダマタウンが、そして仲間達が恋しくなってきた。

スバルは自分の不甲斐なさに下唇を噛む、仲間を巻き込まないために決意を込め仲間と別れを告げ、そして旅に出た。

だが今、彼は仲間と会いたいという欲求がプツプツと湧いてくる。

自分が行けば、皆に迷惑が掛かるのは分かっている、それでも皆に会いたい。

(なんて僕は弱いんだろう……………)

自分の弱さが不甲斐ない、と思ったスバルだった。

三十八話 来襲の理由

宇宙庭園ヴァルハラ。

そこで三人の電波体が円を模る様に席に座っていた。

一人は『冬の六角形』リーダー 兼 “参謀者” である“磊落多情”プロキオン。びいらく

一人は『日光・月光』のリーダーの“灼熱眩耀”ヘリオス。しゃくねげんよう

一人はこのグループの主であり、爺と呼ばれし電波体。

主である爺と呼ばれし電波体はもちろんのこと、残りの二人どちらも三本指に入り、このグループにおいて欠かすことの出来ない人材である。

そんな彼等が集まったのは他でもない、ロックマンの居場所を特定したのだ。

「ロックマンの居場所を特定したのは『冬の六角形』のポルツクスだ！ ロックマンは『冬の六角形』に任せてもらおうか！」

「まあ、落ち着け」

息継ぎもせず一気に言葉を吐いたプロキオンは、爺と呼ばれし電波体に制される。

押し黙るプロキオンを横目に爺と呼ばれし電波体はヘリオスに目をやると、ヘリオスは閉じていた眼を開いて、

「俺が、行こう」

「何言ってやがる、ヘリオス！？ これは自分達に任せろよな！！」

「……………ヘリオスに任せようか」

「爺！ 本気かよ！？」

爺と呼ばれし電波体は勿論だとも、と言わんばかりに首を縦に振る。

「お前はベテルギウスから“参謀者”の地位を授かってからまだ間もない。今はあまり出しゃばらず、その時が来るまで準備をしていろ」

「チツ……」

プロキオンは舌打ちをすると、その小柄な姿を光の粒子と共に消した。

その場に残ったのは爺と呼ばれし電波体とヘリオスの二人だけ。爺と呼ばれし電波体はヘリオスに視線を送る。

「大丈夫、だ」

ヘリオスは猩々^{しじゅう}緋色^{ひいろ}の炎を渦巻かせながら姿を消した。

一人残った爺と呼ばれし電波体は外の美しい花々が広がる庭園に目をやりながら、軽く息を吐いた。

スキーやらイエティ・ブリザードやら女湯騒動やら一日で沢山の大変な目に遭ったからかスバルはぐっすりと眠ることが出来た。

こんなにもぐっすり眠れたのは旅を始めて以来、初めてのことだ。おかげで今までの疲れが取れ、スッキリな朝を迎えることが出来た。

そして今日はヒマナラ村を出る日だ。
追われている身である以上、長居は無用だ。
そのため、スバルは朝四時に起きた。

村長やラーナは勿論、ヒマナラ村の人は皆、眠っていることである。
う。

そのほうが都合だ。

「今日も良い天気だ……」

スバルは貸してもらったパジャマを丁寧に畳みながら、その呟いた。
黙ってここを出ることに後ろ髪を引かれる思いだが、ヒマナラ村の
人達を考えれば疫病神はさっさと出て行ったほうが良いに決まっ
ている。

「すばる。準備はできたか？」

「うん、バッチリだよ」

スバルはランドマークにそう答えながら、大きな鞆を背負った。
足音を立てないようにスバルとランドマークの二人は部屋を出て、
廊下の角を曲がり玄関へと出る。

鍵を掛けずに家を出ることに罪悪感を覚えるが、方法はないので仕
方ない。

二人はその扉を開けた。

雪一面の景色の中、『夏の大三角形』“先陣者”デネブとスバルの
ウィザードであるウォーロックが待ち草臥れたかのように深い息を
吐きながら立っていた。

「待たせちゃったかな？」

『待たせるも何も俺達はずっとここに立って護衛していたんだぜ。
それも少し飽きてきていただけだ』

「敵の来襲はなし。何事もなく護衛終えることが出来た。……………」
報告報告」

ウォーロックは皮肉げに答え、デネブは簡単に報告する。

スバルはそれらに首を振って答え、自ら前に進み出てこれからの出発を物語る。

だが、それはデネブが無言で片手を上げ、制する。

「まだ終わってないんだ。これが……………途中途中」

出鼻を挫かれ調子が狂ったスバルだったが、余計な反論はせずデネブの続きの報告に耳を傾ける。

デネブは頬に垂れる汗を拭おうともせず、淡々と話し始める。

「今、こつちに猛スピードで迫ってきてるんだよ。強大な電波反応が、な……………」

「護衛は終えた。だが同時にスバル君との共闘が始まる。……………」
「嘗々嘗々」

そしてスバルの視界に乱入するのは一人の男。

真っ赤に燃え盛る炎のような髪を持つ彼は灰色のストライプスーツを全く着こなせていなかった。

彼は先程までそこには立っていなかった。

突然、その姿を晒した。

姿は人間、だが立っているだけでヒシヒシと強烈な威圧感を感じる。その威圧感に思わずスバルは拳を握り、ウォーロックはスバルのハインターに戻り、デネブは戦闘体制に入り、ランドマークはそこから離れるようにヒマナラ村唯一の大木に身を潜めた。

その男は全く感情の籠らない眼をデネブにぶつけると、口だけがボソボソと動き始めた。

「『夏の大三角形』“先陣者”デネブ、本当に、裏切った、のだな」
「『日光・月光』リーダー“灼熱眩耀”しゃくねつげんようヘリオス、相変わらず話すことが苦手のようで、言葉が途切れ途切れになってるよ。……………
忠告忠告」

ヘリオスはデネブの挑発に全く興味を示さず、次にスバルへと視線をずらす。

「ロックマン、か。予測の範囲内、とはいえ、『冬の大三角形』、『冬の大六角形』を束ねる“参謀者”ベテルギウスを、打ち倒すとは、将来性がある。流石、候補という、ところ、か」

「お褒めに預かり光栄だよ。で、何の用ですか？」

「何、少し、俺の相手を、してくれれば、いいのだ」

ブオウ！ と猩々緋色びんべいしの炎が体に渦巻き、そしてストライプスーツの男だった彼は一瞬にして真っ赤なボディを持つ電波体として再び姿を晒した。

それに合わせてデネブも擬人化を解き、一気に電波体としての現す。スバルも電波変換を行い、青い姿のロックマンへと姿を変化させる。

「ロックマン！ ヘリオスは相当の実力の持ち主だ！ ………………伝達伝達」

「分かってる！ どうせ弱い奴なんていないじゃないか！」

ロックマンを苦しめたあのベテルギウスですら弱いと言われるほどだ。
だったら他の連中は更に強いことぐらいは少し考えれば分かることだ。

「だったら常に全力で行くしかない！」

『まあ勝負に手加減っていうこと自体が、まず有り得ねえ！』

確かに、とロックマンは呟きながらヘリオスに向けてロックバスターを放つ。

ヘリオスはそれを横に避けることで交わり、ロックバスターは空を切り、雪煙を立てる。

だが移動した先に待つのはランスを構えるデネブ。

「一発ぐらいは喰らってくれよ！……………願望願望」

『嵐劫撃』によって普通の電液体の速さを超えたデネブが、一気にヘリオスとの間合いを詰める。

そしてランスは容赦なくヘリオスに向けて何度も突かれる、その一つ一つの動作は眼に留まる事はなく、遅れて雪煙が立ち上る。

「ッ！」

ヘリオスは続けて振るわれるランスを後ろに跳ぶ事で交わり、一発目に喰らった腹部に手を当てる。

見れば触れた手の平は真っ赤な血によって染められていた。

「やった！」

「いや、まだだ……………警戒警戒」

腹部に痛々しい赤い傷を持ちながらヘリオスの顔は痛みと言う感情を感じられない。

ヘリオスは無表情な顔を崩さず、また平坦な声すらも崩さずに、

「その通り、だ」

とだけ言う。

猩々緋色の炎がヘリオスの腹部を包み込む。

そして数秒後、炎が消失したと思えば、傷は一瞬にして塞がれた。

「あれは『不死鳥劫火^{アモン}』。ヘリオスの防御法『不死鳥劫火^{アモン}』は、負った傷はキツカリ十秒後に修復される。どんな強烈な攻撃であつても防がれるあれは、謂わば最凶の鎧といったところかな。……
強固強固」

『反則クセエ技だな。ほぼ無敵と言つても過言じゃねえ』

ウォーロックの披瀝にヘリオスは全く抑揚の感じられない調子で、

「その、解釈は、心外だ。この技が自身に、どれだけの、消耗を齎すか、承知した上で、言つてもらいたい、ものだ」

「まっ、アンタにはその消耗を補うほどの回復力があるんだ。そうブツクサと言うのは贅沢つてもんじゃないか。……強欲強欲」

「欲では、ない。この世に完璧は、ない、ということを、改めて確認し、そして貴様等、にもそれを教えた、までだ」

言葉を終え、今まで動くことのなかった体をヘリオスは横に動かす。その速さは『嵐劫撃』に劣るものの、充分過ぎるものだ。

そして彼はそのまま迷いなく、ロックマンに迫る。

「……………」
「バトルカード・ジャイアントアックス！」

無言で迫るヘリオスに対し、巨大な斧、ジャイアントアックスを振り下ろすが、ヘリオスはそれを回避し、一気にロックマンの眼前に移動した。

そして一発、まず腹部にその拳を放つ。

「ッ!!」

痛みに腹部を押さえるロックマンに、更に追い討ちを掛けるように蹴りをお見舞いする。

約数十メートルノーバウンドで吹っ飛び、大木に背中から直撃する。

「大丈夫か!? すばる!」

「ランドマークちゃん……、隠れてなくちゃ……」

大木からピョコツ、と姿を現したランドマークがロックマンに寄り添うが、ロックマンは立ち上がることが出来ない。

いつの間にか大木に背中を預け横たわるロックマンの目の前には、ヘリオスが上から二人を見下ろしていた。

「驚いた。アルテミスは、既にロックマン、デネブと合流を、果たしていたのか。事が信じられない、ほどに、順調に進んでいる。慄然、さえも、覚える」

と全く驚く様子すら感じられない語調でヘリオスは呟き、そして姿がブレた。

ヘリオスは信じられないほどの大質量の雪煙を撒き散らしながら、数百メートルもの長い距離まで吹っ飛ぶ。

「奴は喋ることが苦手なのか得意なのか、判断がつかないほどによく喋る。……曖昧曖昧」

そして先程までヘリオスが立っていた場所に、ランスを横に振るった格好のままのデネブが代わりに立っていた。

「アルテミス、お前はここを動くなよ。……………不動不動」

「ああ、その代わりしつかりと守ってくれよ」

「その点は大丈夫。君は奴等に狙われてないから、寧ろ危険なのはロックマンだ。……………危険危険」

その言葉にロックマンは体全身に激痛を伴いながらも立ち上がる。そう、一番危険なのはランドマークでも裏切り者のデネブでもない、自分自身だということにロックマンは改めて思い知らされた。だからこそ、

「アイツの考えてる事はよく分かんないね。……………不明不明」

そうデネブは呟く。

実はロックマン自身もそう思っていた。

「アイツから殺気が感じられない……………。まるで僕を殺そうとと思っていないようだよ」

『実際問題そうなのかもな。奴がスバルを殺すつもりだったら、最初の一発目でパンチはしないだろ？』

ヘリオスは最初の攻撃に拳を選んできた。

そしてその後の追い討ちもただダメージを与えるだけの蹴り。

殺すつもりがあるのならばそのような攻撃はしない、早急に止めを指す筈だ。

確かに個人の性格によっては戦いを長引かせようとしている者もいるが、ヘリオス自身がそのような戦闘好きにも見えない。

三人はその読み取ることの出来ないヘリオスの行動に困惑するしかなかった。

「敵ではない、のかな？」

「殺気はない。ヘリオス自身、そう思っていないのかもれない。だが奴は『ロックマンの殺す』ことを目的にする爺の配下だ。その時点でヘリオスは私達にとっては敵と言うことになるんだ。敵なら遠慮は要らないぞ、ロックマン。……………存分存分」

とデネブは狼狽するロックマンに釘を打ちつつ、ヘリオスを見据える。

デネブによって吹き飛ばされたヘリオスは全くの無傷。

何事もなかったかのように猩々緋色の火の粉を撒き散らしながら、そこに立っていた。

「“三本指”の考えることはよく分からんね。『ロックマンを殺す』ことが目的じゃなかったのか？……………疑問疑問」

「……………当初から、事態は、変わりつつある。爺の、図った目的の、邪魔に為り得る、ロックマンが、その目的の重要な、鍵に、為りつつあるのだ」

「鍵、だって…………？」

その、通りだ、とヘリオスは途切れ途切れに答えながら、遠方にあってもよく通る声調で続けた。

「もうロックマンを、殺す必要は、なくなったのだ」

「……………！？」

まだ、確定事項では、ないがな、と言ってからヘリオスは、突然の新たな事実には驚愕するロックマンとデネブ両方の反応を確認しながら、

「それを見定めるため、に俺は、ここに来た、だけだ」

三十九話 起床

「僕が、鍵……」

ロックマンはたった今、『日光・月光』“灼熱眩耀”ヘリオスから聞いた『計画の変更』に驚愕していた。今までの敵の目的はロックマンを殺すこと。だがこれからの目的はロックマンを生かすこと（鍵として活用するため）。

その全く相対する目的の変更に、敵の意図が読み取ることができない。

「ロックマンは爺にとって重要な存在に為りつつあるのか。………」

為りつつあるというのは、まだ為っていないということ。

本当にロックマンは鍵となるのか、ヘリオスはそれを確認しに来た、殺すわけではなく。

『デネブ、テメエは何か知らねえのか？』

「うん。私達『夏の大三角形』はもう脱退した身だし、そんな最近変更されたことなんて知らないよ。それに爺の本当に望む目的すら知らない。知っているのは“三本指”だけだよ。………無知無知」

「じゃあ、ヘリオスは爺って奴の本当の目的を知っているってこと？」

デネブは首を縦に振りながら、ロックマンの言葉を肯定する。

その中、ヘリオスはロックマンから五メートル離れた所で歩みを止

める。

「早く確認して、俺は、帰る」

「何を確認するかも分からないのに、『ああ、はいそうですか。ではどうぞ、確認してください』なんて言う訳ないじゃないか！」

「ならば、強引、に一方的に、捻じ伏せる、でいいな？」

良くはないなあ……、というロツクマンの咳きは、雪原に響き渡る轟音によってかき消される。

その一つの轟音の原因、それはヘリオスの掌から放たれた炎弾が容赦なくロツクマンから半径一メートル内で破裂した音。

これは再びの戦いの火蓋が降ろされた一つの合図。

「チツ……、相変わらず周囲に無頓着な奴だ！ そんな炎弾放つて……、今何時だと思ってるんだ！ 朝の五時だぞ！ ……迷惑
迷惑」

炎弾は一つの塊として発射され、被弾したところで大量の火の粉を撒き散らす、そんな厄介な攻撃だった。

発射された時は、数は三十を超え、火の粉になった暁にはほぼ数える事は不可能となるほどだ。

しかしロツクマンとデネブはその火の粉の雨から、何とかその攻撃を守りきっていた。

実際、二人が問題視しているのはそのダメージよりも、他にあった身を隠すランドマークに当たらないか、ヒマナラ村の村人が起きたりしないか、ヒマナラ山脈の雪が溶けて雪崩が起こらないか。

心配したとおりその三つの内、一つが今、まさに起ころうとしていた。

スバル、デネブ、ランドマークの三人にして四人が一泊した家、村長の家の扉が独りでに開いたのだ。

それは当然、中から開ける以外に扉が開く事はない。

村長の孫であり、スバル達に温泉の場所を教えてあげ、そしてスバルと共に星空観測をした

ラーナが立っていたのだ。

彼女は最初、寝惚けたかのように一度右に左に視線を巡らせ、そして今、火の粉から逃げるロックマンと眼が合った。

眠たそうな半眼を擦りながら、ロックマンをじっと凝視し、今度は眼を全開にして、もう一度凝視する。

パチクリ、パチクリ、と瞬きを繰り返し、現状を飲み込めないらしく真顔でロックマンを見、次にデネブを見、そして最後にヘリオスを見る。

数秒後、

あわわわわわわわわわわわわわわわわわわ！！　と悲鳴に近い絶叫を上げ、その場で両手を忙しくバタつかせる。

『スバル、アイツが起きちゃったぞ』

「そうだね……」

ラーナが起きたことを切っ掛けにゾロゾロと、村人が起床する。

その中には共に温泉でデネブと戦い抜いた戦友、坂本さんと吉田さんと関口さんの姿も見えた。

このままでは騒ぎになってしまう。

「どうしよう。デネブ……」

ロックマンは漸く火の粉を全て薙ぎ払うと、同じく火の粉を全て回避したデネブへと訴える。

デネブは一言、

「どつしよつもないね。……………窮地窮地」

『冬の大三角形』から戦力を拡大させた『冬の大六角形』の参謀に加え、リーダーも就いた二代目“参謀者”、“磊落多情”プロキオン。

彼女は今、太平洋に居る。

(宇宙庭園ヴァルハラから自分で好きな場所に転移できねえってのはどうにも不便だな)

宇宙に浮かぶ宇宙庭園ヴァルハラは周囲に何重ものバリアを張り、敵味方判別なくその美しき庭園の姿を隠す。

それは“三本指”という相当の実力の持ち主でも同じことであり、プロキオンも実際にチャレンジしたこともあるが迷子になりかけた(というよりなった)。

入るにも出るにも、たった二つの方法しかない。

一つは“先導巫女”アルテミスの先導によるもの。

そしてもう一つがこの太平洋に沈む遠距離転移要塞ウロボロスによる転移だ。

謂わば宇宙庭園ヴァルハラから遠距離転移要塞ウロボロスは一本の道で繋がっているようなものである。

そして彼女はその道を辿り、ここにやって来たという訳だ。

（奴が本当に鍵となるなら……、一体ベテルギウスの仇はどうしたらいいんだろうな……）

爺と呼ばれし電波体がプロキオンをロックマンの元に向かわせなかったのはその時が来るまでの準備ではない。

ベテルギウスの仇であるプロキオンが激情に駆られ、勢い余って候補であるロックマンを殺さないためである。

それはプロキオン自身も理解していた。

ロックマンを目の前にして自分がどのような行動に出るか確かに自分でも分からない。

だがロックマンだけではどうしても自分自身で調査しなかった、ベテルギウスの仇であるロックマンを。

そして彼女は宇宙庭園ヴァルハラで居ても立ってもいられず、思わずここに来てしまったというわけだ。

（ロックマンを目の前にしてどうするってんだ？ 何も出来やしねえってのに何で自分はここに来ちまったんだ……）

プロキオンはそう思いながらも、体はヒマナラ村へと向いてしまう。

無意味であってもいい、何も出来なくてもいい。

ただロックマンが鍵であるか、否か、それを見届けたい。

それだけでプロキオンはここに来た。

高速でウェーブロードを移動するプロキオン。

そんな彼女は、目の前に立つ、黒い影に、足を止める。

彼女はその黒い影を知っていた。

彼はずっと昔からプロキオンがここにやって来るのを分かっていたかのように、ずっしりと構えていた。

プロキオンは飽き性、一度殺したと思った相手と再び拳を交えるのは飽きてしまう。

だから彼女にとって彼はとても煩わしいもので、今すぐにも八つ裂きにして太平洋に捨ててしまいたいという気持ちになる。

対する彼にとって彼女は憎き相手だが、最早彼女は眼中にすらない、視野に入るのはもう既にその先だ。

だから彼女の前に立ちはだかるのは、今すぐにも新たに手に入れたこれを試したいという欲望によるものだ。

「よう。残念ながら自分は今、急いでるんだ。テメエに付き合ってる暇はねえんだよ！」

「俺もお前に既に興味はない。ただ俺のこれを吟味させてもらうだけだ！」

プロキオンの前に立ちはだかったのは、黒き影、ブライだった。

四十話 獣と鳥

ヒマナラ村の村人が起床してしまった。

それはスバル、デネブ、ランドマークにとってはあまり好ましくはない。

ヘリオスの矛先が、そちらに向かうことも有り得なくはないからだ。そして村人達は興味本位でロックマンを見守っている。

(いや、そこは逃げようよ)

ロックマンは内心でツツコミを入れつつ、大木に身を隠すランドマークに目配せをする。

戦力では足手纏いとなる彼女だが察しただけは良い、そこを見越してロックマンはランドマークにある事を伝えたのだ。

ランドマークはコックリと首を振り、村人を束ねる村長の下に向かう。

ゴニョゴニョ、と数秒間ランドマークが村長の耳に囁き掛けると、村人達は皆、急いで自分の家に身を隠した。

『どうやらロックマンの『危険だから避難して』という訴えがランドマークにも無事に伝わったのだろう。』

家の中では少々危険ではあるものの、少なくとも外に出るよりはマシである。

「やれやれ。ヘリオスのせいで、皆起きちゃったよ。……………迷惑
迷惑」

「どつども、いい」

ヘリオスはデネブの糾弾を一刀両断し、前方に跳ぶ。その向かう先は、やはりロックマン。

「バトルカード・ブラックインク！」

ロックマンはブラックインクを放ち、見事にヘリオスに命中させる。モワッ！ と黒い煙がヘリオスを包み、一瞬にして視界を奪う。だが彼は迷わず、ある方向へと炎弾を放つ。

「ガッ……!!」

それは見事にロックマンの腹部へと命中し、一つの炎弾は後に分裂し火の粉となり更に更にダメージを加える。

ロックマンは数十メートル後方に吹っ飛び、バウンドした後、何処かの家の壁に衝突した。

その家とはスバル達が一泊した、村長の家だった。衝突した衝撃で少し罅ヒビが入っていた。

「後で、謝らないとね……」

ロックマンは呟きながら、立ち上がる。

しかし余程体にダメージが残っていたのか。

足がふらつき、視界がブレ、前に倒れかけた。

その時。

ロックマンの体を温かい感触が包み込んだ。

「……？」

ロックマンは疑問に思う、何なのかと考えたが分からなかった。だが、

「大丈夫……ですか？」

その声でロックマンは喪心しかけた気を完全に取り戻した。
その声の持ち主はラーナだった。

ラーナがロックマンを抱き締める様にして倒れる彼を支えたのだ。

「ラーナさん。……逃げなきゃ」

「やっぱり……………」

ラーナは理解したように眩き、そのまま彼に肩を貸し自分の家に連れ込もうとする。

「は、離して……………」

「できないよ、スバル君！」

その瞬間、時間が止まったような気がした。

なんでこの少女はロックマンの正体を知っているのか、彼は頭の中で答えを捜し求めたが一向にそれらしきものは見つからなかった。

「何で、僕のこと……………」

「今はそんなことよりも避難だよ！」

「……………」

ロックマンは喋らず、暗に避難はしないという事を伝える。

ラーナはそれを察すると、涙目で訴える。

「これ以上やったら……………、スバル君が怪我しちゃうよお……………」

語尾はほぼ涙声で、顔を見ずとも彼女が泣いている事が手に取るように分かった。

何故この場面で泣いてしまうのか、ロックマンには理解することが

出来なかった。

そういえば女の子はよく泣くなあ、とロックマンは今まで出会ってきた女の顔を回顧しながら、ラーナの肩に回る手を引っ込めた。

「ッ!?」

「分かるよね? 敵の狙いは僕なんだ。僕の近くにいたら巻き込まれるんだ」

それに、とロックマンは一度言葉を切り、

「僕はここでアイツと戦える数少ない戦力なんだ」

ロックマンを狙いにやって来た(自分で言うには確認)ヘリオス。そのことでロックマンは引け目を感じている。

責任を感じる彼はそれを敵を返り討ちにすることで、責任を返上しようとして(完全にそう思っているわけではないが)努めている。

彼はそういう意地がある。

ならば背中を見せ、逃げることなど有り得ない。

「クソッ! ロックマン、できればさっさと戦線復帰してくれと助かるんだけど!! 熱望熱望」

見ればこちらに迫ってくるヘリオスを、デネブが何とかそれを断っていた。

ロックマンはそれをじっと黙って見ていられるほど、辛抱強い心は持ち合わせていない。

『願い通り、さっさと突っ込むか』

「突っ込むって言うことには賛同しかねるけどね」

ロックマンはラーナに背を向ける。
ラーナがどんな顔をしているのか分からないが、心配してくれる気持ちは有り難かった。

その気持ちを裏切るように申し訳なくもあつた。
だがそれでも、彼は戦う。

パチパチ、とノイズが走る。

「ファイナライズ！」

ロックマンは叫んだ。

ヘリオス相手に普通のノイズ率で勝てるとは思えない。

今日のもつと奥まで行こうと思った。

ロックマンはゆっくりと瞼を閉じた。

閉じた先に待つのは闇ではなく、メテオサーバーの紅蓮の色。

その紅蓮は永遠に続き、果てしなかった。

その紅蓮一色に、一筋の青い光。

それはロックマン自身、メテオサーバーの奥へ奥へと突き進んでいく。

百パーセント。

千パーセント。

更に更にノイズ率は上昇していく。

それに比例するかのようには、体全身が激しい痛みを走った。

五千パーセント。

既にそれは未知の領域。

だがまだ、これではヘリオスを倒せない。

奥。奥。奥。

自身の体がかつか分らなかった。

エース・ジョーカーPGMがもつか分からなかった。
だが今、ここでファイナライズしても勝てる自信が無かった。
そして更に奥に進んでいく。

そして辿り着くのは、完全にその場にイレギュラーなロックマンと
同じ青い光。

ノイズ率は……測定不能。

そこまでの領域に来てしまっていた。

その青い光は徐々に紅蓮を侵食し、最終的には全てが青く変わって
いた。

そしてロックマンと同化した。

『チカラ カシテアゲルヨ』

そして

訪れたのは、一つの暴走。

「があああああああああああああああああああああああああああああ
ああああああああああああああああああああああああああああああああ
あああああああああああああああああああああああああああああああ
」

太平洋上空で二つの化け物が向かい合って、ウェーブロードの上に立っていた。

一人は“磊落多情”プロキオン。

一人は漆黒の影、ブライ。

二人は対峙する。

只ならぬ緊張感が辺りを包み、まさに一触即発の場にプロキオンの声が響く。

「自分は確かに『ブラックホールサーバー玩具箱』でテメエを倒した筈なんだけどな。おつかしいねえ」

「そうだな……」

ブライは多くは語らない。

もうブライはプロキオンを敵かたきとは思っていない。

何故ならそこでプロキオンと互角、もしくは超えた力を手に入れてしまったからだ。

ここで立ちほだかるのはその力を試したいということからだ。

「無口な奴だ。そういう奴は、殺したくなるな」

「そう簡単に殺されることはないな」

断言した。

『ブラックホールサーバー玩具箱』でプロキオンに圧倒されたブライだったが、全くの迷いなく言い切った。

それほどの自信は何処から来るか、当然先程からブライが口にするこれ、だろう。

それを見越したプロキオンは興味の無くなった敵に尋ねる。

「これってえのは、何を指している？ それを提示してくれなきゃあ、自分にとって本当に脅威となるのか、疑問に思っちゃう」

「大丈夫だ。すぐに見せてやる」

ブライは両手を顔の前でクロスさせ、一気にそれを解き放つ。深緋色の柱がブライを包み込む。

「キルウウウウウウツッ!!」

聞こえてきたのは鳥の叫喚。

甲高いその叫喚は目の前のプロキオンのみならず、その世界中に轟く。

深緋色の柱は止め処ないエネルギーを放出したまま。

プロキオンはそれを目の前にして、奥歯を噛み締める。

(まずったなあ。まさかコイツが、鍵となっちまうとは……!!)

その柱から現れたのはブライではなかった。

深緋色のアーマーに翼を携えた鳥だった。

「で、でもあれはスバル君なんだよ！ 逃げるなんて
「割り切れ！ ……………理解理解」

デネブは続ける。

「アイツは、……………化け物だ。……………断言断言」

もうあれはロックマンじゃない。

無差別に全てを襲う化け物だ。

情に縋っていたら、こちらが殺やられる。

やるしかないのだ。

「自分の仲間を倒すって言うのは気が進まないけど、仕方ないよね。

……………「転換転換」

太平洋上空、鳥となったブライ相手にプロキオンは身動きを取れなかった。

怖いのではない、プロキオンはたった今をもってして、彼に手を出すことが出来なくなったのだ。

彼は鍵だということが発覚した。

彼は鍵、作戦の要である彼を殺すことは遂行する作戦が失敗に終わ

ることを意味していた。
これをプロキオンはもちろん、主である爺と呼ばれし電波体も望ん
ではない。

「これが俺の新たな力、ビーストアウツ獣化」
「へえー、そうですね」

プロキオンは彼を見たことがある。
ブライではなく正確には深緋色の色を持った鳥を。

二百年前だ、とプロキオンは昨日のことのように覚えていることを
思い返していた。

そしてすぐにその意識を戻した。
原因は鳥が襲いかかって来たからだ。

プロキオンはその振り下ろされた爪を交わし、上に跳ぶ。
しかし鳥は逃さず背中に携える翼の無数の羽を上を飛ばす。

「チツ……!!」

プロキオンは背負う“発想の壺”から禍々しい右手を伸ばし、その
無数の羽を全て払い落とす。

また一つ、プロキオンはその攻撃方法を失った。

しかし出し惜しみしては、この勝負は即効で敗北に終わってし
まう。

だが相手を殺してはいけない。
難しい局面だった。

そう逡巡している間に、鳥は一瞬にしてプロキオンの眼前に移動し、
その自慢の爪を振り下ろす。

「ガッ……!!?」

その悲痛の叫びはプロキオンから発せられたものではない。
叫びはブライが、深緋色の鳥から発せられたのだ。

鳥の両翼を見れば、燃やされていた。
猩々緋色の炎。

彼女は、プロキオンはこの攻撃を知っていた。

「『烙熾』……、ヘリオスか!？」

「そう、だ」

横に首を向けると、両手を鳥に向けている猩々緋色の体を持つ仲間にして、同じ“三本指”である“灼熱眩耀”ヘリオスの姿があった。鳥はその炎を振り払おうとするが、それは中々消えなかった。

「流石、『烙熾』。相変わらずしつこくてネチネチした攻撃だ」

「褒め言葉として、受け取って、おこう」

鳥は両翼に燃える炎を漸く掻き消すと、突然現れたヘリオスとプロキオンを見る。

二人は焦りもせず、淡々と話していた。

「電腦獣、やっぱすげえな。『烙熾』を消しやがった」

「うむ。燃やし尽くす、まで、消えない、と謳われる『烙熾』が、簡単に……。やはり、先程の、攻撃が、効いたか。これでは、『烙熾』は、奴に、効かぬな」

「テメエ、相変わらずよく喋るな……」

プロキオンは皮肉げに言っただけだが、ヘリオスは全く気にする様子もなくただ真っ直ぐに鳥を見た。

「もう一つの、鍵か。地球の、時間単位一日で、二つの鍵を、見つ

けるとは、全く、運が良い。上手く、行き、過ぎて、寒気を、感じる」

「ああ、そうかい。ってなにー！？ まさか、ロックマンが……！」

ヘリオスは言葉では驚いたかのように言うが、相変わらずの無表情だった。

驚く顔をしたのは寧ろプロキオンのほうだ。

対するブライはロックマンと言う単語が出たことに眉を動かす。無表情ながら察しが良いヘリオスがそれを見逃す筈もなく、

「気に、なるか？ ロックマン、のことを」

「……………」

ブライは答えなかった。

ヘリオスはそれを肯定という意味に受け止め、淡々と口を開く。

「ロックマンは、力を、手に入れた。それは、貴様と似て、非なるもの。貴様が、言うには、ビーストアウト獣化だった、な？」

「……奴が、ロックマンが俺と同じ力を手に入れたというのか？」

「ま、そういうこっちゃ。テメエのその力と同格、或いはそれを超えたものを手に入れた。テメエにとっては自分達よりも脅威となるわけだ」

その言葉にブライは無言で受け止め、そして無言で周波数を変え、姿を消した。

太平洋上空のウェーブロードに残された二人、プロキオンとヘリオスはそれを見届け、

「ヘリオス、助かったぜ」

「お前は、そう、言うが、実のところは、負ける気など、しない、

「だろ？」

「当然だろ。電脳獣を完璧に操るなんてことは難しいし、現に奴は
まだ操れてなかった。勝負なんて単純なもんじゃねえんだよな」

二人は二つや三つの会話を交わした後、宇宙庭園ヴァルハラへと帰
るため遠距離移転要塞ウロボロスへと乗り込んだ。

刹那、獣はデネブをランスごと切り裂いた。

「、、！？」

デネブは叫ぶことも出来ずに、自分の体を見た。

痛々しいほどに深い爪痕。

ほぼ致死量に及ぶ大量の血が右肩から左横腹に掛けて、吹き出た。死ぬ、という実感を感じた。

デネブは自身の大量の血痕と共に、この雪原に散る。

「……………され……………い」

聞き慣れた女の声があった。

しかしそれはこの場にいない筈の女。

デネブは彼女が来たことに希望を抱いたが、ここに居る筈などないと、それを否定する。

だが、

「……………デネブ、死ぬことは許されない」

最初は錯聴かと思った、だが開いているだけで精一杯の眼をその聞こえてきた方に向けた時、彼女は安堵感を覚えた。

そこには女、『夏の大三角形』ベガ。

彼女は倒れかけたデネブの体を受け止め、こう呟いた。

「……………もう大丈夫」

何の変哲もない言葉。

だがこれはデネブには大きなものであった。更に、

その視線の先はデネブを介抱するベガだ。

ベガの技『エリアルライン包囲泡沫』。

空中に浮かぶ泡沫は全てベガの思うがまま、触れると爆発を起こすそれはまさしく空に浮かぶ地雷と呼べるものだった。

「……………これ以上の戦いに付きやってやる義理はない」

ベガは右手を握り締めた。

それは泡沫を操る仕草だ。

空中に停滞していた泡沫は、役目を思い出したかのように一斉に獣に向かつて突っ込んだ。

その数は五十程、これらを交わすのは不可能だった。

『エリアルライン包囲泡沫』の泡沫は獣に当たっては弾け、獣の体力を削っていく。

それは有効であつたが泡沫の数も限られており、それは数も無くなりつつあつた。

『エリアルライン包囲泡沫』は攻撃、防御、トラップ仕掛け、全てに応用の利く優れたものであるが、数を揃えるには時間が必要であつた。

よってこれを終えると、再び『エリアルライン包囲泡沫』を出すには時間が必要となってくる。

獣を倒すのは早期決着が望ましい、よって、これが最後のチャンスとなるのだ。

対する獣は両肘を腰の横付近に持つて行き、一度大きな咆哮を上げる。

すると紺青色の柱が獣を中心に立ち、ベガの技『エリアルライン包囲泡沫』の泡沫全てを吹き飛ばす。

ベガの『エリアルライン包囲泡沫』が吹き飛ばされ、実質アルタイルと獣の一騎打ちとなつてしまった今、単純な戦闘力でアルタイルが勝てる筈もなく、彼等に勝機は失われた、と思われた。

「動くな。……………どうだ、雰囲気たつぷりだろ？ ………………うん」

アルタイルの声は獣のすぐ後ろから聞こえてきた。

右手に持つ白金色の拳銃“天罰”^{イース}の銃口を獣の後頭部に突きつけている。

『包囲泡沫』^{エリアルライン}で視界を奪い、獣の後ろを取る。

『包囲泡沫』^{エリアルライン}は囷、あくまでも本命はアルタイルの“天罰”^{イース}による攻撃なのだ。

作戦勝ちだな……………うん、とアルタイルは呟き“天罰”^{イース}の引き金をゆっくりと引く。

「ッ、待って下さい！」

不覚にもその叫びによってアルタイルは引き金を引く人差し指の動きを止めてしまった。

叫び、それはヒマナラ村の村人を束ねる村長の孫、ラーナによるものだった。

今までその戦いを呆けながら見ていたラーナだったが、獣の絶体絶命となったとき彼女は気づいたら叫んでいた。

「その人は、スバル君なんですよ！？ もう止めて、くださいよ……………」

その叫びにアルタイルは一度息をつくと、

「大丈夫だ。ロックマンは死んではいけない存在だし、俺達はロックマンを殺そうとしてない……………うん」

「えっ！？ あ、ああ……………す、すいません。あうう……………」

ラーナはアルタイルが別にロックマン^{スバル}を殺そうとしていないことを

知り、それを邪魔した自分の言動に赤面する。

「……………アルタイル！」

「ッ!?」

ベガの叫びに、アルタイルは殆ど反射で後方に跳んだ。

見れば隙を突いた獣の切り裂きが、先程までアルタイルが立っていた場所に炸裂していた。

たったの一振りでも地面の雪が全て薙ぎ払われ、余波さえもアルタイルに襲い掛かる。

アルタイルはその余波が当たるのにも構わず、“天罰”^{イス}の引き金を引く。

パンツ、パンツ、パンツ!! と乾いた音が三発続けて鳴り響くが、その弾丸全てを獣は引き裂いた。

「なっ!? この短距離で……………! ………………うん」

言い終える頃には獣はもうそこには居ない。

アルタイルは勘で後方に向けて白金色の拳銃を撃った。

その予想は的中し、獣は真後ろに居た。

だが獣はそれさえも交わり、一度体勢を立て直すためにか大きく上に跳ぶ。

しかしそれは大きなミスとなる。

「ガアッ？」

大きく上に跳んだ更に上。

そこにはデネブが二本のランスを構えてそこに居た。

“恩恵”^{ハレルヤ}による傷の再生はまだ終わっていなかった。

出血は治まってはいたものの、未だ右肩から左横腹に掛けて大きな

傷跡が残っていた。

だが彼女は確かにそこに居た。獣に圧倒的なダメージを与えるために、傷で痛む体を『嵐劫撃』で鞭打って、彼女はここに来た。

「さつさと戻って来い。……………希望希望」

まず一本目のランスを獣に横薙ぎに振る。

それは獣の爪と衝突し、激しい火花を散らす。だが。

彼女は、デネブは負けない。

ランスで爪を跳ね返し、獣を大の字状態にする。

これは全くの丸腰を意味していた。

「旅して何日目だ？ 四日目だよ。これからって時に、いきなり躓いてるんじゃないよ。分かったら、さつさと戻って来い。そんな奴に負けないで、戻ってくるんだ。これはアルタイル、ベガ、先導巫女、そこに居る女の願いでもあり、私の願いでもあるんだ。……………自身自身」

デネブはもう一本のランスを、振り上げた。

自分の願いも込めて、全てを獣に叩き込むことを決断する。

「戻ったらたつたつとぷりと、働いてもらうからねっ！ ………………」

…微笑微笑」

言葉通り、彼女は微笑しながら、『嵐劫撃』によって速さを上昇させたランスを、獣に振り下ろす。

対する獣の判断も早く、その一撃を自身の爪による一撃で衝突させる。

激しい衝撃と火花、二人の力は互角。
だが片方は持っているのは力だけではない。
更に強いものを持っている。

自分の願いを込めた一撃と本能のままに炸裂する一撃。

勝敗など、言わなくとも一目瞭然だった。

その両者の戦いを遠目で見届けていたのは、深緋色の鳥の姿をした
ブライ。

彼はプロキオンと途中乱入してきたヘリオスの相手を中断してここ
にやって来たが、既にロツクマンは正体不明の三人によって叩きの
めされていた。

だが、彼の姿は普段の青い姿とは全く違ったものだった。

あの猩々緋色の野郎が言っていた事は本当だったな、とブライは思
いながらその鳥の姿を解除する。

「クッ……」

普段のブライの姿に戻った彼はその場に膝を付く。
そして激しく咳き込んだ。

その咳は風邪を引いて起きたような、そんなチャチャなものではない。

喉が熱く、はち切れるかと思った。

漸く咳が治まったと思えば、口の端から赤いものが流れ出してきた。彼は血を吐いていた。

「やはりまだ、扱いきれていない、からなのか……………」

深緋色の鳥に獣化ビーストアウトするのは代償が大きく、激しい反動が襲ってくるのだ。

これを扱うのは困難なようで（事実ロックマンはこれに飲み込まれ暴走していた）、ブライもまだ操れていなかった。

常に気を張っていなければ、いつ飲み込まれてもおかしくはなかった。

『ガ……………』

「ああ、分かっている」

彼のウィザードであるラプラスの言葉（？）を受け、彼は立ち上がる。

（ロックマン。今度、会う時は……………）

そう誓い、彼はこの場を去った。

四十三話 シンデレラと王子様

ヒマナラ山脈を越えるため休憩としてヒマナラ村に訪れていたスバル一同であったが、ヤエバリゾートホテルでスバルはデネブとの約束を破りロックマンと電波変換をしてしまったことで、居場所を特定され、“三本指”であり『日光・月光』にリーダーである“灼熱眩耀”ヘリオスが襲ってきた。

その力は“三本指”の名に恥じず絶大で、瞬く間にロックマンとデネブを蹴散らした。

このままでマズイと感じたロックマンがメテオサーバー（の残り力ス）にアクセスしたのだったが、一つの暴走が巻き起こる。

正体不明の獣の姿となったロックマン。

ロックマンは敵味方関係なく、無差別に襲い始めた。

しかし現れた『夏の大三角形』であるアルティル、ベガ、そしてデネブの奮闘もあってか無事に獣を打ち倒すことに成功。

獣はスバルの姿に戻り、アルティルとベガもすぐに調査に戻った。

あの激闘から三日が経った。

しかし彼等は未だ、ヒマナラ村に居た。

原因は星河スバルにあった。

彼がデネブに敗北し、気絶してから目覚める気配がないのだ。

それはウォーロックも同様でどれだけ呼び掛けても、目覚めなかったのだった。

「……………」

ヒマナラ村の村長の家のベッドで眠るスバルの傍ら、そこにはゴスロリ少女ランドマークの姿があった。

彼女は三日三晩眠りもせず、ただ黙って椅子に座り、スバルの起床

を待っていたのだった。
睡眠の必要のない電波体であっても、それは疲労が溜まるものであった。

デネブからもラーナからも言われたが、彼女は断固として首を縦に振らず、ただただ彼の起床を待った。

そんな中、その部屋の扉が開いた。

現れたのは“擬人化”の状態のデネブ。

「どうだ？ …………… 質問質問」

ランドマークが首を左右に振ると、デネブは息を吐く。

これではいつまで経ってもこの村を出ることが出来ない。

その理由もあるが、何より個人的に星河スバルが目覚めないのは嫌であった。

彼は何時目覚めるのだろうか？ 本当に彼は目覚めるのだろうか？
デネブはそんな重い空気に耐え切れなくなり、ランドマークの座る椅子の背もたれ部分に腰を掛けると、

「昔、シンデレラっていう童話が好きでね。悪い魔女に食べさせられた毒のリンゴですーっと眠るシンデレラが居て、そこにやって来た王子様がシンデレラにキスするとあら不思議、シンデレラは目が覚めたんだって。先導^{ランドマーク}巫女もスバル君にキスしたら、スバル君、目覚めるかもね。…………… 提案提案」

「断る。私は王子ではないからな」

「あれ、断る理由はそこ？ 王子とかそういうもんがなかったら、君、キスできちゃうんだ」

「う、うるさいぞー！」

ポカポカとデネブを叩くランドマーク。

空気も和やかになってきたところで、コンコンと部屋の扉を叩く音

がした。

デネブが了承すると、扉は開き、村長の孫であるラーナがフルーツで一杯の籠を持って入ってきた。

ラーナは一度スバルを見てから、首を左右に振るランドマークとデネブに視線を移す。

「これ、お昼ご飯です……」

そうやってラーナは籠をデネブに差し出す。

籠の中には病人のためか、フルーツが沢山入っていた。

村長とその孫、ラーナは律儀にも毎食のご飯をスバルの分まで用意してくれていた。

「いつも悪いね。………謝意謝意」

「いえ、これが私にできることですから……」

そうやってラーナはスバルを見てから、部屋を後にする。

デネブも籠をスバルの枕元の棚の上に置き、ランドマークに一言入れてからその部屋を後にする。

再び、ここはスバルとランドマークの二人だけとなった。

ランドマークは自分の記憶がないのは記憶喪失であるからと想っていた。

しかしそれは違った。

WAXAの調査で自分の頭の中には最初から記憶などなかったのだ。その時、ランドマークは落胆した。

だが、今、彼女は落胆などしていない。

自分の記憶が爺と呼ばれし電波体に具現化され世界に散りばめられたことが分かったからと言うこともあるが、落胆した時のスバルの励まし、それがランドマークを元気づけ、力となったのだ。

ランドマークは彼に恩がある。
だからこそ今度は自分の番だ。
ランドマークは小さな唇を微かに動かし始めた。

「辛くも認めよう。すばるは私の恩人だ」

完全になら目線の言葉。

勿論、スバルはそれを聞いている筈がない。

「私はお前と出会ってまだ間もないが、よく分かるぞ。お前はお人好しな奴だ。今までも、そうやって仲間を助けてきたのだろう？」

そして、とランドマークは一度言葉を切り、

「お前は見ず知らずの私を助けて、励ましてくれた」

ランドマークはそこで笑った。

目から流れる涙を誤魔化すかのように。

私は泣いてないぞ、とでも言うかのように、仏頂面のランドマークが今まで見せてこなかった笑みを浮かべた。

慣れておらず顔の筋肉の使い方がよく分からないからか、不器用な笑みだったが、美しい笑みだった。

「全く……、自分で言うのもなんだがベランダから落ちてきた不審者を、自分の部屋に一晚泊める奴が何処にいるんだ？ 本当に、お前はホームラン級のとんだお人好しだ。そして……、最高のお人好しだ」

そこでランドマークは頬に垂れる涙を拭き取り、スバルを見る。
なんら動きはない。

布団の皺が動いた様子もない。

『そこにやって来た王子様がシンデレラにキスするとあら不思議、シンデレラは目が覚めたんだって』

突然、先程デネブが言った言葉を頭に掠^{かす}めた。

何故だかは分からない。

どうして今、それが頭に過ぎったのか分からない。

だが、彼女は不意な衝動に駆られた。

ランドマークは椅子から立ち上がり、眠るスバルの頬にそれをした。

弾力のある頬にランドマークは唇を離すと、何故自分がそんなことをしてしまったのか、激しく赤面する。

真っ白な肌を持つランドマークの肌が、真っ赤なりんごの様に真っ赤に染め上がる。

羞恥心が彼女を襲い、早くこの場から立ち去りたいと言う気持ちになる。

その時、外から騒ぎ声が聞こえてきた。

彼女は気になり、部屋の窓を覗いた。

「なっ　　ッ!？」

その光景にランドマークは絶句し、急いでこの部屋を飛び出した。

「これはまた凄いね……。……………壮絶壮絶」

村長の玄関の扉から外の様子を覗くデネブがそう呟いたのは理由がある。

ヒマナラ村の村人が村長の家を囲むようにして、群がっていたのだ。こうなってしまったのは、スバル達に原因がある。

三日前、スバルは暴走を起こして無差別に人を襲い、村長の孫、ラーナにまで危害を加えるところだったからだ。

それを止めたのはデネブだが、原因を作り出したのもデネブ達なのだ。

そのため村人は暴動を起こしたのだ。

『村を汚す化け物はここを出て行け！』 『あそこにあんな恐ろしい者が居るなんて、怖くて子供達を外に出せないわ！』 『そんな化け物を匿っている村長も、村長を辞めろ！』 『化け物め！ 出て来い！ ブチ殺してやる！』

村人が村長の家を囲い、騒ぎ立てる。

その暴言の中にもデネブは許し難い言葉が幾つもあつた。

デネブは耐え切れなくなり、背負うランスを一本引き抜くが、

「止めてくれ！」

その行動は村長によって止められる。

頭が沸騰していた彼女は村長によって冷静になったので、自分を止めてくれた村長に頭を下げる。

そこに、スバルが眠る部屋の椅子に座っていたランドマークがやって来る。

三日ぶりに部屋から出てきたランドマークに、その場に居る三人、つまりデネブとラーナと村長は驚く。

「ランドマーク先導巫女、一体どうしたんだ？ …………… 質問質問」

「そんなことより、何だ、この騒ぎは！？」

その問いに答えるのは村長だ。

「実は三日前から嫌がらせの手紙とかはあったのだが、遂に暴動を起こし始めてな……………」

「嫌がらせの手紙！？ そんなの聞いてないぞ！」

「当然だよ。教えてないんだから。…………… 当然当然」

ランドマークは下唇を噛みながら、それを聞き流す。

スバルは何も悪くないのに、何故そこまで言われなくてはいけないのか。

その様にランドマークは思いながら、再び暴動に耳を傾ける。

『このままじゃ、化け物が襲ってくる！』『もう、この村も終わりだ！』『化け物が居る村なんて俺は住みたくなんかねえぞ！』

ギツ、と歯をかみ締める音が聞こえた。

それはランドマークのもので、デネブのもので、ましてや村長のものでなかった。

あの温厚なラーナのものであったのだ。

ラーナは本当に怒った。

怒りに我を忘れ、その暴動と自分達を隔てる最後の扉を勢いよく開いた。

「いい加減にしてください!!」

それ程の音量の声を今までラーナは出してきたのであるだろうか？
その声はヒマナラ山脈に響き渡り、やまびことして返ってくる。
暴動を起こす村人も一瞬虚を突かれ、しかし再び騒ぎ始めた。

『化け物を匿う村長の孫だ！ 化け物の仲間だぞ!』 『こつちに来ないでよ!』 『あの娘もきつと化け物だぞ!』 『おい、化け物！
三日前の化け物を出せ!』

ラーナは怒り、一步、近づくが、それは後ろからやって来たデネブとランドマークが腕を掴むことで止められる。

暴徒達がその様子を見て『化け物がまたやって来たぞ!』と騒ぎ始める。

デネブとランドマークも勿論、怒りが湧く。

だが何ができると言うのだ、一発殴りに行くのか？

そうすれば悪化するだけだ。

そんな中、暴徒の中から、一人の男が現れる。

「いい加減にしねえか！ テメエ等!!」

怒声と共に現れたのは彼は顔に傷を付け、銜えタバコをしている不良。

スバルが銭湯で出会った一人、不良のお爺さん、吉田さんだった。

「ヒマナラ村の品を下げては駄目だろう?」

続いて暴徒を掻き分け現れるのは、同じくスバルと戦友である（お爺さん目線）ガリ細のお爺さん、坂本さんだった。

「ああ、それは全くの同感だ」

そして最後に輝かしい光と共に現れたのはハゲ頭のお爺さん、関口さんだった。

「お前達……………感動感動」

「昨日の敵は今日の友、つてな」

「昨日ではなく、三日前だけどね……………」

「あ、ちよつと髪が乱れちゃった」

デネブとその変態三人組は言葉を交わし、三人組は暴徒から離れ、ラーナ、ランドマーク、デネブと合流する。

暴徒からは『あいつ等、裏切り者だぞ』等の声が聞こえるが三人組は全く気にした様子もなく、ただ淡々とそこに佇んでいた。

やがて不良のお爺さん、吉田さんが銜えタバコを右手に持つと、

「テメエ等、ホント大人げねえな」

『何だと、この裏切り者！』

暴徒のから怒声が返ってくる。

吉田さんは銜えタバコを再び口に含むと、

「俺はアイツを信じるぜ」

すると同意するかのように、今度は坂本さんが口を開く。

「あの子は私達の戦友です。過ごした日々は短いですが、でも」

その言葉を続けるように関口さんは口を開く。

「俺達はアイツが優しいっていうことを知っている」

だが暴徒達はその説得を聞かず、再び騒ぎ始める。

『だからどうした！』『そうだそうだ！ 現にあの化け物は人を襲ったぞ！』『優しいなんて関係ないんだよ！』『化け物はさっさと出て行け！』

暴徒達は騒ぎ、

ラーナは怒りを顕わにし、

デネブは暴徒を睨み、

ランドマークは下唇を噛み、

三人組は冷静に暴徒達を眺める。

バンツ！ という音がその場に響いた。

あれほど騒がしかった場が、一瞬にして沈黙で包まれる。

原因、それは、星河スバル。

眠りから目覚めたスバルが村長の家から出てきたのだ。

いつもの赤い服の上に粗末なボロ衣を羽織り、首にはマフラーを巻き、大きなリュックを背負っている。

暴動など気にもせず、いつもの調子で彼はそこに立っていた。

そして一歩、彼は歩んだ。

驚きと安堵に塗れた顔を浮かべるデネブ、ラーナ、そしてランドマーク。

そんな彼女等に放った第一声は、

「二人とも、ここを出る準備をして」

デネブとランドマークは微笑を浮かべながら頷き、準備のために一度、村長の家へと戻る。

その場で固まったラーナは曖昧な表情を浮かべながら、

「もう、出て行っちゃうの？」

「うん」

簡単に、一言で言い放った。

ラーナはその返事に何か言おうとして、しかし何も言えず、「うん……」とだけ答えた。

そんな様子に同じく目覚めたスバルのウィザード、ウォーロックは耐えかね、

『今日出る予定だったんだ。別にこの騒ぎは関係ねえよ』

ウォーロックには（極めて）珍しく、女をフォローする。

今度はスバルは、スバルの戦友、坂本さん、吉田さん、関口さんと顔を合わせる。

言葉は要らない。

ただ握手を交わし、スバルはラーナに背を向け、歩み始める。

暴徒達はその化け物が近づくことに恐怖し、まず一人が使用済みの缶詰を投げた。

ガッ！ と音を立てて、スバルの額に缶詰が当たった。

当たり所が悪かったらしく額からは出血していた。

だがスバルは顔色一つ変えず、その歩みを止めない。

『あいつ等……ッ！』

「僕は大丈夫だよ。だから、手は出さないですよ」

スバルは額からダラダラと流れる血も構わずに微笑を浮かべる。

暴徒達はその威圧感に押され、スバルの行く道を自然と開けていく。次の瞬間、スバルは思いつきり拳を地面に叩きつけた。その行動に暴徒達は驚き、後ずさりをする。

「クソツ……！ 村長のせいでのこの村を出ることになっちまった。折角、この村を俺のものにしようと思ったのにな……」

スバルはその場で即興で思いついたホラを吹く。

その暴露に暴徒達は困惑せざる終えない。

何故なら、今まで化け物を匿っていた村長が一変して、化け物を追出した英雄になったのだから。

ラーナは何か言おうとして、しかし何も言えずその場で立っていることしか出来なかった。

バンツ！ と再び村長の家の扉が開き、それぞれの荷物を持ったデネブとランドマークが走ってきた。

スバルが起床したことの嬉しさからか、二人は笑顔で頬を紅潮させながらスバルに追いついた。

スバルの額から血が出ていることに驚いた顔をして暴徒達に牙を向こうとしていた二人だったが、スバルが宥める事でそれを止めさせる。

スバル、ランドマーク、デネブの三人は、再び合流した。

「さて、今から何処に行く？」

「何か村長から……ちず？ という奴を買ったぞ」

「地凶ね。一体何の？」

「ああ、海神が向かった先らしい。名前は八チノへ港っていう所らしい。……」

『何処でも良い、さっさと行こうぜ』

少し間が空き、

「また始めようか。……………船出船出」

デネブの言葉にスバルとランドマークは頷き、彼等は歩き始める。三人にして四人は旅を再開し、先の暗い道を歩いていく。

「さて、リンゴでも食べようかな」

「あれっ？ いつの間に……………突然突然」

『何か枕もとの籠の中に入っていたぞ』

「いただきま って、ランドマークちゃん！？ リンゴ返してよ

!？」

「また眠ってもらっては困るからな」

四十四話 ヒマナラ山脈麓病院

暑い日差しが窓を通して差し込み、赤い顔をした少年の顔を照らす。彼の名は星河スバル、ある事情でコダマタウンを出てランドマークとデネブと共に旅をしているのだが、彼は今それを中断してヒマナラ山脈麓病院の第三棟の一人部屋にいた。ヒマナラ山脈麓病院はとても長い名前だが正真正銘このような名前なのだ。

「ヘクシヨンッ！」

また一つ、くしゃみがその病室に響いた。

そして寒気から身震いを一つする。

要するに彼は風邪を引いたのだった。

「やれやれ、相変わらず弱いねえ。……………軟弱軟弱」

「見る！ 私はピンピンしているぞ！」

だって電波体じゃん、という言葉のスバルは喉の痛みから、飲み込んだ。

無事にヒマナラ山脈を抜けたと思えば、これだ。

スバルもこの軟弱ぶりには嫌気が差していた。

「さっさと進みたいのになあ。……………早急早急」

「だったら、べづにびょういんにごなぐでもよがっだんじやないのがなあ……………」

「それは駄目だ。しっかり直していかないとな」

ランドマークはそう言いながら、スバルにティッシュ箱を差し出す。

鼻言葉が相当煩わしかったのだらう、それを察したスバルは喜んでそのティッシュを使わせていただく。本当に体が重い、やはり長い時間あの極寒の風を浴び続けたのが悪かったのだらう。そう思いながらスバルは、ヒマナラ村を出て行った後のことを思い出していた。

『うひょー！ 寒い寒いね！！ でも寒いとき、漢おとことして何か、こ
う、何だろ……。何か燃えてくるよね！！』

『私達は女だからな。その考え方は良く理解できないな』

『そう？ 私は分かるような気がするよ。よし！ こうなったらち
よつとそこの湖で一泳ぎして行こうかな。……………提案提案』

『湖って言っても凍ってるぜ』

『嵐劫撃』！！』

『あーっ！？ 凍った湖がいとも簡単に粉々にー！？』

『ゴー、スウイム！ ……………ダイブダイブ』

『よし！ 僕も泳ぐぞ！』

『風邪、引いても知らんぞ』

やめときゃよかった、という後悔の念がスバルに重く押し掛かる。その場の勢いに任せて実行してはいけないな、とスバルは新たな知恵を学び、この先それを応用していこうと思った。

「 にしても子供は入院医療費が免除されるとは、お得だね。 ……

………「驚愕驚愕」

そう、ここ日本という国は、高校生以下は様々な場所において様々なものが免除されるという法律がある。

スバルがここで入院までして治療という風邪にしてはVIPな対応を受けているのはその法律があり、お得であるからだ。

それがなければ旅をしている三人は金の消費が激しい入院という手段はとらない、風邪程度であればほっときゃ治るレベルだ。

「ま、さっさと治ってくれ」

「了解、了解。望みどおりさっさと治ってやるうじゃ　へブシッ
！」

スバルの調子の悪さと今までの短いながら一緒に居た経験からしてデネブは、

「ああ、これは、もしかしたら、恐らく、ひよっとしたら、一週間ぐらい経たないと治ってくれないかもね。……………予測予測」

その日の夜。

スバルは無性にトイレに行きたくなった。

「さっ、どっしっ……」

『どうしようもなにも、トイレに行けばいいじゃねえか』

そう簡単に言うが夜の病院の廊下を歩き、恐怖に耐えながら、トイレに向かうのはかなりの苦痛にはならないだろうか。

スバルはそんなことを脳内で考えながら、掛け布団を被り、無理やり眠りに付こうとする。

しかし一度感じてしまった尿意を拭い去るのは難しく、結局彼はトイレに向かうことにした。

横開きの扉を開けると、非常用に足元に緑色の明かりがあるだけで（これが逆に恐ろしかったりもする）殆どが真っ暗な世界だった。

「無理だ。これを突破するにはナースコールで看護婦さん呼んで一緒にトイレに行くか、電波変換しかない」

『トイレぐらいで大袈裟だぞ。だいたいトイレはあの廊下の角を曲がればすぐじゃねえか』

「分かってないなあ……。いいかい、ロック？ ホラー映画とかは角を曲がると大体出てくるんだよ。バクッ！ って喰われちゃうんだよ」

『いつもなら「お化けなんていう科学で実証できないものを僕は信じないよ（ブルブル）」とか言うのにな』

「“ブルブル”って何だよ！？ 僕はそんな効果音、出した覚えはないよ！？」

でもロックの言う通り少し大袈裟かもなあ、とスバルは思いながらも、目の前に広がる無明の世界に恐怖する。

だが尿意も彼を襲う。

恐怖と尿意。

スバルは尿意に敗北することとなる。

「妥協しようじゃないか。恐怖……！」

スバルは尿意に襲われる股間を両膝を曲げることで押さえ込み、無明の世界へと足を踏み入れる。

（大丈夫だ、近くにはロックが居る。いざ奴が出たら、ロックに倒してもらうか、友達になっちゃえばいいんだ。大丈夫だ、星河スバル。お前ならできる……！）

そう、角を曲がればすぐトイレに着くんだ。

焦る必要はない、とスバルは思いながらも、思わず背中を壁に張り付け一歩一歩ゆっくりと歩いていく。

季節は夏であり蒸し暑い夜だったが、スバルは暑さではない汗をビツシリと大量に掻いていた。

あともう少し、あともう少しで、曲がり角にたどり着く。

あと三步、思わずスバルは笑みを漏らしてしまう。

『シヨンベンは漏らすなよ』

「分かってるよ！」

スバルはそう言いながら、腹部に更に力を込める。

そして彼は目を瞑りながら、足を進め、曲がり角を曲がった。

ブワッ！ と毛が逆立つような気がした。

原因は分からない。

まあ勿論、目を瞑っているからだ。

だから彼は原因を確かめるため、恐る恐る瞼を上げてみる。

そこに居たのは紫色の炎。

それはスバルの行く目的地であったトイレの前に居た。

キョトン、とスバルは瞬きを何回かして、もう一度その紫色の炎を視界に捉える。

だが、そこに居たのは紫色の炎などではなかった。

ピンクに近い紫色……若紫色の長い髪を横で二つに括り上げ、更にその上に室内であるにも拘らずツバ付きの帽子を被った少女だった。ランドマークより少し大人びた、小学三年生程であろうか。

彼女は車椅子に乗っておりこちらに手を差し伸べていた。

「立てる？」

「へっ？ えっ、ああ、うん……」

スバルは情けなくも彼女の手を借り、立ち上がる。

スバルはもう一度彼女を見て、先程の紫色の炎は何だったのか疑問に思う。

しかし自分より小さな子供の前で尻餅をついてしまうとは、スバルは思わず赤面する。

漏らさなかったのが幸いであろう。

「仕方ないよ。夜は恐怖が多いからね」

(……………?)

彼女はそう言い残し去っていた。

残されたスバルは彼女の背中を目で追っていくが、自分がトイレに行く途中だったのを思い出し、男子トイレへ駆け込んだ。

四十五話 勘

「……ということがあったんだよ」

トイレの騒動から一夜が空け、スバルは病室にやって来たランドマークとデネブに、夜に起きたことを話した。
しかしそれはどうにも信じられないことであり、一緒に居たウォーロックもそんなものは見ていないと言うのだ。
目撃者は唯一人、星河スバルだけなのだ。

「ようは、見間違いだろう?」

「うん。どうにもそんな感じには思えなかったんだけどなあ……」

するとデネブが手をポンツと叩いて、

「じゃあ、実際にその女の子に会ってみようか。………提案提案」

『ま、そいつが何処にいるか分かったらな』

ここヒマナラ山脈麓病院は十階建て、加えて渡り廊下で繋がった棟が五つという大規模な病院だ。

何の手掛かりもなしに一人の少女を探し出すのは難しいであろう。

「看護婦に聞けば良いんじゃないのか?」

「いや、親戚でもないのにそんなこと聞いても教えてくれないよ。ストーリーカーの変態野郎と間違われても困るしね」

「強^{あなが}ち間違いではないと思うよ。女湯に侵入したスバル君だし。……」

………「暴露暴露」

『ハッハ！ それは確かに、だぜ!』

突然、スバルはランドマークに問答無用で顔面をグーで殴られた。熱は治まってきたものの、まだ少し熱のある病人であるにも関わらずだ。

そういえば女湯侵入に関してはランドマークちゃんに言ってなかったなあ、とスバルは思いながら赤く腫れた頬をさする。

床に倒れこんだスバルを、ゴミでも見るかのような目でランドマークは見下ろし、

「その女を別に探す必要もないじゃないのか？ 何の繋がりもない、夜、たまたま出会った女なのだろう？」

何故か怒ったように吐き捨てる。

まあ、言っている事は正しい。

スバルはその少女を探す必要などない。

だがどうしても彼はその少女のことが気になってしょうがない。

「どうもあの娘、気になるんだよね……」

『おっ！？ スバルが恋愛って奴に目覚めたぞ！！』

「すっ、すすすすすすすばる！ それは本当なのか！？」

ランドマークは凄惨な形相でスバルの首をガクン！ガクン！と前後に激しく揺らす。

何をそこまで焦るのか、とスバルは思いながらランドマークを必死に止める。

彼女は木の實を頬に溜め込んだリスのように頬を膨らまし、デネブは子供を温かい目で見る母親のような感じだった。

とりあえず誤解を解く為にスバルは口を開いた。

「別にそういうんじゃない……そうだなあ。こう、勘って奴だよ
ね」

「勘？ そんな不明確な理由で、そこまでか？」

まあね、とスバルは首を振り、ベットから出る。

そして病院から貰った緑色の患者衣の上に持参の黒のジャージを羽織ながら、

「結構、これが当たったりするんだよね」

相談の結果、少女搜索は病室総当りということに決定した。

時間はそれなりに掛かるが、これが一番正確な方法だ。

まあ、正直に言ってしまうと三人はとても暇なのだ。

「しかし広いね。僕の知っている病院でもこれ程のは見たことないよ」

「そう言うけど、広いと探すのも面倒臭いよ。………面倒面倒」

デネブはそう言いながら、背負うランスを弄る。

その数は二本と減ってしまっている。

一本は、隣を歩く星河スバル（正確には暴走を起こした獣）の手によって押し折られた。

それに気づいた同じくスバルの隣を歩くランドマークはデネブのラ

ンスを指差し、

「もう元には戻らないのか？」

「いや、これはやろうと思えば直るよ。このランスは私の肉体同然なんだからね。……………一緒一緒」

じゃあ直せよ、とスバルは呟きかけたが、それよりも気になることがある。

獣だ。

スバル、ウォーロックは獣になった間の記憶がない。

ヒマナラ村を出た後、大体の話はデネブから聞いた。

しかしそれは俄には信じられるものではなかった。

デネブに致命傷を負わせ、ランドマークとラーナを襲いそうになった。

これはスバルは重く認識しており、今でも獣の話となると恐縮してしまう。

「そういえば、すばる。治療はどうしたんだ？」

「ばっくれた」

『もう風邪もほぼ治ったし、退院通知も出してきたんだとよ。全く一体俺達はここで何してるんだらうな？』

完全にスバル達がここに居る意味がなくなったのだ。

もう旅を再開させても良いであろう、だがスバルはどうしてもあの少女が気になった。

何が彼をそこまでさせるのか、勘だ。

「悪いね、付き合せちゃって…………、でもどうしても気になってさ」

「何をそこまで気にするのか分からないけど、面白そうだしね。…

……………興味興味」

三人にして四人は病院の廊下を歩く。
何故歩くか、そう、スバルの勘を頼りにしてだ。

四十六話 負

朝飯も昼飯も食べずに、午前九時から始めて午後五時の八時間経って、漸くスバル達三人は件の少女を見つけ出すことに成功した。

病室は十階の病院三棟にある一人部屋だった。

病室の外の壁に控えめに出されているリアルウェーブの病室名札を見る限り、彼女は九重シアルという名であるらしい。

と三人は病室の横開きの扉の隙間から彼女の姿を覗いていた。

ダルマ落としてのダルマの様に並ぶ三人は不審だった。

ダルマの一番上のデネブは彼女に……シアルに聞こえないよう小さな声で、

「特に変わった様子もないんじゃない？ ……………感想感想」

すると中段のスバルは扉の隙間からじっとシアルを凝視しながら、

「うーん、確かにそうだね……。あの時は確かに紫色の炎だったのになあ……………」

最後に一番下のランドマークは唇を尖らしながら、

「やはり特になにもないのだろう。さ、分かっただらさっさと旅を続行しようじゃないか」

確かにシアルはベットの上で体を起こしてずっと窓から外の様子を眺めているだけで、スバルの言う様な様子は全く見受けられない。

だがあの時は夜だった、もしかしたら夜が関係するのかもしれない。スバルはそんなことを思いながら、扉の隙間を更に広げようと扉の

取っ手に手を掛けたが、

(わっ！)

勢い余って、横開きの扉は全開してしまった。

ドンガラガツシャーン！！ そんな漫画のような音を立てながらスバル達三人は無様にも前のめりに倒れこんでしまう。

覗く時と同じように一番上にデネブ、中段にスバル、一番下で下敷きになっているのがランドマークと言った具合だ。

そんな激しく、うるさい音は勿論シアルにも届き、彼女は驚いたようにこちらに顔を向けた。

患者衣に若紫色のツインテールにツバ付きの帽子を被った少女。

昨夜出会った少女で間違いない、スバルは改めてそう思いながら、恐る恐る少女を見上げる。

こちらが覚えていても、あちらが覚えていない確率だってある。その場合、この状況はとてもマズイ。

勝手に見知らぬ病室に入るなど（しかも幼女）、結構口うるさく言われるものなのだ。

とスバルは心配し、震えるが、

「あつ、尻餅お兄ちゃんだ！」

シアルはこちらを指差しながら、そう叫んだ。

覚えていてくれたのは助かるが、それは最悪な覚え方だった。

スバルはその悪い印象を消し去るため、何か良い策はないかと講じる。

だが。

講じる頃には三人は。

突如現れたダークスーツにサングラスの複数の男達によって、関節技で手足を封じられる。

「なっ!?!」

スバルはその突然の出来事に困惑せざる終えない。必死の形相でシアルを見上げる。

だが。

そこに彼女は居ない。居るのは紫色の炎だった。

しかし昨夜スバルが見た物とは少し違っていた。

昨夜のものは完全な紫色の炎だったが、今はシアルの体全身に紫色の炎が纏っていた。

彼女は申し訳なさそうな顔をしながら、取り押さえられる三人を見る。

唇が僅かに動いた。

だが。

声が聞き取れない。

しかしスバルは確かに見た。

ごめんね、と唇は動いていた。

「（こ、こいつ等……! ……反抗反抗）」

「（駄目だよ、デネブ。この人たちの前で力は使わないでよ）」

スバルは暴れるデネブを落ち着かせる。

妙な反抗をして反感を買いたくないからだ。

すると三人の前に一人の着物の老婆が出てきた。
彼女は三人を見下ろしながら、

「申し訳ありません。しかし、これは貴方達のためでもあるのですよ」

ガッツ！ と脳が揺れる感覚がした。

それはダークスーツの男によって振り下ろされた鈍器がスバルの頭に直撃したものだ。

恐らくデネブとランドマークも同じくこれを喰らってしまったことだろう。

薄れ行く意識の中でスバルは老婆の声を聞いた。

「深く関わってはいけないのです。……彼女は負なのですから」

所変わって、ヒマナラ山脈から西に数百キロ離れた町。

寒さはヒマナラ村に劣るものの、その町は充分と言えるほど寒く、夏であるにも拘らず今も雪が降り注いでいた。

しかしメインストリートにその寒さに負けない熱い男が立っていた。男は半ズボンに半袖のシャツ、更にその上に袖無しの服を一枚着込んでおり、寒いこの町で過ごす格好とはかけ離れていた。

男の名前は“豪傑豪壮”アルデバラン。

『冬の大六角形』の一人である。
今は電波体の姿ではなく“擬人化”を使い、人の姿をしている。

数日前、爺と呼ばれし電波体から命令が下った。

『ロックマン殺害保留』

“灼熱眩耀”ヘリオスからの報告によれば、ロックマンは鍵となった。

“磊落多情”プロキオンからの報告によれば、ブライは鍵となった。
まだ決まったわけではないがほぼ決定と断定してしまっただけで、と
爺と呼ばれし電波体の判断だ。

となればロックマンは放って置くのがベストだ。

だが、アルデバランはロックマンと戦いに来た。

完全に独断の行動だ。

理由は簡単。

「はつやく、戦いてえええ!!!」

戦いたいからだ。

殺すつもりはない、とアルデバランは考えているが、なにぶん彼は
不器用なのだ。

勢い余って殺してしまうかもしれない。

だが彼はどうしても戦いたかった。

戦い好きの熱い男なのだ。

「兄ちゃん、兄ちゃん。これ食べてかへん？」

「ううん？」

メインストリートを歩くアルデバランに声を掛けたのは、お土産屋

のおばちゃん。

おばちゃんはお盆に乗せた肉まんをこちらに差し出していた。アルデバランは好意に甘え、肉まんを受け取り口に放り込む。

「、!?」

最高に美味で、声を出すことすら出来なかった。

例えるなら、そう、まさに肉の宝石箱。

アルデバランは瞬く間にそのお盆上の肉まんを平らげてしまう。そして彼は口の端の肉まんのカスを舌で舐めながら、

「これ! いくらだ?!」

四十七話 知らないほうが良い

あまりの寒さにスバルは目が覚めた。

寝転がっていた彼は、まず体を起こした。

後頭部に痛みを感じ、吐き気を感じた。

そこはヒマナラ山脈麓病院などではなく、見知らぬ場所。

野外であるそこは地面に芝生が敷き詰められており、そこが公園であることに気づくには時間は掛からなかった。

もつと彼は状況を確認するため、首をキョロキョロと動かす。

シーソーに乗っている女と少女の姿が街頭で照らされているのが見えた。

女はデネブ、少女はランドマークだ。

彼女等はシーソーで遊んでいるのだ。

暫くそれを楽しんでいた彼女等はスバルが起きたことに気が付くと、こちらに歩いてきた。

「すばる。大丈夫か？」

「あー、ちよつと後頭部が痛いかな。っていうか、ランドマークちゃんは大丈夫なの？」

その問いには、同じくランドマークとスバルの下に歩いてきたデネブが答える。

「先導巫女は“擬人化”状態でも元は最強の電波体だからね。あの程度の攻撃じゃどうもこうもしないよ。……………頑丈頑丈」

『最強、ねえ……………』

「間違つてはいないだろう？ 何せ星一個救った事のある電波体だよ。最強と呼ばれても問題はない。……………事実事実」

するとウォーロックはスバルのハンターから飛び出し、不服そうな顔で告げる。

『FM星の救世主の話は俺も聞いたことがあるだけだ。大体、信じることができねえな。FM星の屈強な戦士、最終電波兵器アンドロメダ。そんな充実した戦力を誇るFM星を危機に陥れる存在が。…百歩譲ってそんな存在が居るとして、それをたった一人で退ける電波体、アルテミスの存在もだ』

ウォーロックはそう言い終えると、人差し指でデネブを指す。

『お前、何か知っているのか？』

デネブは紫色のウェーブがかかった長髪を弄りながら、微笑を含む。それは悠然とも焦慮とも読み取れる表情だった。スバルもランドマークも、そしてウォーロックもその返答を待つ。数十秒経ち、デネブは軽く息を吐き出しながら、

「知らない、と言えば嘘になる。でも君達に教えられる情報はない。………絶無絶無」

『言葉を濁すんじゃない！ お前の知っていることは洗いざらい吐け！』

「残念だけど、今、教えたところでどうにもならない。………無益無益」

それに、とデネブは一度言葉を切り、

「知らないほうがいい。………杞憂杞憂」

デネブの発せられた言葉と同時に感じた圧倒的な威圧感にスバル達

は押し黙る。

デネブは何かを知っている。

だがそれは何かしらの事情で話せない。

ウォーロックはそれに苛立っているようだが、デネブが話さないのは自分達の事を考えているから、とスバルは楽観的に考えた。

場の空気を怪しんだランドマークは一つ咳払いをして、

「すばる。話は変わるが、あの後、私達はあのグラサンの男に車でここまで運ばれてきたんだ」

「……やっぱりここはヒマナラ山脈麓病院じゃないんだね」

シリアスな顔から一転して普段のニッコリ顔に戻ったデネブは、

「……南東方角に約七十キロメートル。………確認確認」

「……?」

突然、話の流れに反する言葉を発した。

スバルは不思議そうに彼女の顔を見ると、デネブはやれやれと言わんばかりの顔をする。

「ここからヒマナラ山脈麓病院の方角と距離だよ。………解説解説」

「お、おい。別にそこに戻る必要はないだろ?!」

デネブはランドマークの言葉を無視し、親指を立てながら、

「どうせ、行くんだろ? ………明確明確」

「………うん!」

スバルはそう言うと、電波変換を行い颯爽とその場を去った。

デネブはそんな彼の姿を見送りながら、横目で面白くなさそうな顔を
をするランドマークを捉える。
大体の予想はつく。

病院でたまたま出会った少女九重シアルを心配（反対の意味になる
が危険視も）しているスバルにランドマークは嫉妬しているのだろ
う。

彼女からしても何をそこまであの少女を心配するのか分からない。
病室を訪ねれば襲われ、車でここまで移動させられた。
気を使う必要もない、寧ろ恨むべき相手なのだ。

だがスバルは彼女を心配する。
約七十キロという長距離であっても彼は彼女の下に行く。

（これではまるで……………）

ランドマークがそう考えた時、

「大丈夫だと思うよ。スバル君は別に彼女に恋慕を抱いているわけ
じゃないしね。……………別個別個」

「なっ!?!」

ランドマークは簡単に自分の心中をばれた事を恥ずかしく思い、顔
をリンゴの様に真っ赤に染める。

ランドマークの様子にかそれとも他の事にか、デネブは微笑を浮か
べ、スバルが去ったウェーブロードを見る。

「丁度、私も気になっていた所だ。遅れて私達も行くのかな。……

……………出発出発」

「あ、ああ……………」

萎んでしまいそうな程に顔を真っ赤に染めるランドマークは黙って、

歩き始めたデネブに付いて行く。

ヒマナラ山脈から西に数百キロメートル離れた町で、

「ん？」

アルデバランは肉まんを頬張りながら、ある一つの電波反応を感じた。

ロックマンだ、とアルデバランは思いながら、一つの肉まんを平らげた。

腕一杯に持っている紙袋に入っている物は全て肉まんだ。

お土産屋のおばちゃんから貰った肉まんが予想以上に美味しく、完全にはまってしまったのだ。

彼は紙袋からもう一つの肉まんを取り出して、それに齧り付きながら、

「フーツ、これを喰い終わったら、趣いてやろうか」

特に急ぐ様子もなく、アルデバランは肉まんの美味しさを楽しむ。

四十八話 再び登場

電波って凄いものだなあ、とロツクマンは改めて実感した。ものの数十分で約七十キロ先にあるヒマナラ麓病院に辿り着いたのだから。

ここで電波人間が数十分も掛かって約七十キロの距離を移動するのはおかしいと思う人が居るかもしれない。

光と電波は波長が違うだけで速さは同じだ。

光は秒速約三十万キロメートルという脅威の速さ、すると電波も秒速約三十万キロメートルと言う速さだ。

ヒマナラ山脈麓病院までの距離は約七十キロメートル。

単純計算で一秒も掛からず辿り着けることになる。

だがここで忘れてはいけないのは電波人間となっても元は人間ということだ。

人間には人間の限界がある、それは電波人間となっても変わらない。もしロツクマンが光速で移動すれば、あっという間に体が耐え切れなくなりお陀仏となってしまうのだ。

だからスバルとウォーロツクは無意識の内に速さにブレーキを掛け、本来出せる速さを削り、単純な電波に移動速度が劣ってしまうのだ。

何にせよロツクマンは無事にヒマナラ山脈麓病院に辿り着いた。

時間は既に九時を回っており、月が地上を照らしていた。

ロツクマンはシアルの病室の窓を外から眺める。

明かりは点いていた。

「じゃ、行くよ」

『おう！ さつきみたいに不意打ちを喰らうんじゃねえぞ！』

ロックマンはウェーブロードを単純な跳躍力だけで跳んだ。冷気がロックマンの頬を刺しながら、夜空を浮かぶ。そのままロックマンは真っ直ぐ。

九重シアルの病室に突っ込んだ。

電波人間の特徴である『壁をすり抜け病室に侵入する』、を実行したのだ。

ベットから上半身を起こしていたシアルは勿論、突然の来訪者に驚き、悲鳴を挙げた。

その悲鳴を合図にダークスーツのサングラスの男が数名病室にやって来て、シアルを守るように囲む。

まず一人、ロックマンに向けて棒状の鈍器を振り下ろす。

前回は不意打ちに驚いたが、今回はそうはいかない。

ガッ！ という音と共にその男は倒れこむ。

「大丈夫。不意打ちだよ」

流石、護衛者と言ったところか。

そのサングラスの男達は激情に任せて追撃はしない。

攻撃のチャンスを探り、距離を取るのだ。

だが、ロックマンは自分から攻撃をするつもりもない。

彼が取るべき手段は唯一つ。

シャンツ！ という音と共にロックマンは光の粒子に包まれた。

そして現れたのは尖がり頭の赤い服を着ている少年。

星河スバルだ。

ただの少年となった彼は口を開きかけたその時。

ガラッ、という音と共に横開きの扉が開いた。

そして病室に入って来たのは着物の老婆だ。
老婆はスバルに、まず丁寧にお辞儀をした。
慌ててスバルもお辞儀を返す。

そして老婆は頭を上げると、彼の顔を直視し、

「また貴方ですか……。忠告はした筈ですが……………」

「はい、どうしても気になりました……。あっ、別に仕返しに来た訳ではありません。ただ……話をしに来たんです」

「……………」

老婆は彼の度胸を尊重してか、護衛のサングラスの男に対し、アイコンタクトを取る。

すると男達は一度お辞儀をすると、足並みを揃えてその病室を出た。男達が出るのを待ってから、老婆は口を開いた。

「まず質問をさせて頂きます。貴方は一体何のつもりでここに再び訪れたのですか？」

「はい、だからお話を……………」

「ええ、ですから、貴方は話を聞いて何をしようと言つのですか？」

老婆はスバルの返答を待つ。

スバルはただ自分の考えを話すだけだ。

「助けない、って言ったら駄目ですか？」

「……………」

「特別な理由なんかありません。ただ純粹に彼女を……九重シアルちゃんを助けないんです。……あの紫色の炎、何か嫌な予感がするんです」

勘ですけどね、とスバルは後に加える。

老婆は顔に刻まれた皺を更に深く刻みながら、首を横に振る。

「……無関係な方にこれを話すのは荷が重過ぎます。どうかお引取りを」

『いや、俺達は帰らねえぞ。話を聞くまではな』

「私達にまたあの方法を使わせないでください。これは私達のもん

」

ポント、と言葉が終わる前に老婆の肩に小さな手が置かれた。

それはベットから降り、車椅子に乗り換えたシアルの手だ。

老婆は驚きに目を見開き、彼女を……シアルを見る。

シアルはもう片方の手で頭の上のツバ付きの帽子の位置を変えながら、

「もう良いよ。話そう、全部」

「で、ですが……！」

「あの手法を取って、またここにやって来たのは尻餅お兄ちゃんが初めてなんだよ。信じようよ」

「……………」

老婆は渋々首を縦に振り、再びスバルに顔を向ける。

そしてもう一度溜め息をつきながら、

「話しましょう、全てを。後悔はしないで下さいよ」

四十九話 九重家の宿命

老婆は病室に持ち込んだ座布団の上で正座をしていた。

老婆の座布団を貸してもらって老婆と向き合い正座をしているのは星河スバル。

シアルはベットに寝転がり、ウォーロックはハンターV.Gの中で老婆の言葉を待つ。

「今までにもシアル様を心配し、この話を聞いたものは何人も居ます」

老婆の話の前置き、暗に最終通告のつもりなのだろう。

だがスバルはただ耳を傾ける。

「そしてこの話を聞いた後、シアル様を助けようとお考えになる人は今までで一人も居ません」

だからどうした、スバルはそう思った。

彼は何としてでも彼女について知り、そして助けたいと思った。

「二百年前のお話です」

「ッ!？」

いきなり、あまりのスケールの大きさに、動じないと誓ったスバルの心が大きく揺れた。

たった一人の少女の話に二百年前の話が出てくるとは思いもしなかったからだ。

老婆は続ける。

「ある悪の科学者が一つの最凶最悪のプログラム、『ネビュラグレイ』を作り出しました。人間の怒りや憎しみの悪の心をデータ化したプログラムです」

「悪の科学者は『ネビュラグレイ』を使って全世界を悪に染め上げようと思いました。しかしそれは二百年前の英雄達によって阻止させられてしまいました」

「これでこの事件は終わったかと思われました。しかし『ネビュラグレイ』はバックアップが取られていたのです。『ネビュラグレイ』は自分の意思で再び全世界を恐怖に陥れようと動き出します。勿論、二百年前の英雄達はそれを阻止するため、再び『ネビュラグレイ』と激突しました」

「しかし人間の怒りや憎しみの悪の心をデータ化した『ネビュラグレイ』は人間に悪の心がある限り何度でも復活しました。不死身の存在の『ネビュラグレイ』を英雄達は止める事が出来なかったのです。成す術がなくなった科学者達はある決断をします。『ネビュラグレイ』の永遠の封印です」

「しかし問題がありました。肝心の『ネビュラグレイ』を封印する場所がなかったのです。科学者達は『ネビュラグレイ』が世界を侵食していく中、考えに考え、そしてある一つの策を思いつきました。彼等はそれを実行し、無事に『ネビュラグレイ』を封印することに成功したのです」

老婆はそこで一度言葉を切り、そして最後に付け加えた。

「行き着いた先、それは人間の体」

ビクッ！ とスバルは震えた。

そして今度はベットに寝転がるシアルを見る。

彼女は曖昧な笑みを浮かべる。

「もうお分かりでしょうか？」

老婆は苦しそうに、だがしっかりとした口調で告げる。

「二百年前『ネビュラグレイ』を封印した人間は九重家の人間であり、そこに居る彼女、九重シアル様こそ『ネビュラグレイ』を代々封印し続ける九重家の人間」

老婆は止めにと言わんばかりに声を張り上げる。

「彼女こそ『ネビュラグレイ』封印家系九重家四代目九重シアルです！」

その場に沈黙が訪れた。

あまりの残酷さにスバルとウォーロックは声すら失った。

シアルの体には二百年前のプログラムが封印されている。

それも全世界を悪に染める程の力を持ったプログラム、『ネビュラ
グレイ』をだ。

シアルは見た目は小学三年生から小学五年生の幼き少女。
だが彼女は人一倍の重りを抱えていたのだ。

老婆は何処からともなく出した茶の入った湯飲みを啜った後、

「どうですか？ シアル様の重み、理解できましたか。そして恐怖
しましたか？ 貴方にはどうしようもない事なのです」

スバルは確かに恐怖した。
だが。

それは目の前に居る少女に対してではない。

それを黙認している世界に対してだ。

日本政府がこれ知らない筈がない。

日本政府全員が知らなくとも、少なくとも誰かは知っている筈だ。
だが、それを公表しない。

何故？

二百年前の人体実験に近いものを公表したくないから。

スバルはそんな世界に恐怖した。

「……ですから、これを公言しないでお引き取りください。下手を
したら貴方まで巻き込まれますよ」

だからといって、シアルを助けてはいけないと言っただけではない。

シアルの中に不死身の化け物が居るからシアルを助けてはいけない。断言する、そんな筈はない。

その程度のことなど理由にならない。

だからこそ、助ける。

スバルはそう思いながら、座布団から勢いよく立ち上がる。だが。

「あーっ！ しび、しびれ……た」

慣れていない正座を長時間していたからか、足が痺れ、スバルは無様に前のめりに倒れこんでしまった。

キョトン、とシアルと老婆は無様なスバルを見る。

スバルは足の痺れが切れるのを待つが、全く消える気配がしなかった。

今度から座る時は体育座りにしよう、とスバルは心に決めながら冷たい床を堪能する。

『やれやれ。全く緊張感の無い奴だ……』

「あーっ、絶対君には言われたくない言葉だね……」

対する老婆はスバルと違い華麗に座布団から立ち上がり、湯飲みをベットの枕もとの台に置いた。

そしてスバルの醜態に溜め息をつき、再びスバルに視線を戻す。

老婆の視線に気づいたのかスバルは、顔を床に密着させながら、

「僕は結構そういう意外な出来事には慣れっこですけど、二百年前の話とは驚きましたよ」

「全く驚いている様子は見受けられません……」

「ああ、もう驚いてませんから」

スバルは簡単に言い返し、手で足の裏を触って確認する。

相変わらず痺れたままだったらしく、ビクンッ！ と電気が流れたように体全身を震わせた。

老婆は目を細めながら、

「驚いて、いない？」

「はい。だってやっぱり目の前に居るのは、か弱き乙女じゃないですか」

「……先程の話を信じていないと言つことですか？」

違いますよ、とスバルは顔を床に密着させながら首を左右に振る。

「話は信じます。『ネビユラグレイ』とか言う化け物を体に封じていると言つことも信じます」

じゃあ……！、と老婆が口を開く前にスバルが先に告げる。

「だからといって彼女は一人の少女です。体に化け物が居るから彼女を恐れると？ そんなものクソ喰らえです、全然関係ありません」

今まで、この話をしてきて彼女を恐れなかった者など居ない。

老婆ですら彼女には少なからず恐怖感を持っている。

だが目の前の少年はどうだろう？

彼の眼が嘘をついているのだろうか。

老婆にはそうは見えなかった。

本当に九重シアルという存在を恐れていない。

唐突に嗚咽を耳にした。

それはベットに寝転がるシアルのものであることにすぐに気づいた。

老婆もウォーロックも、そしてスバルも。

シアルは泣き止まない。

それは悲しみからではない。

嬉しさからの涙。

自分と言う存在を認めた、嬉しさの涙からだ。

大鹿の顔に屈強なボディを持った強大な電波反応を持った電波体、

“豪傑豪壮”アルデバランがウエーブロードを滑っていた。

その向かう先は最後にロックマンの電波反応を確認した場所、ヒマナラ山脈麓病院だ。

アルデバランは爺と呼ばれし電波体の命令に反して行動している。

完全なる独断、理由は単純に戦いたいから。

ただそのためだけに爺と呼ばれし電波体の命令を無視した。

彼の頭の中は今から戦うことができると言う喜びしかないのだ。

だからこそ。

横から迫ってくるもう一つの巨大な電波反応を感知できなかったのかもしれない。

バコンッ！！ という轟音が鳴り響くと共にアルデバランは横に吹っ飛ばされた。

ウェーブロードから外れて空中数十メートル吹っ飛ばされた後、アルデバランは態勢を立て直し、自身が先程飛ばされた場所を見る。ウェーブロードの上、そこには紫色を基調とした刺々しいボディを持った見覚えのある電波体が立っていた。アルデバランはその名を呼ぶ。

「フーツ、デネブかあ！」

スバルとランドマークと共に旅をしているデネブがそこに居たのだ。

“擬人化”状態ではない、れっきとした電波体としての姿だ。

彼女は背負う二本のランスを両手に一本ずつ持つと、

「アルデバラン。お前をこれ以上進ませない。……………妨害妨害」

「フーツ、それは俺に対して言っている事は分かっているなアアアア！」

デネブは皮肉げにやけると、ゆっくりと頷く。

そうか！ とアルデバランは叫ぶと右手を横に上げる。

右手に握られたのは三メートル程の朽葉色くちはいろの棒。

彼の自慢の宝具だ。

「アイテム鉄鎚”、いきなり本気だね……………。……………本気本気」

デネブはそう呟きながらウェーブロードを跳び、アルデバランに飛び掛る。

五十話 ゲームオーバー？

デネブとアルデバラン、両者の激突は周囲に規模の大きい被害を齎した。

その様な大規模な激突が数キロ先のヒマナラ山脈麓病院にまで響いていた事は言うまでもないだろう。

足の痺れが漸く取れたスバルは病院が激しく揺れていることで再び後方に尻餅をついてしまう。

それ程に大きな揺れだったのだ。

同じく病室のベットに腰を下ろしているシアルも立っている老婆もその激しい揺れに手近の物にしがみ付いていた

何が起こったのかスバルには分からなかったが、嫌な予感は確かにした。

それは見事に的中することになる。

『スバル！ 北西方角に約三？ 四……キロメートル？ ああ、もう知らん！ 数キロから数百キロメートルの間に巨大な電波反応が二つあるぞ！ 片方はデネブだ！』

「ロック！ 大雑把過ぎるよ！」

数キロから数百キロって範囲広過ぎだろ！？ とスバルは叫びながら、立ち上がる。

ウォーロックが大雑把過ぎて適確な場所は分からないが、方角は多分合っている。

ならば北西にずっと進んでいけば（多分）その場所に辿り付く事が出来る。

「じゃ、行くか」

「……、一体何処に行くのですか？」

老婆は眉を顰めながら聞いた。

視線を少し横にずらせば心配そうなシアルの顔が見える。

フツ、とスバルは微笑してから二人に告げる。

「戦っているのはシアルちゃんだけじゃありません。僕だって戦っているんですよ」

ヒマナラ山脈麓病院から数十キロメートル離れたウエーブロード。

ここでは両手にランスを持ったデネブと右手に“鉄槌”^{アイムトル}を持ったアルデバランが激突していた。

地上から離れたウエーブロードからでも、二人の激突は周囲に甚大な被害を齎した。

道なりに埋められた並木を折り曲げ、大量の土を舞い上げる。

周囲が田舎であったためか、人間への被害は起こってはいないのが幸いか。

デネブは地上に注意を払いながらも、自身のありったけの力でランスを振るう。

対するアルデバランはデネブの振るわれたランスに“鉄槌”^{アイムトル}で応え

る。

ズウガツ！ という武器と武器がぶつかった音とは思えない轟音を鳴らしながら、球形の衝撃波が均等に炸裂する。

数秒間、互いの武器はぶつかり合い、細かい電撃が走る。

その勝者はアルデバラン。

「又ウウウウンツ！！」

「^{ファイナル}鉄槌」でランスごとデネブの体を吹っ飛ばす。

デネブは一秒も経たずにウエーブロードから落とされ、緑が生い茂るそこそこ大きな山へ真っ直ぐ突き刺さる。

アルデバランの力量が強すぎるせいか山に突き刺さっても尚、余力がデネブの体を下から上へと駆け上がる。

土が舞い上がり、大量の樹を破壊した。

その破壊力は山を四分の一削り取るほどであった。

「い、いてて……。洒落にならない力だな……。……。化物化物」

山の斜面で停止したデネブは背中を斜面に預けながら、両手の指をピクピク、と動かした。

五体満足か。……。幸い幸い、と呟きながら何とかデネブは立ち上がり、そこで気がついた。

先程デネブが山に激突した際にできた大量の瓦礫が、まるで命が吹き込まれたように動き始めたのだ。

最初はカタカタと、そしてそれは強まり、遂には重力に逆らって浮き始めた。

それは数個ではない、まさに無数と呼ぶべきもの程。

そしてその瓦礫の向かう先に視線をずらす、そこでデネブは体を強張らせた。

アルデバランの持つ朽葉色で棒状の宝具“アイムトル鉄槌”にその瓦礫全てが張り付いていた。

磁石が砂鉄を吸い取るように、“アイムトル鉄槌”が瓦礫をくっ付けていた。デネブはそこで思い出した。

アルデバランの持つ宝具、“アイムトル鉄槌”の特性を。
“アイムトル鉄槌”。

それは棒状の物ではあるが、それは真の姿ではない。棒に瓦礫が張り付いて、初めて“アイムトル鉄槌”と言う。そして今。

“アイムトル鉄槌”は真の姿を晒した。

朽葉色の棒に直径三メートルにもなる球体の巨大な瓦礫が出来上がっていた。

アルデバランは調子確かめるように一度、それを横に薙ぐ。ブオオオン！ という音が巻き起こり、その場を威圧で押しつぶす。

「行くぞおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお
おおおおおおおおおおお！..!」

アルデバランはその肥大化した“アイムトル鉄槌”を上に掲げ、そしてそれを一気に下に振り下ろした。
朽葉色の棒から巨大な瓦礫分かれ、真っ直ぐ地上へ突き進む。
その狙った場所の中心点には、デネブが居た。

「手加減もしないようだね。……これは死ぬ、かもね。………危
機危機」

デネブは自分に接近してくる巨大な瓦礫を見る。

摩擦熱が発生させてその巨大な瓦礫の表面は真っ赤に染め上げ、大きさを縮小させていく。

だが、威力は高い。

それも一撃でデネブを消し去る程の。

(やれやれ、もうリタイヤ、ゲームオーバーってことなのかな。…

……残ね)

五感を奪い、その場を真っ白にさせる。

ゴオオオオン!!! と爆音が響いた。

それに伴い黙々と真っ黒な雲が上に向かって発生する。

アルデバランはそれを煩わしく思い、瓦礫が取れて棒だけとなった

“アイムール鉄槌”を下から上に薙ぐ。

それによって風が巻き起こり、その真っ黒な雲を更に上に吹き飛ばす。

数分後、完全に雲は取り払われ、その場には平地が広がっていた。

一つの山と一体の電波体を消し去ったのだ。

真っ黒な煤すすの様なものが、先程まで山があつた場所に散っていた。

遅れて、上空に舞い上がった小石が地上に降り注いだ。

大量の瓦礫が平地に積まれていった。

その様子をウェーブロードから眺めていたアルデバランは、

「ッシャアアアアアアアアアアアアアアア!!!」

勝利の咆哮を上げ、攻撃態勢を崩した。

そんな彼は。

何の前ぶれも無く。

横に吹っ飛んだ。

「、！？」

アルデバランは数百メートル吹っ飛ばされ、ツバウンドした後、ウエーブロードに体を引きずった。

そしてアルデバランは細かい息を吐きながら、顔を上げ、視線を前方に移した。

そこには。

二体の電波体。

片方は先程自らの手で倒した筈の刺々しいボディの電波体、デネブ。そしてもう片方はアルデバランには初対面、だが狙っていた相手、ロックマン。

ロックマンがデネブに肩を貸し、ウエーブロードに堂々の立ち姿で、そこに居た。

アルデバランは不意打ちに痛む体も忘れ、目の前の狙っていた敵に鼻を荒げて興奮する。

アルデバラン、ロックマン、二人の距離は約百メートル。

しかしアルデバランはしっかり、小さく動くロックマンの唇を見た。それはこう動いていた。

お前の相手は僕だ、と。

五十一話 戦鬪バカ

避難通告された。

聞く話によると数十キ口先で大規模な爆発が起こったらしい。

その被害がこちらに及ばないとは断言できないため、ここ、ヒマナラ山脈麓病院に先程のような処置が出たのだ。

代々『ネビュラグレイ』を封印してきた九重家の四代目九重シアルはベットから車椅子に乗り換えた。

そして車椅子は彼女の側近である老婆によって押され、廊下を進んでいく。

無論、この病院から出るためだ。

廊下で看護師が患者の避難のため忙しく動いている様子をシアルは横目で眺めながら、廊下を進んでいく。

長い廊下を抜けて、やって来たのはエレベーターだ。

シアルと老婆はそれに乗り込み、一階へと移動する。

実はこのエレベーターは九重家専用のものであり、一般には使われていない（だから二人以外誰も乗っていない）。

病院側には大体の事情は話しており、病院側はシアルを危険視扱いしているためこのように普通の患者とは別の物が用意されているのだシアルにとってそれは助かるのだが、あまり好ましくも思っていないかった。

彼女も他の人と同じように生きていきたい、そう思っている。

だがそれは叶わない、ここに不死身の化物がいる限り。

そう悲観的に考えていたシアルはふと、トンガリ頭の少年の言葉を思い出していた。

『彼女は一人の少女です。体に化け物が居るから彼女を恐れると？

そんなものクソ喰らえです、全然関係ありません』

自然と笑みがこぼれた。

初めて投げかけられたその言葉。

それは温かく、そして心地の良いものであった。

「どうしたので御座いますか？」

「な、なんでもない」

「？」

老婆に指摘され、初めて自分の顔が綻んでいた事に気づいたシアルは急いでそれを戻した。

ピンポン、と一階にたどり着いた合図の音がした。

二人はエレベーターを後にし、すぐ近くにある玄関から外に出た。まだ避難している人はおらず、シアルと老婆が一番乗りだった。

「シアル様、外はお冷えになります。どうぞこれを……」

「うん。ありがとう」

老婆から貰った毛布を自分の体に掛けながら、トンガリ頭の少年が向かった北西の方角に首を動かした。

夜であるにも拘らずそこだけ空が真っ赤に染まっていた。

シアルはそこを数秒眺め、それから老婆に視線を移して、

「お兄ちゃん、大丈夫かな？」

「……………」

老婆は少し沈黙してから、

「大丈夫でも、そうでなくとも。私達に出来ることなど何もありません」

「そう、なのかなあ……」

恐らくはこれがあれば、トンガリ頭の少年の助けになるかもしれない。

いや、必ずなる。

だがこれを使えば、何が起こるか分からない。

これを使う決意など幼きシアルにはない。

だから今、彼女に出来る事はただただ、彼の無事を祈ることだけなのだ。

威勢よく病院を飛び出して、死ぬ間際だったデネブを救出したロックマンは肩にデネブを担ぎながら大鹿の顔を持つアルデバランと対峙していた。

山一つ消し飛ばした強敵アルデバランにロックマンは焦りの顔を見せる。

対するアルデバランはずっと戦いたかった相手に歓喜の声を上げる。そんな中、ロックマンとウォーロックは、

「山一つ消すなんて怖いなあ……」

『何、情けねえこと言ってるやがんだ。そんな化けモンと今から相手にしようって言うのに……』

コソコソ、と話していた。
そんな時、ロックマンはある事に気がついた。

「あれ、デネブ。ランドマークちゃんは？」

「……………さ、先に病院に行つて貰つてる。あの爆発には巻き込まれて無いと思うよ。……………多分多分」

「多分つて何！？ 怖いんですけどっ！？」

ロックに劣らずデネブも大雑把だなあ、とロックマンは思いながら前方に顔を向け、アルデバランに視線を移す。
しかし既にそこにはアルデバランは居ない。

突然、ロックマンはデネブごと横に吹っ飛ばされた。

「ッ！？」

ロックマンは向かい側のウェーブロードに乗り移ることで難を乗り切るが、脇腹に激しい痛みを感じた。

アルデバランの持つ“アイムール鉄槌”をもろに喰らつたのだろう。

「無意味なお喋りなどいらない！ 肉体と肉体の激しいぶつかり合い！ それこそが、今、必要なことなのだあああああああああ
あ！」

ロックマン達の向かい側のウェーブロードで叫んでいるアルデバランをロックマンは遠目で見ながら、

「元気が良いね……………」

「……………そ、そういう奴なんだよ。……………性格性格」

ロックマンは肩に担いでいるデネブをウェーブロードに降ろした。肩にデネブを担いだまま、アルデバランと戦うことが出来ないからだ。

ロックマンは、デネブの全身に付く痣を見て、それからアルデバランに視線を移す。

「じゃ、始めようか」

言葉通り、それが戦いの合図だった。

ロックマンはバトルカード・ハンマーウェポンを、アルデバランはアルデバラン“鉄槌”を、真正面から激突させる。

衝撃波が無尽蔵に撒き散らされ、火花が散る。

互いの全力と全力のぶつかり合いは両者の勢いを失わせ、ウェーブロードに着地も出来ずに重力落下する。

だが両者はそれも気にせず、ただ互いの攻撃をぶつかり合わせる。その度に火花が散り、攻撃を相殺させていく。

ロックマンは決め手としてハンマーウェポンを振り下ろす、だが遅い。

ドンッ！ と重い音と同時にロックマンは後方に吹っ飛ばされる。

その場所はアルデバランの攻撃で全て平地にされていたので何の障害物も無い。

そのためロックマンは吹っ飛ばされた勢いも殺せず、地面に何バウンドしながら転がった。

『大丈夫か！ スバル？』

「う、うん……」

立ち上がるうとするロックマンに更に、もう一振り。

“鉄槌”が振り落とされた。

「ッ！」

ロックマンはそれを横に飛ぶことで交わり、態勢を整えるとアルデバランに向けてロックバスターを放った。

だがそれはアルデバランの体に命中するも、ロックバスターは細かく消え失せた。

匍匐ほふくの格好をしたロックマンは後方に跳び、一度アルデバランとの距離を取る。

『旅の途中で嫌な敵に会ったもんだぜ』

「うん、全くの同感だよ。……しかしそれにしても」

何でアイツは来たんだろう、ロックマンはそう思った。

デネブの話によるとヒマナラ村でスバルは鍵となっただけらしい。

ならば連れ去るような事はしても、ロックマンに危害を加える様な事はしないと考えていた。

だが違った。

アルデバランは明確に彼を、ロックマンを殺そうとしている。

ロックマンはそれを疑問に思い、思わず口にしてしまった。

「何で僕を殺そうとするんだ！」

するとアルデバランは首を傾げながら、

「戦いに遠慮はいるのか？」

どうやら何の裏も無いらしい。

彼は単純な戦闘バカだ、とロックマンは思った。

五十二話 一つのがまま

ゴスロリ少女ランドマークはヒマナラ山脈麓病院に辿り着いた。山が一つ消失した時はヒヤヒヤしたものだが、大した怪我も無く無事に辿り着いた。

ヒマナラ山脈麓病院はとても大きな病院であるため避難も大変なのだろうか、まだ看護師が患者の避難をしていた。

玄関前の広場に沢山の患者が居るのは看護師の努力の力だろう。

ランドマークは首をキョロキョロと動かし、何処か座れるところが無いか探す。

しかし見つからず、溜め息をついたところで見知った者を見た。

若紫色のツインテールの上に更にツバ付きの帽子を被った車椅子の女の子、九重シアルの姿を。

いつも近くに居る老婆の姿は無く、一人で車椅子を動かしていた。普段そんな力仕事をしないせいか、少し進んで休む、少し進んでまた休む、と言った具合であった。

ランドマークは数多い患者の間を縫って、彼女の元に向かう。

漸く人の間を抜けて、ランドマークは車椅子の少女シアルの前に立つ。

驚いた顔をしているシアルに向けてランドマークは、

「何をしているのだ？」

と、声を掛けた。

当のシアルは見せたくないものを見せてしまったという様な顔をしながら、目を逸らした。

ランドマークは問い詰めたりはせず、シアルが向かっていた先の方を見た。

北西の方角を。

ハッ、とランドマークは気づいたような顔をしてシアルを見る。

「だ、だって……心配なんだもん……」

心配なのは分かるが危ないぞ、とランドマークは大人な発言をしているのだが、内心では、

（あの野郎、またガツシリと女の心を掴みやがって……！ あの女
誑たふらしがああああああ……！！）

と、何やら黒くて不穏なオーラがランドマークから発生していた。
ヒツ……！ と怯えた声が聞こえたことでランドマークは我に返る。
そしてシアルをまじまじと見る。

それから次第に視線を下に移していき、胸部へと釘付けにする。
真っ平らだった。

「（よしっ……！）」

「？」

ガツポーズを決めるランドマークではあるが、自分とそこまで変わ
わらないことには気がつかない。

一気にご機嫌気分が変わったランドマーク。

突然、彼女に対し今まであまり喋らなかったシアルは告げる。

「わがまま、聞いて貰っても良いですか……？」

ロックマンとアルデバランは何度目かの激突をする。

それは恐ろしい轟音を発し、その場の物体を薙ぎ払っていく。

そこは沢山の草花が咲く樹林だった。

しかしもう既にそこに草一つ存在しない。

完全な土色の地面が広がる世界と化していたのだ。

ロックマンはそれを引け目に感じながらも、目の前の敵の攻撃を払うのに精一杯であった。

少しでも気を許せば、ロックマンはアルデバランの餌食となるためだ。

「バトルカード・ブレイクサーベル!!」

「ぬうううううううううううッ!!」

ゴソッ！ という音と共に両者の攻撃が激突し、その場の地面をまた決る。

不自然なクレーターが地面にでき、両者は後方に跳ぶ。

だが跳ぶだけでは終わらない、着地するまでの過程でロックマンはキャノンを、アルデバランは咆哮を炸裂させ両者の攻撃を激突、相殺させる。

まさに一瞬の油断が命取りなのだ。

ロックマンは横に高速で移動しながら、

「少しは頭を使ったら？ このままじゃ、地球が壊れかねないよっ
!!」

「構わない！ 今のこの戦いが続けられるなら、地球がどうなるう

と知ったこつちや無い！」

アルデバランは真つ直ぐ跳んだ。横に移動するロックマンはアルデバランをブレイクサーベルで応える。

また相殺、互いに接近戦を試みるも何も起こらない。

相殺、相殺、相殺、相殺。

だがここで少し戦況が変わる。

アルデバランの朽葉色の宝具“アイテムル鉄槌”がロックマンの横腹に直撃したのだ。

ノーバウンドで数十メートル吹っ飛ばされたロックマンは細かい息を吐き出しながら、地面に転がった。

横腹の激痛に歯を食いしばり、尚立ち上がろうと地面を掴むロックマン。

(…………クソツ…………！)

突然。

コロコロツ、と妙な音をロックマンは耳にした。

視線を上げて見れば、戦いで地面を削って出来た瓦礫、それらが全てアルデバランに向かっていた。

いや、正確にはアルデバランが持つ宝具“アイテムル鉄槌”に向けて。

ロックマンは一気に血の気が引いた。

あの技を、山一つ消失させたあの技を、アルデバランは実行しようとしているのか。

『スバル、やばいぞ…………！早くここから離れねえと』

「だ、駄目だ。この技をこんなところで使わせたら、本当にここがまずい事になる」

先程からの戦いでここは平地よりも更に掘り下げた場所と化していた。

それに加えて、山を一つ削る技を繰り返せば、一気にここは崩壊する。

崩壊が始まればそれを引き金にそれは連鎖し、地球が終末を迎える。ここで喰い止めなければ、ロックマンはそう思い、必死に立ち上がろうとする。

だが立ち上がれない。

予想以上に疲労が溜まっていたようだ。

(これは……本当にマズイかも、ね……)

そんなロックマンは信じられないものを目にした。

何故ここに居る、ロックマンはそう思った。

視界に入ったのは二つの影。

二つの影はアルデバランとロックマンの間を隔てるようにやって来た。

片方はゴスロリの姿。

片方は車椅子に乗った姿。

そう、ランドマークとシアルだ。

戦場に二人の少女がやって来た。

車椅子の少女、シアルは車椅子をロックマンの方に向け。

微笑を浮かべて、告げた。

「私、やってみるね」

言い終わるとシアルは視線をロックマンからアルデバランに移し、決意に満ち溢れた目で直視する。

そして怨念の炎がその巨体を囲むようにクルクルと回っていた。

化物の名は、『ネビユラグレイ』。

二百年の時を経て、再び、この地に最悪のプログラムが現れた。

五十三話 『ネビユラグレイ』

『奥様！ 赤ん坊が生まれましたよ！』

『え、ええ……、それで、性別は？』

『女の子です！ 元気一ぱっ ツ！？』

『どう、したの？』

『奥様………』

『ッ ……！？ ま、まさか！？』

『ええ、四代目の決定です』

私は生まれた時から背中に紫色の紋章があった。

それが一族の『ネビユラグレイ』を封印する者の証だった。

『ネビユラグレイ』は遺伝する。

そして選ばれた子は『ネビユラグレイ』の悪に体全身を蝕まれ、常人よりも早く死を迎える。

私、九重シアルはその四代目。

父が三代目であつたらしいが、早死にしたらしい。

私は生まれてすぐ、足を侵食された。

だから私は歩くことが出来ず、物心ついた時から病院のベットに居た。

私は歩きたかった。

たまに病室の廊下から聞こえてくる子供の笑い声に心を動かされ、歩こうと試したこともあった。

だけど歩けなかった。

私の異変に気づいて、病室を訪ねて来た人は数多く居る。

だがいざ話を聞くと皆、口を揃えてこう罵った。

『化け物!』と。

私は悲しかった。

自分が化け物扱いされていることが。

世界を救うために、これが世界に漏れ出さないように、頑張っているのに、それなのに化け物扱いされる。

とても、悲しかった。

私は人間を信じられなくなった。

だから自分のことを知られないように暴力で訴えるようになった。

化け物扱いされる前に暴力で追い出そうとしたのだ。

そのおかげで自分を化け物扱いする者はいなくなった。

しかし皆、恐れて近づかなくなった。

でもそれでも良いと思った。

化け物扱いされるならその方が良いと思ったからだ。

ある日、トイレに行く途中でトンガリ頭の少年に出会った。

彼は私の異変に気づいたのか。

尻餅をついたり、眼を見開いたりしていた。

彼は必ず病室に来ると思って、暴力で追い出すため護衛人に準備をさせた。

案の定、彼は来た。

女二人を引き連れて。

私はいつもどおり暴力で訴えた。

化け物扱いされる前に。

だが彼は再びやって来た。

私は怖かった。

また化け物扱いされるのか、と。

だけど違った。

彼は罵らず、ただ私の身を案じてくれた。
今まで言われた事のない言葉だった。
そして心が温かった。

私は、私の身を案じてくれた彼を助きたい。
救われるなら私は躊躇無くこれを使う。

先代の長年の努力を無に返すようなことであっても、

私は彼を助きたい

「何だこれは……」

ロックマンは思わず口に出していた。

デネブを戦闘不能とし、山を一つ消滅させた強敵アルデバランが。

何故、あんなにも簡単にやられているんだ？

シアルの体から出現した霧のような物から姿を形成させた『ネビュラグレイ』の矛先はアルデバランだった。

『ネビュラグレイ』の腕の一振りにはアルデバランを吹き飛ばし、アルデバランの攻撃は全て無効化する。

その声と共に、バツチイツ！ と何か弾ける音がした。その声はアルデバランのものでもなく、弾ける音もアルデバランが起こしたのではない。

完全な第三者が起こしたものの。

アルデバランは何時までも訪れない死に首をかしげて、ゆっくりと瞼を開けた。

『ネビュラグレイ』の肘から先が無くなっていた。

パチパチ、と漏れる音と共に『ネビュラグレイ』の傷口から電撃が散っていた。

原因、それは『冬の六角形』リーダー兼“参謀者”である“磊落多情”プロキオン。

プロキオンが『ネビュラグレイ』の腕を？ぎ取り、アルデバランを救ったのだ。

「……ってか？」

一瞬、何を言っているのか分からなかったがそれは前の台詞の続きであることに気がつく、アルデバランは微笑を含み、

「そう、だな……。フーツ……」

「フン……、とにかくさつさとトンスラだ。やれやれ命令拒否してロックマンに戦いを挑むとは馬鹿だなあ、テメエ。知ってるけど」

「“参謀者”のクセに前線に出てるお前に言われたくねえよ。お前は後方で引き籠もって作戦立てときゃ良いんだよ」

「自分はインドア派じゃねえ。アウトドア派だ」

お前本当に“参謀者”なのか……？ とアルデバランは呟きながらその場から姿を消した。

同じくプロキオンもアルデバランが消えたのを確認すると、自分もその場を後にする。

『ネビユラグレイ』に立ち向かう青い戦士を視界に入れながら。

五十四話 再び

その場に樹林があつた、と言つても誰一人信じる者は居ないであるう。

それほどまでにその場は最悪な状態となつていた。

その場にあつた山は姿を消し、無数のクレーターができていた。それも先程からここで連続して戦いが起きているためだ。

まず“先陣者”デネブと“豪傑豪壮”アルデバランの戦い。

次にロツクマンと同じく“豪傑豪壮”アルデバランの戦い。

そして、ロツクマンと『ネビュラグレイ』の戦い。

ロツクマンは今も『ネビュラグレイ』と戦つていた。

ロツクマンは余計な小細工はせず、ゴツゴツとした地面を蹴つて『ネビュラグレイ』の懐へと突っ込んでいく。

『ネビュラグレイ』がアルデバランを追い詰めたのは救いとなつたが、どうやら扱いきれておらずそのまま暴れ始めたのだ。

シアルとランドマークが居る場所から姿を現している『ネビュラグレイ』、ロツクマンは彼女等の身を心配しながらも『ネビュラグレイ』を止めることに専念する。

『ネビュラグレイ』を止める事は結果として彼女等を助けることとなるからだ。

「ロツクバスターアアー！」

放つたロツクバスターは『ネビュラグレイ』の本体へと直撃するも、まるで雲を相手にしているかのように通り抜けていく。

正面突破するロツクマンに対して『ネビュラグレイ』は身動き一つ取らなかつた。

それなのに、容赦なくロツクマンに『ネビュラグレイ』の攻撃が襲

い掛かる。

いくつもの漆黒の炎の柱が地面を這いながらロックマンの行路を妨げる。

ロックマンは跳ぶ事でそれをやり過ぎし、再び地面に着地するが。それを読んでいたかのように地面から漆黒の炎がロックマンに直撃する。

「グツ……、い、痛つ……」

その間も『ネビュラグレイ』は動き一つ取らない。

それなのにこれ程までの遠距離攻撃を使えるとは、甚だしいものだ。流石、二百年前の英雄達を苦しめた事はある。

ロックマンは立ち上がり、

「バトルカード・オーラ！」

オーラがロックマンを包み込み、『ネビュラグレイ』の攻撃から身を守る。

しかしそれが長く続く筈もなく、数十秒でそれは呆気なく破壊されてしまった。

だが時間は稼げた、ロックマンはまた一步『ネビュラグレイ』に近づいた。

『ネビュラグレイ』からの攻撃は止むことを知らないが、ロックマンはそれらを全て交わしていく。

そして遂に『ネビュラグレイ』の眼の鼻の先にまでやって来た。

「こうなれば直接攻撃しかない。行くぞ！」

しかしそんな意気込んだロックマンには、幸運はやって来なかった。『ネビュラグレイ』のすぐ下、そこに何かの黒い影が作られていた。

それらは幾つも柱のように立ち上がり、そして姿を形成させていく。現れたのは真つ黒い人型の何か。

それが視界の端から視界の端まで全てを埋め尽くして、『ネビュラグレイ』への行路を遮断していた。

まさかこれほどとは……、とロックマンは絶望した。

これを倒さないといけないのは体力的にも厳しい、そう考えたロックマンは知らず知らずの内にあれを使おうとしていた。

「ノイズ率、計測不能……。連戦したから凄いノイズ率だ」

『おいスバル、まさか……！』

「そのまさかだよ。僕はあれを使う」

ウォーロックは信じられないような顔をしながら、

『お前、デネブの話聞いてたのか！？ この前それやったら收拾つかなかつたんだぞ！』

「されるがままになるわけじゃない」

ロックマンは一度息をつくと、

「今度こそ僕がアイツを操ってやる」

瞬間、紺青色の柱が出現した。

『ネビュラグレイ』出現と共に発生した暗雲を突き破り、その柱は光り輝いていた。

聞こえてくるのは地鳴りの音と雷が鳴り響く音、そして獣の咆哮。その柱にはあの『ネビュラグレイ』でさえも後退りをするほどであった。

『ネビュラグレイ』はその柱に共鳴するように叫ぶ。

そして柱もその叫びに共鳴するように咆哮を上げる。

するとその声は知ったことではないと言った調子で、

《ナラバ ゴウダツ スルマデエエエ!!》

(強奪ねえ)。僕は君に主導権は渡さないよ)

《ドノクチガ イツテイル? ゼンカイハ ナススベモ ナカッタ

デハナイカアアア!!》

確かに、とロックマンは否定もせず肯定した。

だが、彼は諦めない。

(だけど前回のようにはいかないぞ)

《ゼンカイカラ ソコマデ ジカンハ タツテイナイ デアロウガ
アアア!!》

(そうだよ、全然時間は経ってない。だけど、僕は学んだ。同じ過
ちは繰り返さない)

《ソウカ ナラバ ソノイキゴミ ミセテモラオウカアアア!!》

そして激痛。

激痛がロックマンの体全身を襲う。

まるで体一つに対して精神が二つあるような、第二者が割り込んで
くる…いや、二つの精神が混ざり合うような心地が感じられた。

それでも、そうであっても、ロックマンの意志だけは折れない。

(シアルちゃんは僕を守るために『ネビュラグレイ』を躊躇なく使
った。僕をアルデバランから守ってくれた。そして今、彼女は困っ
ている。今度は)

僕の番だ。

(僕はこれを完全に掌握する。そしてこれを行使してシアルちゃん

を守る……！)

スツ、と何かが体から抜けたような感じがした。
先程の激痛が嘘のように引いていったのだ。

《ソウカ……》

(……?)

次の瞬間、その頭に響く声は機械的な口調から温厚な声に変わっていた。

《だったら僕はこれを君に継ぐ。この長い間、沢山のことがあり過ぎた。僕はもう僕じゃないんだ》

(……、)

《高い意志を持った君ならこれを操れると思うよ。……多分》

(多分って……)

《ハハツ、仕方ないじゃないか。現に君は一度失敗して、主導権を握られている》

(うーん。何か急に緊張感の感じられない雰囲気になっちゃたなあ……)

《うん、僕に代わっちゃったからね。そこら辺は平にご容赦、だね》

(話の軌道がどんどん逸れてきてるけど、結局大丈夫なんだよね?)

《だからそれは多分だね》

(うん………)

《なあに、大丈夫》

《君は彼に似ているから、ね》

紺青色の柱が勢いを無くして、途中で途切れた。

シユウシユウと煙が舞う中、『ネビュラグレイ』が出現させた真つ黒い人型の何かがロックマンが居た場所へと一斉に飛び掛る。

夜空を覆い隠すほどの数のそれらは、ロックマンに襲い掛かる過程で、突然。

跡形も無く消え失せた。

それらが消え失せると同時に煙も晴れ、視界は良好になる。

そのロックマンが居た場所を中心に不自然なクレーターができ、そこに一体の電波体。

紺青色の刺々しいボディに両手には強靱の爪、臀部からは一本の尾が蠢いていた。

そう獣の姿をした、ロックマンだ。

「ギャオルガアアアアアアアアアアアアッ！！」

真つ黒な人型をした何かを倒した余韻に浸りながら、彼は一瞬で上に跳んだ。

そして遅れて血の様に真つ赤な掌がその場に突き刺さった。

そう、それは今まで動きを見せることの無かった『ネビュラグレイ』の掌だ。

腕から切り離されたその掌は土色の粉塵を撒き散らしながら、上に跳んだ獣を追うように、向かう先を上へと変更した。

風を切り裂くその掌が獣に迫る。
だがその掌は呆気なく爆発する。

見れば、右腕を降り下げた格好をしている獣の姿。

あの『ネビュラグレイ』と直角の戦いを繰り返している獣は、

「こ、怖いなあ……………」

と、取っている行動とは百八十度雰囲気が違う台詞を口にした。
聞き間違いなどではない。

正真正銘、あの獣が口にしたものだ。

『おいおい、締まらねえな……………。もっとカッチョイー台詞を言って
欲しいもんだぜ』

続けて獣から聞こえた声は聞き覚えのある声。
スバルのウィザード、ウォーロックのものだ。
そう、未だ制御が難しいものの彼はこれを我が物にしたのだ。

「そんな台詞も言えないほどアイツが強いだよね」

『でもこの力があれば、或いは……………』

「うん。これを使えば何とかできるかもしれない……………！」

獣の姿をしたロックマンは頭に響いた聞いたこともない言葉を、告
げる。

「“ 電脳獣グレイガ” の力を……………！！」

五十五話 電腦獣の力

獣の姿をしたロックマンはウェーブロードを跳んだ。

それは音速を超え、あっという間に『ネビュラグレイ』の眼前へと移動し。

「ハアアアアアアツッ!!」

その強靱な爪で横に切り裂いた。

グニヤリ、と『ネビュラグレイ』の顔は歪み、形を失い消失する。

勝利を確信したロックマンであったが、次の瞬間に『ネビュラグレイ』の顔が完全に再生したことにめげる。

『ネビュラグレイ』は不死身であるという話は本当だったのかもしれない。

だがロックマンは信じない、この世に不死身は居ないと信じているから。

故に彼は再び『ネビュラグレイ』に襲い掛かる。

どんなに再生してもしつかりとダメージは与えていると思いながら。

「その辺で止めておきなよ。……………妨害妨害」

ロックマンは『ネビュラグレイ』に襲い掛かる途中でその動きを止め、その場で浮遊する。

それは目の前で同じく浮遊するデネブが立っていたからだ。

見れば体全身は傷だらけで、アルデバランとの戦闘の傷が浮かばれる。

彼女は口の端から零れる血を手の甲で拭いながら、

「奴は不死身、君がその力を使ったとしても奴は倒れない。……………」

…忠告忠告」

「じゃあ、どうしたら良いんだよっ!？」

獣の呻き声と共に発せられるその言葉にデネブは体を硬直させながらも、必死に言葉を紡ぐ。

「ね、『ネビユラグレイ』本体に攻撃を与えられないのなら、それを操る人間がまた封じるしか方法はない。……………身震身震」

「つまり、シアルが奴を封印するしかねえって言うのか？ また自分の体に」

デネブは首を縦に振り、肯定する。

納得がないような顔をしているのはロックマンだ。

「またシアルちゃんにこの苦しみを与えなくちゃいけないのか!？」

僕はそんなの許せない……………!」

『ネビユラグレイ』がシアルの体を通して具現化しているこの状態。恐らく姿を現している『ネビユラグレイ』を倒せば、シアルはこの呪いから解き放たれる。

ロックマンはそう思い、みすみす『ネビユラグレイ』を再び体に戻すのに抵抗を覚えているのだ。

だが、

「こうやって『ネビユラグレイ』が姿を現している脅威を考えてみてよ。このまま出現させたままだと被害は拡大するよ。ここは九重シアルに任せようじゃない。……………委任委任」

「って言う事は何？ 被害は大きいより小さいほうが良い。シアルちゃんだけに背負わせよう、そう言う事なのか!？」

「というよりは今はそれしか方法がないと言った方が良いかな。」

ネビユラグレイ』は絶対に倒すことが出来ない。ならば封じるしかない。そして封じるには九重シアルしか居ない。そういう考えの結果だよ。……………連鎖連鎖」

「ッー！」

ロックマンは言い返せなかった。

まさしくそれは正論であるためだ。

だが諦めきれない、まだ小さなシアルには重荷過ぎる。だが今はそれしか方法がない。

「 分かった。受け入れるよ」

「……………良く言った。……………立派立派」

その時、ロックマンは初めて気づいた。

デネブの両手が震えていることに。

彼女も少しは引け目に考えたんだなあ、とロックマンは思いながら視線を『ネビユラグレイ』へと移す。

未だそれは力強い覇気を出し、周囲を威圧で押し潰す。

「私は奴をこちらに気を引かせる。その間に君は九重シアルと合流するんだ、一緒に居るランドマークともね。……………作戦作戦」

「できる？」

「できるもなにもやるしかないでしょっ！……………散開散開」

言葉が終わると同時に二人はまったく別の方向へ跳んだ。

ロックマンは地面を蹴りながら横目で『ネビユラグレイ』の気を引こうと努めているデネブを捉えていた。

そんな中、地面から漆黒の炎がロックマンに襲い掛かった。

『おおおいつ！？ あのバカ、全く気引けてねえじゃねえか！？』

獣であったことを思い出し納得した。

ポカポカ、とロックマンを両手で殴るランドマーク。

音は可愛くとも、彼女の背が低く全ての拳がロックマンの鳩尾みぞおちにク
リーヒットした。

数十秒経ち、何もしてこないことに違和感を覚えたランドマークは
そのパンチを中断した。

ロックマンは最高の笑みを浮かべながら（鳩尾が痛むので少し青い
が）、

「僕だよ、僕。ちゃんと自我持つてるから……ね」

「す、すばるか……。驚かせおつて……」

大声を上げたり人体の急所を突いてきたりと驚いたのはこっちだ、
という言葉をロックマンは飲み込んで、顔をシアルに向ける。

そこで彼は彼女の異変を感じた。

彼女、シアルは顔が真っ青で、小刻みに体が震えていた。

瞼は閉じており、額からはダラダラと嫌な汗が止め処なく溢れ出す。
ランドマークは困った表情を浮かべながら、

「真っ白い空間になってから何故かこんな様子なのだ」

「真っ白い空間……、つまり『ネビュラグレイ』を出してからか…

…」

ねびゆらぐれい？ と首を傾げるランドマークを横目にロックマン
は顎を摩る。

これは考える時の仕草だ。

（とりあえず電波変換は解除するか……）

ロックマンは細かい粒子に包まれ、少年スバルへと姿を変えた。

スバルは暫し考え、シアルの両肩を掴んだ。

「どうしたら君が戻るのか分からない」

方法は見つからなかった。

だから、だからこそ。

「早く元のシアルちゃんに戻ってよ！ 僕は君を待ってるんだよ！」

自分の内心を包み隠さず告げる。

戻るとは思っていない。

ただぶつける、それだけだ。

「お願いだよ」

そう言つてスバルは彼女を抱き締めた。

別に疚やましい事などない。

彼女の肩に手を置いて体が冷え切っていたのを感じたから、温めようと考えての行動だった。

ただそれだけの行動だった筈なのだが。

「えっ……、ああ……………」

弱々しい声がシアルの元から聞こえ、確かに瞳に光が灯った。

そしてスバルの背中にシアルの手が回された。

弱々しくあるが、同時にしっかりともしっかりもしていた。

そして。

その真つ白い空間に亀裂が入った。

外の景色が覗き、完全に空間は消え失せた。

そしてそれと同時に。

二百年前の英雄達にも倒されず、“豪傑豪壮”を叩きのめし、ロックマンもデネブも苦しめた。

『ネビュラグレイ』が。

あれ程の強さを誇っていた『ネビュラグレイ』が。

いとも簡単に消え失せた。

そしてフツ、と瞳に光が失われそのまま彼女は気絶した。

五十六話 誓いの……

あの激闘の夜が明けた。

スバルは眼が覚めると床に転がっていた。

鼻をヒクヒクと動かすと独特な薬品の臭いが充満しており、すぐに彼はそこがヒマナラ山脈麓病院であると認識できた。

しかし何故、床に転がっているのかは理解できなかった。

「……、」

彼は体を起こしてから首をキョロキョロと動かすと、すぐ近くに彼と同じように転がっているランドマークとデネブの姿があった。

とても気持ち良さそうな顔をしていたので彼女達を起こさないようにゆっくりと立ち上がる。

床で寝ていたため尻から首に掛けて痛みが走り、とても肩が凝っていた。

「あ、ここはシアルちゃんの……」

スバルはベットで眠るシアルの姿を見て、初めてここがシアルの病室であると分かった。

ハンターを覗けば、ウォーロックの姿はなかった。

恐らくウィルス狩りにでも行ったのだろう、とスバルは思いながら大きく伸びをする。

「朝日が眩しいねえ」

「朝日ではありません、白日です」

何も考えず口に出した言葉に返答が返ってきた。

後ろを振り向けば、美しい着物姿のシアルに付き添っていた老婆が立っていた。

老婆は相変わらず渋い顔を更に渋くしながら、

「ここから離れていた所で貴方方あなたがたとシアル様が倒れていらっしやっただけで助け出したのです」

「んで、シアルちゃんはベットに寝かせて、僕達は冷たい床に寝かせた、と。対応が天と地ほど違うよね」

「シアル様と一緒に部屋で眠れたことを感謝してください。と言うよりも同じ空気を吸えただけでも感謝してください」

「明らかにキャラが変わってますよね……、初めて会った時から……」

「貴方がシアル様を誘惑するからです。ちょっとシアル様から眼を離れたら何処かに行ってしまう、あまつさえ貴方のところに向かうなんて……。責任を取ってください！」

「誘惑なんてしてませんからねっ！？ 言い掛かりは止よして下さい！」

人が眠る狭い病室でこんなに騒いでいたためシアル、ランドマーク、デネブの三人は眼が覚めてしまった。

三人は何事かと眼を擦りながら、スバルと老婆の交互を見る。

「皆が起きました所で、そろそろ『ネビュラグレイ』の話をしませんか」

その老婆の言葉にそれぞれは身を強張らせた。

老婆は眉間に皺を寄せながら、

「今回の件で『ネビュラグレイ』は封印を解除されました。おかげで先代の努力は水の泡です」

「ごめんね……、でもスバルお兄ちゃんを助けたかったの。お願い、怒らないで」

スバルは新たな呼び名で呼ばれたことに不思議に思いながら、シアルの顔を見る。

シアルもこちらを見ていたらしく眼が合ってしまい、彼女は頬を赤く染めながら眼を逸らす。

？ と首を傾げるスバルは、ジト目でスバルの事を見るランドマークに気づけなかった。

老婆は困ったように眉を顰めながら、

「まあ怒りたいですが、もう過ぎてしまったことです。それよりもシアル様の命の危機が強まったことに引き締めてください」

「命の危機……？ 『ネビュラグレイ』は消えたんじゃない……」

スバルの呟きに老婆は首をグリン、と横に曲げて、

「冗談じゃありません！ あれはその場凌ぎに過ぎません！ 『ネビュラグレイ』はシアル様の体に戻ってしまっただけです！」

「なるほど、つまり命の危険って言うのは今までやってきた封印の証を剥ぎ取った状態で『ネビュラグレイ』が九重シアルの体の中に舞い戻ったため、か。……………納得納得」

つまりだ、消えたと思った『ネビュラグレイ』はシアルの体に戻っただけだったのだ。

封印を解かれ、更に強化化した状態で。

得などない、残ったのはシアルの命の危機だ。

「初代は早くにお亡くなりになられました。それは『ネビュラグレイ』を封印する初めの頃で、『ネビュラグレイ』の力が強大であっ

たためです。逆にシアル様がこのように封印していけているのは先代の努力からこそです」

「確かに、何か……重たい気がするよ……」

シアルの呟きに皆は心配する。

スバルは彼女を見ながら、

「一体どうしたら良いんだろう……」

「スバル君。………呼号呼号」

デネブの呼び出しにスバルは首を向ける。

するとデネブはスバルに近づき首根っこを掴む、病室に居る三人は不審そうな顔で二人を見るが、デネブは全く気にせずそのまま廊下にスバルを連れて行く。

廊下に連行させられたスバルは首を傾げながら、

「………どしたの？」

「いやあね……、少しここに関わりすぎたと思うんだ。そろそろここを出ようかなと思ってさ。………提案提案」

「えっ、でもシアルちゃんが……」

「君はお節介過ぎるよ。まさか私達の目的を忘れちゃった訳じゃないよね？ ……質問質問」

確かにスバルは優しすぎる。

旅を続ける上で困った人が居る度に助けていてはキリがない。

スバルにとって優先順位が目の前の問題が一番となっていくが、そうはいかない。

それで本当の目的を見失っているのは本末転倒なのだ。

「………もう一度言うよ、私達はここから出る。あの娘の事はあちら

に任せておくんだ。あれは……私達がどこまでできる代物じゃないんだ。……確認確認」

「……………」

スバルは黙ったまま顎を摩り、下唇を噛む。

だが彼は一度首を縦に振ると、再び病室に戻っていく。

その後すぐに絶句の声韻が聞こえてきたと言う。

その後、スバル達は病院前の広場にやって来た。

見送りには二つの影、シアルと老婆だ。

スバルは両手をポケットに突っ込みながら、

「じゃ、お別れですね。今までありがとうございました」

「いえ、こちらも一応お礼はして置きたいと思います。『ネビュラグレイ』を止めてくれて有難う御座います」

「一応、か……」

余計な言葉を呟いたランドマークの口をスバルは押さえつつ、笑顔を保つ。

いつも通りの顔の老婆、そして悲しそうな顔をしているシアル。

それに気づいたスバルは、

「大丈夫だよ、永遠の別れじゃあるまいし」
「で、でも……」

口籠もるシアル、スバルは笑顔を保ちながら首を横に傾げる。
すると意を決したような顔をしながらシアルがスバルに近づき、

「えい」
「ん？」

シアルは車椅子から跳び上がり、スバルに抱き着いた。
スバルは軽い重みを感じながら、それを受け止める。
落としてしまいそうだった為だけで、別に深い意味はない。
それなのに、

「何でそんなに睨むの……？」
「うるさい！」

ランドマークがスバルを睨みつける。
何で僕怒られてるんだ、とスバルは思いながらシアルを支えながら、
車椅子に戻してあげようとする。
だがシアルは中々スバルの胸から離れようとしなない。

「し、シアルちゃん……？」
「私も一緒に行く！ また一人は嫌だよっ！」
「そ、そう言われても……」

この場にウォーロックが居れば腹を抱えて笑っていることであろう。
居るは居るで困るのだが、居なかった場合力オスな状況となるので
それはそれで困る、何せ気を休ませる所がないからだ。

「シアル様、我がままはそれぐらいにして下さい」
「やだっ！ スバルお兄ちゃんと一緒に行くのっ！！」

困ったなあ、とスバルは頭を掻こうとするが、両手がシアルの体を支えるのに使っているのを思い出した。
スバルは少し考えてから、告げる。

「シアルちゃん、僕は必ず帰ってくるよ。『ネビュラグレイ』を倒すために、そして君に会う為に」

「……、」

「『ネビュラグレイ』に対抗するには正の力が必須だって言う事が分かったんだ。だから僕はこのたびを通して沢山の楽しいこととか、正の力になるものを沢山見たり聞いたりしてくる」

『ネビュラグレイ』は世界中の負の力を糧かてとして生きている。

それを倒すには世界中から負の力が消え失せればいいと思っていたが、他にも方法があると言うことにスバルは『ネビュラグレイ』と戦っている内に気づいたのだ。

スバルがシアルを抱き締めた時、『ネビュラグレイ』は姿を消した。あれは恐らくシアルの中の正の力が『ネビュラグレイ』を操る負の力を上回ったからだ。

抱き締めた時、何で正の力が上がったかは分かんないけどね、友情かな？ とスバルはお得意の鈍感を華麗に披露しながら笑う。

「そして僕がここに戻った時、その正の力の話を聞かせてあげる。だから、君は僕の帰りを待っていてくれない？ 必ず……必ず帰ってくるから」

「うん」

シアルは腕の力を弱め、スバルの肩から顎を退かし、真正面からスバルの顔を見る。

その距離、僅か十センチ。

そして、

「私はスバルお兄ちゃんの帰りを待つ。この体、『ネビユラグレイ』に侵食され続けるものだとしても……私はずつつつつと待ってる！」

シアルは唇をスバルの頬にくっ付けた。

低学年相手のキス何てどうってことない、とスバルは心の中で思いながらも、

「くぁ……のわぁあああぁ！」

思いつきり動揺していた。

シアルは唇を離すと満面の笑みで、

「これが誓い。ちゃんと誓いを守ってよね！」

「あ、アハハハ……、最近の若い子は………」

スバルはキスをされたところを人差し指で恥ずかしそうに掻きながら、そう呟いた。

隣で睨みつけるランドマークとニヤニヤしているデネブ。

スバルはコホンッ、と咳払いを一つすると、

「じゃ、じゃあ、さようなら！」

「ええ、また会わない事を祈ります」

「いつてらっしゃーい！ ア・ナ・ター？」

スバル達、三人は背に二人の声を受けながら、その道を歩んでいく。

「あれ？ そういえばロツクは？」

「うーん、知らないなあ。……………不明不明」

「ランドマークちゃんは何か知ってる？」

「知るかつ！！」

「グハツ……………！ 何故殴る……………？」

『おっ！ お前等、楽しそうじゃねえか』

「ロツクウウウ！ 今ほど君が必要と思っただ事はない！ 君みたいな場違いな発言をしてくれる君を！」

『何だ？ 販^{けな}してやがんのか？』

「あれはホツといて良いよ。それより今まで何処に居たの？ ……

……………質問質問」

『ああ、ちよつと懐かしくて飽き飽きとしている電波反応を見つけてな』

「懐かしい？」

『まあ、完全に特定は出来てねえが……………、あれはFM星人の波長だぜ』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5196z/>

流星紀行文

2011年12月18日00時50分発行